

旧満洲国の「満鉄附属地神社」跡地調査からみた神社の様相

津田良樹

TSUDA Yoshiki

(COE 共同研究員)

中島三千男

NAKAJIMA Michio

(事業推進担当者)

堀内寛晃

HORIUCHI Hiroaki

(COE 調査研究協力者)

尚峰

SHANG Feng

(COE 調査研究協力者)

はじめに

本稿は2006年8月5日から14日にかけて行われた、旧満洲国（現中国東北部、以下「満洲国」と表記）の領域となった地域に建てられた神社の跡地調査についての報告とその分析である。

神奈川大学21世紀COEプログラムの第3班「環境と景観の資料化と体系化」の中の海外神社跡地グループは、初年度の旧樺太、2年度目の旧南洋群島、3年度目の旧朝鮮に続いて、4年度目・本年度は「満洲国」に建てられた神社の跡地調査を行った。⁽¹⁾

とくに、今回は広大な「満洲国」の領域の中でも、旧奉天（現瀋陽）から旧新京（現長春）にいたる南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄と略記する。）の附属地に建てられた神社（「満鉄附属地神社」）を中心に行った。

奉天神社、撫順神社、鉄嶺神社、開原神社、四平街神社、公主嶺神社、長春（新京）神社の7つの神社である。この他、「満鉄附属地神社」とは性格を異にする建国神廟、建国忠霊廟、西安神社の3社の調査も併せて行った。

「満洲国」に建てられた神社跡地の本格的な調査は初めての試みであるが、⁽²⁾「満洲国」の神社研究そのものにおいてもこれだけ集中的に「満鉄附属地神社」を対象にした研究は初めての試みである。

後で、詳しく述べるように「満鉄附属地神社」は全部で32社あり、従って今回は、その約5分の1の神社を調査した事になる。

以下、第I章においては、「満洲国」における神社創立の研究史及び概観を行い、第II章では対象を「満鉄附属地神社」にしぼってその特徴について述べ、第III章、第IV章で、実際に調査した「満鉄附属地神社」跡地の報告およびその分析を行いたい。

I 「満洲国」における神社設立の研究史とその概観

1 研究史⁽³⁾

戦前に「満洲国」の領域となった地域に建てられた神社の研究については、戦前の岩下傳四郎⁽⁴⁾、近藤喜博⁽⁵⁾、戦後の小笠原省三⁽⁶⁾、岡田米夫らによる、基礎的な統計・資料の紹介によって先鞭がつけられたが、本格的な研究は1984年に発表された島川雅史の論文を以って嚆矢とする。島川は「現人神と八紘一字の思想—満洲国建国神廟—⁽⁸⁾」において、1935, 36年段階の神社の設立状況を含む「満洲国」の宗教的状况を明らかにした上で、儒教国家として出発した「満洲国」が、国家神道を「より暴力的な形で“事実上の国教”化」していく過程を、1940年の建国神廟の創建を中心に分析した。この島川の研究を「満洲国」における神社研究の嚆矢とするならば、その水準を飛躍的に高めたのが嵯峨井建である。嵯峨井は1994年に建国神廟と建国忠霊廟についての実証的論文を発表するとともに、その4年後に『満洲の神社興亡史』という大著を上梓した⁽⁹⁾。

嵯峨井はこの書物において、「満洲国」の38の神社に関する、豊富な文献資料や聞き取りを駆使して「満洲国」に建てられた神社の「実像」を浮き彫りにした。とくに、嵯峨井は「満洲国」に建てられた神社は、海外神社の中で「最もバラエティに富んでいる」として、それを5つの形態に分類した⁽¹⁰⁾。①国家的神社（建国神廟、建国忠霊廟）、②都市型神社（主として満鉄附属地に建てられた神社。新京神社、奉天神社等）、③開拓団神社（弥栄神社等）、④軍隊内神社（東郷神社等）、⑤その他（以上のいずれにも属さない神社。新京一中の第一陣神社等）。

今回、我々が調査した10の神社の内、奉天神社から長春（新京）神社の7つの神社は②の都市型神社、建国神廟と建国忠霊廟の二つは①の国家的神社、残りの西安神社は⑤のその他（この場合は鉦山に建てられた神社）の神社にあたる。

今後、この5つに分類された神社の個別研究、とくに①～③の神社についてのそれを深めていき、それを総合する形で、「満洲国」における海外神社の総体がより明らかになるであろう。

本稿は、嵯峨井が分類した②都市型神社の中核となった「満鉄附属地神社」の研究、とくにその跡地に関する研究である。

2 「満洲国」における神社の概観

「満洲国」に建てられた神社一覧については、これまで近藤による137社の書き上げ（1940年7月現在⁽¹¹⁾）、岩下による167社の書き上げ（1941年1月現在⁽¹²⁾）、佐藤による180社の書き上げ（1941年8月1日現在⁽¹³⁾）があり、さらに嵯峨井の332社の書き上げがある⁽¹⁴⁾。嵯峨井の書き上げは「関東州満洲国神社一覧」（昭和16年8月1日現在）を基本に、その後は『満洲年鑑』（昭和19年版）等をもとに作成したものであるが、神社名等が不明であるものをも含めた数である。

最新の一覧は『神道史大辞典』付編「関東州及び満洲国の神社」（佐藤弘毅編⁽¹⁵⁾）である。この表は『満洲年鑑』（昭和20年版）を基本としたものであるが、1944年までに建てられた302社が書き上げられている。本稿ではこの佐藤の一覧を下に、「満洲国」における神社の概観をしておこう。

（1）設立年代

まず、設立年代についてみていくと、「満洲国」の領域となった地域に建てられた神社は、日露戦

争後の1905年に建てられた安東神社に始まるが、この地域における神社が急増するのは、何と云っても「満洲国」が成立した翌年の1933年からであるということである。1932年までに建てられた神社は僅かに38社で、残りの264社、全神社数の87%、実に約9割近くが「満洲国」の成立年以降に建てられているということである。

特に1930年代の後半、1939年から設立数は急増している。一般に海外神社は他の地域においても、1930年代の後半のいわゆる「皇民化政策」の展開にともなって急増するが、「満洲国」の場合は特に次の2点の要因が絡まっていた。

〔国家理念の変容〕一つは、「満洲国」は溥儀を中心とする旧清朝勢力の清朝復辟の意図を日本（関東軍）が利用して作りあげた傀儡国家であったが、建前としては溥儀を執政・皇帝として担ぎ、国家理念としては「順天安民」、「王道主義」、「道德仁愛」といった儒教に根ざした理念を打ち出して成立した「独立国家」であった。「満洲国」の成立当初から神道主義、惟神の道を国家理念としたものではなかった。しかし、これが変化していく。まず、その最初のきっかけになったのは1935年4月の溥儀の日本訪問（第1回）であった。溥儀はこの訪問後「回鑿訓民詔書」を發布して、天皇との精神的一体、日本と「満洲国」の一体性を強調する。しかしこの段階ではまだ、儒教的理念に日満一体化を加味したものであった。はっきりと「満洲国」の国家理念の中で神道的要素が優位を占める契機となったのが、紀元二千六百年祭が取り組まれた1940年7月の溥儀二度目の訪日後に發布した「国本奠定詔書」であった。ここで、溥儀は「建国神廟を立て天照大神を奉祀し厥の崇敬を尽し」と、清朝の祖宗に代えて天皇の皇祖神天照大神を祀る建国神廟の創建と、その崇敬を決めたのである。この「国本奠定詔書」が重視したのは惟神の道であった。これ以降、「満洲国」の統治理念に神道的要素が出るようになり、特に42年12月の「国民訓」ではそのトップに「一、国民は建国の淵源、惟神の道に発するを念い、崇敬を天照大神に致し忠誠を皇帝に尽くすべし」が掲げられ、建国の目標も「王道楽土」の建設ではなく、「大東亜共栄」⁽¹⁶⁾にとってかわった。「満洲国」の1930年代後半の神社の急増の一つの背景はこうした、「満洲国」の建国理念の改変が横たわっていたのである。こうして、学校生徒を中心に「満洲国」人の神社参拝の強制が強化されたのもこの時期からであった。⁽¹⁷⁾

〔開拓団神社〕⁽¹⁸⁾もう一つの背景は日本人開拓団の急増による、開拓団（開拓地）神社の簇生である。

1931年の満洲事変、翌年の「満洲国」の設立により、これまで基本的に満鉄附属地に限られていた日本人の居住地域が一挙に満洲全土に広がり、大量の日本人が満洲に入りこんでいった。1941年段階では「満洲国」内の日本人人口は約100万人に膨れ上がり⁽¹⁹⁾、1945年段階には150万人の日本人がいたとされている。⁽²⁰⁾

満洲開拓の必要が国策的見地から提唱され始めたのは日露戦争直後に遡り、特に大正初期にいくつか実行が試みられたが、いずれも失敗に終わり、「満洲国」設立以前、この地域において農業に従事する日本人農業人口はわずか1500人程度であった。⁽²¹⁾

「満洲国」の設立後、「満洲国」の治安の維持や日本の農村問題の解決のために開拓移民が実行に移される事になる。1932年10月の第1次移民団の出発から、1936年の第5次に至るいわゆる「武装移民」、「試験移民」といった、初期の移民時代を経て1937年から「大量移民」時代に入る。1936年5月関東軍は「満洲農業移民百万戸」計画を立案、この計画は8月に廣田内閣の「七大国策」の1つとして閣議決定され、実行に移された。⁽²²⁾

さらに、農民だけではなく青少年も移民の対象とされていく。日中戦争が始まった1937年、第1次近衛内閣は11月「満蒙開拓青少年義勇軍」の編成を決定、これを受けて1938年より16歳から19歳の青少年を対象とする義勇軍の募集が始まった。一般の開拓団の人数は1939年の年間約3万3千人をピークに減少し、1942年には約1万4千人と最盛期の半分以下に減っていったが、これを補ったのが訓練期間を終了して入植した義勇軍開拓団であり、1941年以降45年まで5次にわたって、毎年1万人前後の青少年義勇軍が開拓団員となっていった。⁽²³⁾ こうして、1945年までに全体として約20万人の日本人が開拓団員として入植したのであった。

こうした、開拓団村では、慣れない、また厳しい風土の下で、開拓団員の家族の平穏と生業の安定を祈願するために、また開拓団員に満洲開拓の尖兵の意識を植え付けるために、神社が建てられた。これが開拓団神社である。この神社の総数はまだ確定されていないが、近藤喜博はその著書に、満洲拓殖公社の調査にかかる、1940年2月1日段階の「満洲国開拓地神社一覧」を載せている。⁽²⁴⁾ 東安省15社、牡丹江省7社、北安省13社、吉林省15社、間島省2社、三江省16社、濱江省20社、龍江省9社、計97社である（但し、この中には調査時点では造営年月が翌年や翌々年になっているもの、また予定のものが52社含まれている）。「満洲国」の神社総数の約3分の1を開拓団神社が占めていたのである。

「満洲国」における1930年代後半からの、神社設立数の急増の背景には、先に述べた「満洲国」の国家理念の変容と共に、この開拓団神社の設立も横たわっていたのである。

〔大正天皇の大礼〕また、「満洲国」における年代別神社数のなかで、もう一つ目立つのは、日露戦争後から「満洲国」成立年までの時期の間では、1915年の9社を頂点に1913年から1920年の間に比較的まとまって神社が建てられている事である。38社中24社がこの時期に建てられている。この傾向も実は「満洲国」だけの特徴ではなく、台湾や樺太、あるいは朝鮮などの日本の植民地に共通して見られることである。これは、大きく言えば1912年の明治天皇の大喪、翌々年の昭憲皇太后の大喪、1915年の大正天皇の即位大礼、と連続して国民を動員して行われた国家的儀礼の挙行による神道思想の昂揚が背景にあり、また直接的には大正天皇の即位大礼を記念して、その記念事業として多くの神社が建てられたというものであった。⁽²⁵⁾

(2) 省別神社設立状況⁽²⁶⁾

次に「満洲国」に建てられた神社の省別設立状況について見ておこう。満洲の省は、「満洲国」成立直後は奉天、吉林、黒龍江、熱河の4省であったが、その後、地方行政制度は細分化・整備されていき、1943年段階では、東満総省（牡丹江、間島、東安の3省を統合）、興安総省（興安東・北・南・西の4省を統合）の2総省、12省、1特別市（新京）であった。⁽²⁷⁾

神社数の多い省は東満総省の56社を筆頭に三江省の37社、吉林省の34社、奉天省の33社、北安省の27社、濱江省の23社等が続く。「満洲国」が成立する以前の中心都市であった奉天市のある奉天省、「満洲国」成立以降の中心都市新京特別市（旧長春）のある吉林省を中心に北東方向の省に神社が集中している事がわかる。

(3) 祭神

最後に、祭神について見ておこう。「満洲国」に建てられた神社の祭神として最も多いのは天照大神である。天照大神のみを単独で祀っている神社だけでも139社、全体の約46%近くを占める。また天照大神と共に他の祭神を併せ祀っている神社数で見ると288社と約95%を占める。つまり、「満洲国」

の神社の9割5分近くがなんらかの形で天照大神を祀っているという事である。次に多いのは明治天皇の138社で約46%、次に大国主神の35社で約12%、そして神武天皇の29社である。

また、複数の祭神を併せ祀っている場合、その祭神の組み合わせとして最も多いのは天照大神・明治天皇の組み合わせで86社で約28%、この2神に他の神を併せ祀っているものを加えると134社で約44%と5割近くになる。次に多いのは天照大神・大国主神の組み合わせである。いずれにしても「満洲国」の神社は天照大神を中心に明治天皇、大国主神の3神を核にしたものであるという事がいえよう。

天照大神は天皇家の祖先神、また日本人の「共通の神」として、台湾を除く、全ての植民地等で、最も多く祀られている神である、明治天皇についてはいうまでもなく、日本が満洲に対して本格的な権益を持ち始めるのは明治天皇統治下の日露戦争であり、「満洲国」を語る場合、日露戦争の戦死者10万人の「血」（英霊）とともに、この明治天皇の名は常に記憶される存在であった。大国主神は国土開拓の神であると言う一般的な意味の他に、初期の満洲における神社設立に大きな役割を果たした、関東州の大連神社の祭神の影響を受けたものである⁽²⁸⁾。

この「満洲国」の神社の祭神を朝鮮に建てられた神社の祭神と比較して見ると、天照大神や明治天皇が多いという点は共通であるが、朝鮮では「国魂大神」が明治天皇よりも多い事、「満洲国」では天照大神・明治天皇の次に来る神がこの大国主神であるという点が特徴である⁽²⁹⁾。

以上、「満洲国」の神社についての研究史とその全体的な概観を行ってきたが、次章では本稿の主題である「満鉄附属地神社」についての基礎的な事実を確認しておこう。

II 「満鉄附属地神社」

1 満鉄附属地⁽³⁰⁾

まず、「満鉄附属地神社」について述べる前に、神社が建てられた、満鉄附属地というものについて簡単に述べておこう。

日本は日露戦争に勝利すると、関東州の租借権をロシアから譲り受ける（1906年8月に関東都督府設置、1919年に関東庁に編成替え、さらに1934年それを廃止して、新たに置いた関東局の下部機構として関東州庁が置かれた）とともに、東清鉄道の長春—大連間の鉄道経営権もロシアから譲り受け、1906年南満洲鉄道株式会社を設立した（1907年4月から運行が開始）が、この経営権の中には単に鉄道の運行権だけではなく、満鉄附属地という、いわば小さな「領土」の「行政権」も含まれていた。

満洲の地に鉄道附属地という特殊な地帯が設定せられ、外国の行政地域が発生するに至ったのは、1896年清国政府と露清銀行との間に締結された、東清鉄道建設及び経営に関する条約の第6条により、東清鉄道会社が鉄道経営及び防護に必要な土地を獲得し、その土地に関し絶対的且排他的行政権を確保したのを嚆矢とする。

日露戦争の開戦とともに、日本は交戦地区の住民の「安寧秩序」を維持するために必要な一切の行政を執行する機関として各地に軍政署を設置した。その後、日露講和条約第6条により、東清鉄道の一部（長春—大連間とその支線）とこれに付随する権利利益は一切日本に譲渡せられ、さらに日清満洲善後条約第1条を以って清国がこれを承認することによって、その附属地に対する行政権も日本の行使するところとなった。

関東都督府の開庁と同時に軍政は撤廃され、一部は奉天、安東、ハルビン、吉林等の領事館の管轄区域（開放地）となり、関東州内の行政と鉄道附属地の行政事務は関東都督府の所管となった。この内、鉄道附属地の行政事務は1907年の満洲鉄道株式会社の営業開始とともに警察権以外の行政は同会社に付与された。満鉄の主たる事業は鉄道運輸業であるが、付帯事業として鉱業、水産業、電気業、倉庫業等を営むだけでなく、附属地の経営という日本国家の行政事務をも委任されていたのである。この鉄道附属地は「満洲国」の成立後、1937年11月に治外法権の撤廃と共に「満洲国」へ委譲されるが、満鉄はこの間約30年間にわたり附属地の経営を行ったのである。

満鉄附属地は大連・新京間（約700キロ）、奉天・安東間（約260キロ）他、旅順線、営口線、煙台線、撫順線その他を併せて約1,130キロに亘り、蜿蜒長蛇の如く伸びる狭長な地域であって、線路とその駅を中心とする附属地は、空から見ると恰も蛇が蛙を飲んだ恰好をしていた。

満鉄附属地の面積は満鉄が引き継いだ当初は約182平方キロであったが、その後、拡張を重ね、1930年には371平方キロと隠岐島大の広さになっていった。それは純然たる鉄道用地、市街地、撫順・鞍山等の広大な鉱区などで構成されていた。

満鉄は附属地の経営のために、満鉄本社の中に地方部という部署を設け、また主要な附属地には地方事務所を設置していた。そして、満鉄はこの附属地の道路、上下水道、電気、ガスなどのインフラの整備に惜しみなく資金を投じ、学校、図書館、病院、公園、児童遊園、職業紹介所、簡易宿泊所、墓地、火葬場などの社会施設や農業、牧畜、林業その他の勧業施設を整備していった。こうして創業当時は荒涼たる附属地は近代的都市に作り替えられていったのである。⁽³¹⁾

日露戦争後に日本の満洲における利権が本格的に拡大していくが、日本人が合法的に居住できる空間という点では、関東州を除けば、この満鉄の附属地と主要な都市に開設された領事館の開放地という極めて限られ地域であった。日本より約3倍の広さを持つ満洲の地にあって、文字通り「点」（領事館開放地）と「線」（満鉄附属地）に過ぎなかった。そして、この「点」と「線」の内、多くの日本人が居住したのが「線」＝満鉄附属地であった。確かに、第1次世界大戦中の1915年5月に「南満洲及び東部内蒙古に関する条約」（対華21か条の要求の1つ）が結ばれ、日本人は南満洲において自由に居住が認められたが、事実においては益々附属地の人口の比率を高めただけであった。

満洲地域の日本人の人口は、日露戦争後、1908年の28,660人、第1次世界大戦前の1914年には51,845人、大戦後の1923年には89,048人、そして満洲事変前の1929年には108,803人と、約4倍に増えていくのであるが、この内附属地に住む日本人の比率は1908年こそ41%と半数を割っていたが、以後61%（1914年）、81%（1923年）、そして86%（1929年）とむしろ附属地に集中していく傾向をもっていたのである。⁽³²⁾

「満洲国」設立以前において、満洲に建てられた神社の内、約8割が「満鉄附属地神社」であったのはこうした背景をもっていたのである。

尚、満鉄附属地の行政権が「満洲国」に委譲される直前の1937年11月段階であるが、関東州外の満鉄附属地において人口1万を超える所は、撫順11万1千人、奉天9万3千人、安東7万7千人、新京6万5千人、鞍山4万2千人、四平街2万1千人、開原2万人、公主嶺1万3千人というところであった。また、日本人（内地人）人口の多い所は、奉天7万人、新京3万4千人、撫順2万5千人、安東1万6千人、鞍山1万1千人、四平街6千人、公主嶺、営口、蘇家屯、遼陽が各4千人台である。

満鉄附属地といえ、日本人（内地人）だけが住んでいたような印象を持つが、事実としては奉天や新京を除けばむしろ（満）漢人の方が多かったのである。⁽³³⁾

2 「満鉄附属地神社」

『満鉄附属地経営沿革全史』は、満鉄附属地行政が1937年11月に「満洲国」に委譲されるにあたり、30年余における附属地経営の記録を残そうとして編纂されたものである。その上巻には、第一部として「附属地経営の発達」が叙述されているが、その「五、教育、社寺及び宗教」の項に「附属地神社一覧」として、1905（明治38）年に創立された安東神社から、1935年（昭和10年）8月に創立された蓋平神社までの32社が書き上げられている。⁽³⁴⁾ すなわち「満鉄附属地神社」とは満鉄附属地なるものが存在していた、1906年から1937年までの間に満鉄附属地に建てられた神社の事であり、単に一般的に満鉄沿線に建てられた神社を指しているものではない。図1は、その所在地を示したものである。

さて、このことを確認した上で、「満鉄附属地神社」について概観しておこう。

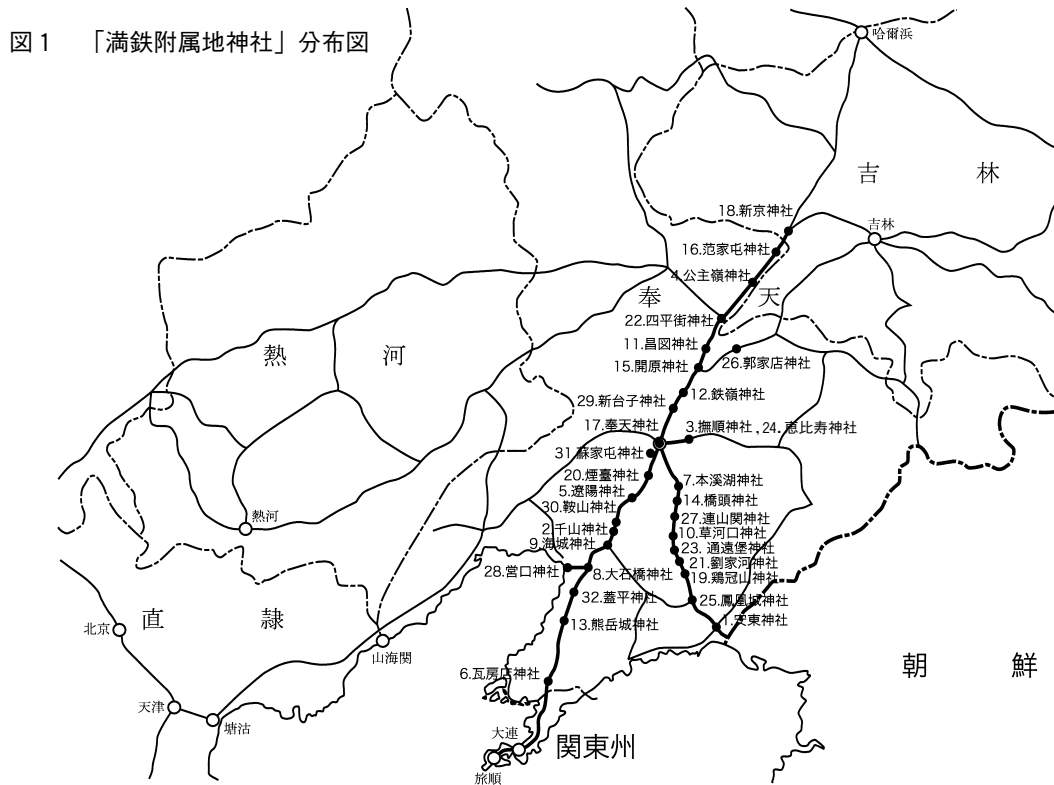


図1 「満鉄附属地神社」分布図

※齊紅深『満洲』オールラブルヒストリー（註17参照）所収の「鉄道附属地分布図」に、『南満洲鉄道株式会社第4次十年史』（龍溪書舎、1986年）所収の『南満洲鉄道所管鉄道図』を参考にして加筆したものである。尚、番号は後掲表1の番号に対応するものである。

(1) 大正天皇の大典と神社の設立

まず、設立年代についてみていこう。表1はこの32社の「満鉄附属地神社」を設立年代順に並べたものである。先に、「満洲国」における神社の概観をしたとき、「満洲国」の成立する1932年までの間に建てられた神社数を38社と見たが、この38社の内の31社、実に約8割が「満鉄附属地神社」であった。また、「満鉄附属地神社」として最も遅く建てられたのは、「満洲国」設立以後の1935年に建てられた蓋平神社であるが、しかしこの神社の設立は「満鉄附属地神社」としては例外的ともいえるほど遅い。他の神社は全て、「満洲国」設立以前の1924年までに建てられている。そこで、この1924年段

表1 「満鉄附属地神社」一覧

	地区名	神社名	祭神	設立許可年	鎮座地	立地
1	安東省	■ 安東神社	A	1905 (明治38) 年10月3日	安東省安東市鎮江山	街中 (市の中央) → 鎮江山山腹
2	奉天省	■ 千山神社	A・O	1908 (明治41) 年9月	奉天省千山附属地	不明
3	奉天省	■ 撫順神社	A・O・金山比古命・金山比売命	1909 (明治42) 年2月1日	奉天省撫順附属地永安台西公園内	千金山麓桜丘→永安台丘陵 (西公園に隣接)
4	吉林省	■ 公主嶺神社	A	1909 (明治42) 年5月	吉林省公主嶺街花園町	公主嶺公園内
5	奉天省	■ 遼陽神社	A・豊受大神・応神天皇・J	1909 (明治42) 年6月16日	奉天省遼陽船頭公園内	白塔公園内
6	奉天省	■ 瓦房店神社	A・O	1912 (大正1) 年9月6日	奉天省瓦房店附属地東区旭村二	駅前公園隣接地→守備隊北東方面山地
7	奉天省	■ 本溪湖神社	A・M・O	1913 (大正2) 年3月	奉天省本溪湖	附属地東南隅陸軍用地内(山地)→山麓(神社山公園)
8	奉天省	■ 大石橋神社	A・O	1913 (大正2) 年10月5日	奉天省大石橋盤竜山西南山腹	幡龍山中腹 (公園に隣接)
9	奉天省	■ 海城神社	M	1914 (大正3) 年7月15日	奉天省海城街	不明
10	奉天省	■ 草河口神社	A	1914 (大正3) 年8月	奉天省草河口附属地	記載なし
11	四平市	■ 昌圖神社	A	1915 (大正4) 年1月	奉天省昌図大街	街中 (昌図大街) の西方浄地
12	奉天省	■ 鐵嶺神社	A・M・O・靖国神	1915 (大正4) 年7月31日	奉天省鐵嶺街花園町二丁目	鐵嶺公園内
13	奉天省	■ 熊岳城神社	A・M・O	1915 (大正4) 年8月3日	奉天省熊岳城	不明
14	奉天省	■ 橋頭神社	A	1915 (大正4) 年8月8日	奉天省橋頭	橋頭公園内
15	四平市	■ 開原神社	A・M・O	1915 (大正4) 年8月	(旧) 奉天省開原神明街	街中 (附属地第7区第9号地) → 神明街1番地
16	吉林省	■ 范家屯神社	A	1915 (大正4) 年10月19日	吉林省范家屯公園内	不明
17	奉天省	■ 奉天神社	A・M	1915 (大正4) 年10月25日	奉天省奉天市大和区琴平町	街中 (附属地琴平町17番地)
18	新京特別市	■ 新京神社	A・M・O	1915 (大正4) 年10月29日	新京市敷島区平安町	街中 (中央通西, 平安町)
19	安東省	■ 鶏冠山神社	A	1915 (大正4) 年11月9日	安東省鶏冠山北町	不明
20	奉天省	■ 煙臺神社	A・O	1916 (大正5) 年6月25日	奉天省煙台守備隊北方	記載なし
21	安東省	■ 劉家河神社	A	1917 (大正6) 年3月17日	安東省劉家河鉄道附属地	記載なし
22	四平市	■ 四平街神社	A・M・O	1918 (大正7) 年7月	(旧) 奉天省四平街西區利幸町一丁目	四平街公園(「中央公園」)→街中(公園正門前中央通)
23	安東省	■ 通遠堡神社	A	1919 (大正8) 年5月5日	安東省通遠堡附属地	記載なし
24	奉天省	■ 恵比須神社	事代主尊	1919 (大正8) 年6月	奉天省撫順	不明
25	安東省	■ 鳳凰城神社	A	1919 (大正8) 年10月1日	安東省鳳凰城鉄道附属地	記載なし
26	四平市	■ 郭家店神社	A	1920 (大正9) 年5月10日	(旧) 奉天省郭家店北一條街三丁目	街中 (附属地北1条街3丁目)
27	奉天省	■ 連山関神社	A・M	1920 (大正9) 年8月13日	奉天省連山関	守備隊裏→公園内
28	奉天省	■ 營口神社	M・昭憲皇太后	1920 (大正9) 年10月28日	營口新市街旭町三〇〇	旭公園内
29	奉天省	■ 新台子神社	A	1922 (大正11) 年10月14日	奉天省新台子満鉄附属地	記載なし
30	奉天省	■ 鞍山神社	A・M	1924 (大正13) 年6月23日	奉天省鞍山鎮守山	鎮守山の高地
31	奉天省	■ 蘇家屯神社	A・M	1924 (大正13) 年6月25日	奉天省蘇家屯	不明
32	奉天省	■ 蓋平神社	A	1935 (昭和10) 年8月16日	奉天省蓋平附属地	小山の頂き

※①園田稔・橋本政宣編『神道史大事典』(吉川弘文館, 2004年)の「終戦前の海外神社一覧—関東州および満洲国の神社—」(佐藤弘毅編)より作成。

②神社名欄■印は神饌幣帛料供進の指定を受けた神社(本文40頁参照)。

③祭神欄のAは天照大神、Mは明治天皇、Oは大国主神、Jは神武天皇の略記。

④立地については『満鉄附属地経営沿革全史』や『大陸神社大観』を参照した。

階で区切ってみると、それまでに建てられた全34社中「満鉄附属地神社」は実に31社と、9割を占める。つまり、満洲に建てられた神社の多くは、まず初めは「満鉄附属地神社」として建てられたということである。

また、先に「満洲国」全体の神社の概観をした時、「満洲国」成立以前の神社の設立において、1915（大正4）年の9社を先頭に1913年から1920年の間に比較的纏まって神社が建てられている事、そしてその背景には1915年の大正天皇の即位大礼の記念事業というものがあつたと述べたが、これらはこの「満鉄附属地神社」の特徴からでてきたものであつた。

『満鉄附属地経営沿革全史』や『大陸神社大観』に記述されているものから、この大礼記念事業として建てられた例をあげておこう。

まず、はっきりしているものからあげていくと、

海城神社～大正2年4月当地駐屯野砲兵隊有志の発意によって、ご即位の記念事業として奉建の議⁽³⁵⁾

昌図神社～大正4年1月官民間において大正天皇御大典記念事業として建立の議⁽³⁶⁾

鉄嶺神社～大正4年御大典記念事業として大正4年7月31日神社建設許可出願⁽³⁷⁾

熊岳城神社～大正以前には祭神を有せず。御大典を記念として議起⁽³⁸⁾こり

開原神社～大正4年には邦人官民合わせて300戸を数える。神社創建の議、大正天皇即位の大典を記念し、建設期成会を組織⁽³⁹⁾

奉天神社～日露戦争後邦人人口漸次増加、神社奉建の議、大正4年即位大礼を機として⁽⁴⁰⁾

新京神社～大正元年御大典記念事業として造営され、同2年御大典当日をトして祭神を奉祀⁽⁴¹⁾

鶏冠山神社～大正4年御大典事業として在留邦人20名によって設立が発起⁽⁴²⁾

営口神社～神社の造営は在留日本人の渴望、資金その他の関係上その実現を見るにいたらなかった。

偶々大正4年11月大正天皇の即位式にあたり、これを記念して造営を行うべしとの議⁽⁴³⁾

このように、はっきりと大正大礼を「記念」・「契機」として設立されたと記述されている神社は9社にのぼるし、この他、はっきりとは記載されていないが、「明治45年居住者中神社建立の議、建立発起人会が組織、寄付金募集に着手⁽⁴⁴⁾」（瓦房店神社）、「邦人の増加に伴い、大正元年より神社奉建の議、起る⁽⁴⁵⁾」（大石橋神社）も、同じ様に考えて良いと推測されるので、あわせると11社にのぼる。

大正天皇の即位大礼（大典）は1915（大正4）年11月に行われた。明治天皇は1912（明治45）年7月に死去、直ちに大正天皇が即位（踐祚）したが、その年の9月の大喪儀を挟んで1年間は明治天皇の大喪期間で、大正天皇の即位の大礼はその喪があげた翌年1914（大正3）年の秋に行われる予定であつた。ところが、1914年の4月に明治天皇の皇后・昭憲皇太后が死去、その葬儀と喪のために、更に1年延期されて1915年の11月に行われたのである。

この1912年から1915年の4年間の間に行われた前天皇の葬送儀礼と新天皇の即位儀礼は、その間に行われた皇太后の大喪を含めて、大掛かりな神道儀式で行われたし、またその儀礼は国民を大掛かりに巻き込んで行われたため、近代の国家神道が国民の中に定着する大きなきっかけになったのである。そしてこうした事は単に日本国内だけではなく台湾や朝鮮、樺太といった植民地、さらには関東州やここ満鉄附属地においても程度の差こそあれ同様であつた。⁽⁴⁶⁾

先に紹介した営口神社の「神社の造営は在留日本人の渴望、資金その他の関係上その実現を見るにいたらなかった。偶々大正4年11月大正天皇の即位式にあたり、これを記念して造営を行うべしとの

議が起った⁽⁴⁷⁾」にその間の事情が伺われるし、また、遼陽神社は1909（明治42）年6月に設立が許可されているが、「明治43年10月拝殿建設の議、しかし多額の費用を抛出することは不可能、神社講を組織し、氏子全部から毎月応分の抛出を求めて、資金を積み立てる。明治45年、明治天皇の崩御に遭い、邦人の神社崇敬の念は強く刺激され、拝殿建設の議が急速に決定し、経緯費5,000円を以って大正3年9月着工、翌年4月竣工。6月神殿同様公共営造物として城内外邦人がこれを引き継ぎ⁽⁴⁸⁾」（傍点筆者）と明治天皇の「崩御」（大喪）が日本人の神社崇敬の念を高めた事が、明記されている。

このように、明治・大正の代替わりは、満鉄附属地の神社設立の大きなきっかけとなったが、単にそれだけではなく、当然の事ながら、それ以前に建てられていた神社においてはその社殿の整備や神社維持制度の確立等にも、大きな役割を果たしている。

例えば、公主嶺神社の例を紹介しておく、「大神宮は明治42年5月、当地居住の有志が相計って敬神会を組織、寄付〈壺千余円〉をつのって、現在の公園内に神殿を造営したのが初めてであった。ところが神殿は小さく尊厳を欠くところがあった。大正4年即位の大典に、記念事業として神殿の改築ならびに拝殿の新築を企て、在留邦人の寄付と満鉄会社の補助金4200円を以って、同年9月現在の社殿造営に着手し、翌5年5月竣工。6月3日の吉日を卜して遷座祭を執行した。さらに大正5年6月敬神会の組織を変更して氏子会の制度を確立、神社維持経営の完璧を期した⁽⁴⁹⁾」とある。

こうして明治・大正の代替わり（1912～1915年）は「満鉄附属地神社」の設立やその整備に大きな役割を果たしたが、これら大正期に設立された神社がさらに大きく整備されるきっかけになったのが、次の代替わり、大正・昭和の代替わり（1926年～1928年）であった。

（2）法制度・管轄

さて、附属地の神社行政は、当初は1910（明治43）年9月の関東都督府民政長官の通牒にもとづいて神社事務を処理していたに過ぎなかったが、1922（大正11）年5月の「関東州及南満洲鉄道附属地に於ける神社、廟宇及寺院等に関する件」（勅令第262号）が公布されて関東長官の権限が明らかにされ、これに基づき、同年10月に「関東州及南満洲鉄道附属地神社規則」（関東庁令第78号）が制定されて満鉄附属地における神社事務が統一された。これにより、附属地の神社事務は関東庁の行政事務の一つであった警察署長の掌理するところとなった⁽⁵⁰⁾。1932年の「満洲国」建国以降も警察権を除く附属地の行政権は依然として満鉄に、警察権は関東庁に引き続き付与されていたので、神社行政（事務）は何らの変化も受けなかった。

1937年11月の日満両国間の治外法権の撤廃及び南満洲鉄道附属地行政権の「満洲国」への委譲に関する日満間の条約に基づき、付属地の行政権は「満洲国」に委譲された。しかし神社行政権は、教育行政権、兵事行政権と共に、留保条項となり、日本政府がこれにあたった⁽⁵¹⁾。

具体的には、「満洲国」の神社は同年の勅令680号「満洲国駐劄特命全権大使の神社及び教育事務の管理に関する件」により、同大使の管掌するところとなり、且つ、同年の勅令第681号により在満洲国大使館に教務事務官以下の職員が配置せられ、同時に訓令を以って同大使館に教務部が設置された。ついで、1940年勅令第268号「関東局に在満教務部を設置する件」により、同年4月15日より大使館に置かれていた関東局に在満教務部が設置され、在満日本人子弟の教育行政と共に神社行政はそこで行われるようになった⁽⁵²⁾。

尚、神社規則については、「満洲国」設立後、1936年11月6日に「在満洲国及び中華民国神社規則」

(外務省令第8号)が出され「満洲国」内の神社はこの適用を受けたが、「満鉄附属地神社」は従前どおり、1922年の「関東州及び南満洲鉄道附属地神社規則」(関東庁令第78号)によっていた。いわば、「満洲国」内の神社行政は一時、その所在地の違いによって二つの法令にもとづいて行われていたのである。これが上記のように1937年に治外法権の撤廃及び満鉄附属地行政の「満洲国」への委譲により、1937年12月1日に出された、「在満洲国神社規則」(在満洲国大使館令第13号)によって一本化され、ここに「満洲国」内にあって、特殊な立場にあった「満鉄附属地神社」なる概念も消滅したのであった。⁽⁵³⁾

在満日本人の教育行政と共に神社行政を日本政府が握った理由については、「教育における日本独自の国民精神の陶冶と不可分一体である神社は、日本肇国の昔より国民固有の絶対事実にして其の制度も日本国に於いてのみ存するもので、宗教の範囲には属さないが故に、日本国側にその行政が留保せられているのである」とされている。因みに仏教やキリスト教等の、他の宗教行政は、治外法権撤廃に関する条約の締結以来、「満洲国」の行政治下に入り、その行政事務は民生部大臣の管掌するところとなった。⁽⁵⁴⁾

(3) 満鉄との関わり

さて、先に述べたように1937年の満鉄附属地の「満洲国」への委譲以前は「満鉄附属地神社」は関東庁の行政事務の一つであった警察署長の掌理するところであったが、附属地内居住日本人人口の大部分が満鉄関係者であり、警察権を除く行政権は満鉄が持っていたため、実際の神社事務は各地の満鉄地方事務所の庶務係りが担当していた。また地方事務所長が氏子総代や奉幣使を勤め、さらに幣帛料は満鉄から支出し、新たに神社を建設する時も満鉄が無条件で土地を提供し、その費用も一部負担するなどしていた。その費用負担のいくつかの例をあげると以下のようなものである。

安東神社～1924年に東宮殿下御成婚記念事業として、創立以来の街中(市の中央)から鎮江山上に移転したが、その費用約10万円の内、2万円を会社が負担⁽⁵⁵⁾

公主嶺神社～1915年より即位の大典に記念事業として神殿の改築並びに拝殿の新築を企てたが、この時、満鉄から補助金4,200円が出た。⁽⁵⁶⁾

遼陽神社～1909年に創建、造営に際し会社が200円を寄付⁽⁵⁷⁾

瓦房店神社～1912年神社竣工、工費2,100円の内、1,000円会社よりの補助金⁽⁵⁸⁾

大石橋神社～1914年神社創建、工事金3,000余円の内、会社より1,500円の寄付⁽⁵⁹⁾

鶏冠山神社～1915年御大典事業として設立が発起。建設費1,200円の内、500円は満鉄の補助⁽⁶⁰⁾

四平街神社～1919年造営、建設費5,000円余り、内1,500円は満鉄の寄付。さらに1928年に新社殿等起工、建設費用2万4千余円、その内、積立金9千円、満鉄補助金4千円⁽⁶¹⁾

郭家屯神社～1928年度、神社拝殿を造営、建設費948円の内、200円は満鉄の補助⁽⁶²⁾

神社の造営は、附属地の日本人居住者(氏子)等の寄付金や積立金を核にしてなされるのであるが、満鉄は多い場合はその費用の2分の1、少ない場合でも5分の1の寄付(補助)を行っていることがわかる。

さらに、満鉄は1929(昭和4)年5月、寄進金及び神饌幣帛料に関する取り扱い内規を定め、各神社間の統一を図った。こうしたことにより、「満鉄附属地神社」の行政はあたかも満鉄の担当する地方行政の一部であるかの感を一般に与えていた。⁽⁶³⁾

この、「附屬地内神社寄進金及び神饌幣帛料 取扱内規」とは以下のようなものであった。

第1条 公費区（中間区及び特別区を除く以下同じ）は其の区域内の神社に対し寄進金を支出することを得

第2条 前条により寄進金を支出することを得べき神社は別に之を指定す

第3条 寄進金の額は毎年度公費区の歳入出予算に計上し総裁の認可を受くるものとす

第4条 公費区は其の区域内神社の祭祀に付神饌料及幣帛料を供進することを得

第5条 神饌料及幣帛料は之を区別せず神饌幣帛料として供進するものとす

第6条 神饌幣帛料を供進することを得べき神社及神饌幣帛料の金額は別表に依る

第7条 神饌幣帛料を供進する場合は公費区管轄箇所長供進使として祭祀に参向するものとす

公費区管轄箇所長故障あるときは代理者をして参向せしむることを得

供進使には随員を付することを得

第8条 供進使及随員の服装は当分の内仍従前の例に依る⁽⁶⁴⁾

また、取扱内規第6条にもとづく、「神饌幣帛料を供進することを得べき神社及神饌幣料の金額」(別表)については次のようになっていた。

神饌幣帛料は新年祭、新嘗祭、春秋例祭の三つの祭に対して供進されたが、金額により三つのランクに区分されていた。新年祭10円、新嘗祭10円、春秋例祭20円を供される神社は奉天神社、長春神社、撫順神社、安東神社の4社、新年祭8円、新嘗祭8円、春秋例祭15円を供される神社は瓦房店神社、大石橋神社、営口神社、鞍山神社、遼陽神社、鉄嶺神社、開原神社、四平街神社、公主嶺神社、本溪湖神社の10社、新年祭5円、新嘗祭5円、春秋例祭10円を供される神社は熊岳城神社、海城神社、昌図神社、郭家店神社、范家屯神社、橋頭神社、連山関神社、鶏冠山神社の8社である。

尚、「新年祭及新嘗祭の神饌幣帛料は祭祀を行わざる神社に対しては」供進を行わず、又「春秋例祭の神饌幣帛料は大祭として行」われる場合に限って供されるものとされていた。⁽⁶⁵⁾

こうした、満鉄による神饌幣帛料の供進は、1937年の附屬地の「満洲国」への移管と神社行政の在満洲大使館への集中に伴い、1938年より、同大使館から神饌幣帛料が供進されることになった(表1の■印)。

(4) 立地上の特色

次に「満鉄附屬地神社」の立地上の特色について述べておこう。

海外の神社は一般的に、小高い丘の上や山裾の小高いところに建てられる場合が多い。街や集落から仰ぎ見られる位置、逆に街や集落を見下ろす位置である。しかし、「満鉄附屬地神社」の場合、附屬地の街中に、特に公園内に建てられる特徴があるようである(第IV章参照)。

いま、『大陸神社大観』と『満鉄附屬地経営沿革全史』をもとに位置が判明しているものを書き上げたのが、表1の「立地」の項である。

これを見ればわかるように、「満鉄附屬地神社」32社のうち、上記資料に記載のないもの(「記載なし」)、また神社の記載はあっても立地についての具体的な記述のないもの(「不明」)の、計13社を除くと19社になるが、その内、街中あるいは公園内に建てられたものは11社と半数を越える。

こうした事は一般に満鉄附屬地をロシアから受けついでた時、ほとんどが原野で、日本はそこに都市計画を行いながら街をつくっていったが、1900年代には都市計画において公園は必須の要件として組

み込まれていた事、また満鉄は一部を除いて広い原野を縫う形で敷設されており、従って駅を中心とした平地に展開している事、さらに「満洲国」成立以前においては、防衛（守護）上の観点からも、神社は街中に、そしてとくに公園内部や公園に隣接して作られたものと推定される。

（5）祭神

先に、「満洲国」の神社全体の祭神の特色について述べたが、「満鉄附属地神社」の祭神についても、それとほぼ同様な特色をもっている。天照大神を祀っていない神社は32社中、不明の1社を除いて恵比須神社と菅口神社の2社だけである。比率で見ると93%であり、「満洲国」の全体のその比率95%とほぼ等しい。また、明治天皇を祀っている神社は11社であり比率でいうと32%、これは「満洲国」の神社全体の比率46%と較べると少し少ない。これとは逆に、大国主神は明治天皇と並んで11社であり、比率でいうと32%となり、「満洲国」の神社全体のその比率12%と較べるとはるかに多い。先に述べたように大国主神の奉祀は、大連神社の影響であるが、その影響はいうまでもなく、日本の満洲支配の初期に建てられた「満鉄附属地神社」ほど大きかったという事であろう。

以上、「満洲国」成立以前の神社の大部分を占めていた「満鉄附属地神社」の概観を行ってきたが、この「満鉄附属地神社」こそ、嵯峨井が分類した「満洲国」の「都市型神社」の核となっていくのである。以下、これを踏まえて、我々が行った調査の具体的な報告と分析を行いたい。

Ⅲ 現地調査を実施した「満鉄附属地神社」

1 調査について

2006年8月5日朝成田を発ち、北京経由で、瀋陽に入る。8月5日瀋陽到着後、すぐ奉天神社跡地を確認に行く。神社跡地は道路沿いの部分が商業施設（飲食店街）、その他の部分が人民解放軍関係の劇場・体育館・宿舎・公園になっている。

6日は奉天神社の調査。公園に集う老人などに声をかけ聞き取りを行なう。一方、実測については『沿革史』所収の満鉄作成の地図を基に跡地の現況を記録した。「満洲国」崩壊後61年経ち、さらには近年の中国の経済的發展もあって、街の区画以外は当時の神社の痕跡はまったくない。大きな区画内の社殿の位置の検討も難しい状況である。体育館横の庭園の築山だけが、平坦な地形の中に唯一盛り上がりしており、当時の地図と現状の位置関係を対照させて本殿の跡地ではないかと判断した。ただし、聞き取りによる位置と食い違っており、位置の判断には慎重を期すべきであろう。

7日は撫順神社の調査。撫順は奉天郊外の大露天鉱で知られる鉱山都市である。撫順駅前から伸びる放射状の道路を、成長して大木になった街路樹の下を進み、突き当たりの小高い丘を登る石段を上った先が撫順神社の跡地である。古い石段は当時のものと思われるが、丘の上には集合住宅が建ち並んでいる。聞き取りと跡地の現況の実測を行なった。聞き取りにおいては近年まで社殿の一部を事務所として使っていたことなど、戦後の様子や社殿の位置などを確認することができた。実測においては当時の灯籠の台座であろうコンクリートの塊、鳥居の部位である石造丸柱などを確認するとともに、古地図上に当時の社殿を復原した。

8日は鉄嶺神社の調査。鉄嶺は旧満鉄（哈大鉄道）沿いの瀋陽から65kmほど北の街である。撫順では満鉄時代の駅舎がかりうじて現役として使用されていたが、ここ鉄嶺では巨大な新しい駅舎に建

替えられている。街の街路も新しい駅舎を基点として若干変化しており、神社の跡地である公園の区画も縮小されているようだ。

9日は開原神社の調査。開原神社は満鉄線の駅移転にともなう、街路計画変更によって、駅から真っ直ぐ延びるメインストリートに背を向けて建っていたはずだ。神社跡地は、現在市庁舎の敷地になっており、敷地内に入っての詳細な調査はできなかった。しかし、かつて神社に向って直進していた道などを確認することができた。

10日は四平街神社の調査。四平街は現在の四平。四平は哈大・平斉・四梅鉄道が交わっている交通の要衝である。1945～49年の共産軍と国民党軍の国内戦争では2回にわたり激戦がくりひろげられた。四平街神社跡地は駅前広場から西に延びる英雄大路沿に広がる四平公園（英雄広場）の向い側で、現在軍関係の施設になっている。

11日は西安神社調査。西安は現在の遼源で四平の東南方にある。前もって調査依頼をしておいた遼源鉱工墓（万人坑）文物館の劉前館長を訪ねた。まずは万人坑を案内され、その後、西安神社跡地に案内された。西安神社跡地には拝殿ではないかと思われる建物が残るほか、手水鉢、灯籠の部位が残存している。しかし、実測調査など詳細調査は許可されなかった。

12日は公主嶺神社調査。公主嶺は旧満鉄（哈大鉄道）沿いの長春の南西にある。駅前の公園にあるはずの公主嶺神社は公園もろとも駅前広場と市街地へと変貌している。「満洲国」時代に公主嶺農事試験場で働いていた老人から話しを聞くことができ、農事試験場の様相や戦後の神社の沿革などを聞くことができた。公主嶺の調査後、郭家店経由で大雨のなか長春へ移動した。

13日は長春（新京）の旧建国神廟・旧建国忠霊廟・新京神社跡地調査。「満洲国」時代の首都新京の宮廷府内に建設された伊勢神宮の満洲版である建国神廟、建国神廟の摂社で靖国神社の満洲版である建国忠霊廟、さらに新京神社跡地を大急ぎで調査した。建国神廟跡は旧宮廷府内の前庭に基壇と礎石が残っており、その背後には地下防空壕も残る。建国功労者の霊を合祀した建国忠霊廟跡は広大な神域が住宅団地になり、軒先まで集合住宅が迫っている。とはいえ、中心部の中庭を囲んだ神門、東西殿、拝殿と、拝殿の背後の神殿はそのまま放置されたままになっている。一方、新京神社跡は幼稚園になっており、旧拝殿は今も利用されている。北の道に開く出入口には、鳥居が残っており、注意深く観察すれば、脇の道路から旧拝殿の屋根が覗いていることに気付く。

14日は午前中、瀋陽の9.18記念館を見学し、帰国の途についた。

調査日程は右の調査日程表の通り。

以下、各神社の調査結果を順次解説する。各神社の解説のうち市街計画については『沿革史』、各神社については『沿革史』・『大陸神社大観』⁽⁶⁶⁾、神社の施設坪数については「戦前の海外神社一覧Ⅱ」⁽⁶⁷⁾によるところが大きい。以下煩雑となるので、上記の3文献については逐一註記することは省略し、必要最小限の註記にとどめた。なお、今回同時に調査を行った建国神廟・建国忠霊廟は他の「満鉄附属地神社」とは性格が異なるため本稿では、図面と若干の写真を掲載するにとどめる。

表2 調査日程表

日程	調査地	移動行程
8月5日	瀋陽	東京→北京→瀋陽
8月6日	瀋陽	瀋陽
8月7日	撫順	瀋陽→撫順→瀋陽
8月8日	鉄嶺	瀋陽→鉄嶺→開原
8月9日	開原	開原→四平
8月10日	四平	四平
8月11日	西安	四平→西安
8月12日	公主嶺	西安→公主嶺→長春
8月13日	長春	長春→瀋陽
8月14日	瀋陽	瀋陽→北京→東京

2 神社各論

1. 新京神社

長春（新京）の市街計画

長春（新京）は吉林省の中央から、やや西北寄りに位置し、この省のあらゆる意味での中心である。「満洲国」時代には新京と呼ばれ、国都として官吏と特殊会社の関係者が大部分を占める特殊な町の様相を呈していた。当時は、「電車が神社の前にさしかかると、車掌が『ただいま新京神社の前を通ります。』と告げると、国籍、人種を問わず、脱帽してうやうやしく頭をさげて通ったものである。歩行者ももちろんのこと礼拝して通った。」⁽⁶⁸⁾といわれるような様子であったのかもしれない。

日露戦争後、1905（明治38）年に日露講和条約が締結され、ロシアに代わり日本が長春以南の鉄道経営に当たることになる。この鉄道の経営に当たるために設立された満鉄は、1907（明治40）年長春城内と寛城子の間の畑地・原野を買収して附属地とし、白紙状態から市街計画に着手する。駅前広場として、半径50間（90mほど）の円形の北広場を設け、これを基点に格子状に街路を割りつけ、放射状の街路も設けた。さらに、要所にロータリーを兼ねる南広場・西広場・東広場を設置する。さらに、1932（昭和7）年には国都建設区域に連なる地域を買収し、西部附属地として市街計画を拡張する。以降は国都計画とあいまって新京市全体の建設が進められる。

その結果、附属地を含めた新京の街路計画の概要は、以下のようなものである。新京駅より南方一直線に幅54mの大同大街を通し、1kmの地点に直径300mの大同広場を設け、6本の大街を集中させた。この大同広場の廻りに市役所・警察庁・中央銀行などを集め、市政の中心とする。新京駅と孟家屯駅との間に中央駅を新たに設け、駅前広場から放射状に街路を設けて中央駅を交通の中心とする。放射状・格子状・環状を組み合わせた街路計画となっている。

新京神社の創建と沿革

1941（明治44）年に、長春在住の日本人有志の発起により、関東庁から神社設立の認可を得て、敷地を選定し発足に向け動き出したが、明治天皇の崩御などが重なり、紆余曲折のすえ、実現までに至らなかった。そこで、再度1915（大正4）年10月に大正天皇の即位の御大典を機に、関東庁の認可を受け、長春神社を創立する。翌1916年には鎮座祭を行なっている。祭神は天照大神・大国主神・明治天皇である。

その後、1929（昭和4）年に昭和天皇即位の御大典を記念して社殿の改築が行われている。さらに、1932（昭和7）年に長春が「満洲国」国都新京と改称されるにともなって社号を新京神社と改められる。1935（昭和10）年には石造玉垣・石造大鳥居・手水舎が奉納され、社務所を増改築。1936（昭和11）年には狛犬・祭器庫・透塀、翌年には石灯籠・神馬・本殿前階段の改修が行なわれている。

以上のような沿革をたどっているが、新京神社は創建当初は長春に在住する日本人の神社として創立されるが、満洲事変を経て、「満洲国」国都の神社としての役割を担うべき神社へと変貌せざるを得なかった。

新京神社の立地とその様相

新京神社は新京駅から近い、中央通西側の平安町と常盤町との広い区画に立地する。中央通に面

して大鳥居が立っている。大鳥居をくぐると、西に向かう参道両脇に松並木があり、右手に社務所、左手に手水舎があり、さらに中門を入ると左右に青銅製の神馬、大狛犬がある⁽⁶⁹⁾。その奥にひとつながりになった拝殿・幣殿・本殿が配される。社殿は東向きに建っている。拝殿は間口54尺、奥行48尺の切妻造平入で正面中央に切妻の向拝が付き、屋根には千木・勝男木が付けられている。構造は、鉄筋コンクリート造の躯体の外側に付け柱など木造の部材を取り付け木造風の造りとしていたようだ⁽⁷⁰⁾。古写真から見る限りでは、石積み基壇の上に建つ木造建築で、柱間には藪戸が入れられているように見える。また、この拝殿は防寒設備に注意を払い、「有に二三百を収容参拝できる」規模であったようである⁽⁷¹⁾。幣殿は本殿と拝殿とをつないでおり、その中間部に神明造風の建物を挟んでいたようだ。順次高く盛土され、幣殿中間部の建物あたりで1段高まり、本殿はさらに高く盛土されていた。本殿は間口3間（18尺）に奥行2間（12尺）の切妻造平入で千木・勝男木を付けた神明造風の建物である。内部は、拝殿・幣殿はもちろんのこと本殿前まで、すべてコンクリート土間となっていた⁽⁷²⁾。

新京神社は中央通の駅に近い位置に立地するが、もともと附属地の市街計画が終わった後に敷地を選定し、それも在住民有志の発起のよるものであり、相当な位置および面積を占めてはいるものの⁽⁷³⁾、当初から市街計画の基点となるようなものではなかったと思われる。とはいえ附属地の中央通がそのまま延ばされ「大同大街」となり、結果的に新京の中軸の大街に面することになった。

戦後の沿革

三箇巧の「新京神社最後のお祭」によると、敗戦と同時に拝殿は荒らされ現地人の子供の遊び場になっていたが、それでも、翌年の春には荒廃した奥殿で、外に音が漏れぬよう気を配りながら雅楽を奏し、祝詞を唱えたこと、社務所でささやかな直会が行われご神体をいかに始末するか相談が行われたことが記されている。1946年時点では、ご神体を含め本殿も残っていたことが確認できる。また、嵯峨井の『満洲の神社興亡史』によると、敗戦後まもなく、戦災孤児を救済する中央保育園が新京神社に設けられている。備品類は略奪されたが、社務所・社殿などは、1946（昭和21）年7月に孤児達が帰国するまで、孤児院として使用されたようだ。その後の詳細は不明だが、嵯峨井の50年後の

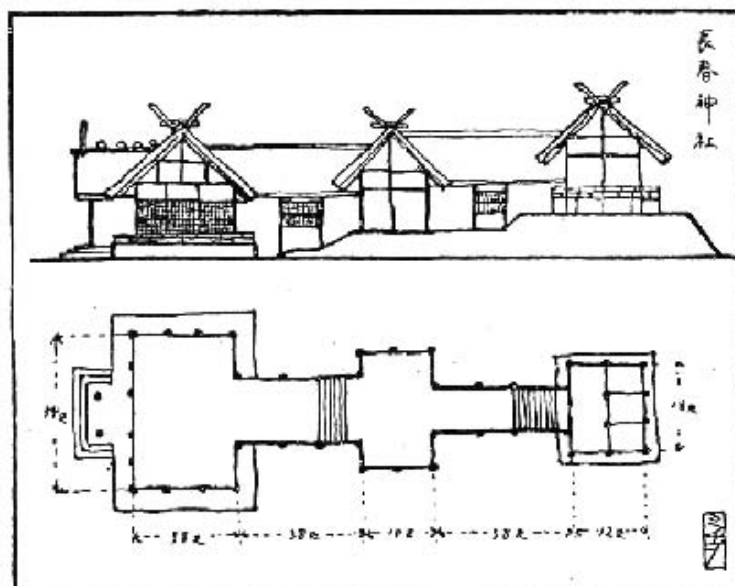


図2 長春神社略平面図・北立面図
手塚道男「満洲の旅に描く(二)」から転載、プロ
ポーションは狂っているが往時の神社の様子はよくわかる。

調査によると、「長春人民政府機関第一幼稚園」となって、旧社務所・旧拝殿・旧幣殿の一部は改造されてはいるものの使用され続けていた。現在も「長春市人民政府機関第二幼稚園」との門標があり、依然として幼稚園となっている。その上、旧拝殿は今も幼稚園の施設として使われている。また、平安町通側入口には石造鳥居が今も立っている。調査が許されなかったので詳細は不明だが、旧拝殿の背面に幣殿の一部と思われる張り出し部が依然として残っているが、両妻側に突出部が増築されているようだ。もともと拝殿は鉄筋コンクリート造の建物であったため、転用されて今も使用されているのであろう。嗟峨井が調査した段階（10年ほど前）にはまだ残っていた、社務所や拝殿背後の本殿が建てられていたと思われる盛土は既に無くなっている。

2. 奉天神社

奉天と奉天の市街計画

瀋陽（奉天）は、遼寧省の省都、同省の東部に位置し、遼河の支流渾河の西岸にある。清朝の国都として盛京と称され、北京遷都後は陪都として奉天と呼ばれた。19世紀末から20世紀はじめにかけて、帝政ロシアの支配下におかれたが、日露戦争後日本に取って代わられる。1931（昭和6）年には満洲事変が奉天郊外で、日本軍によって引き起こされる。ついで「満洲国」時代に入る。

満鉄が経営に着手すると大規模な市街計画を企てる。まず、駅的位置を若干移動させ、駅を中心に据え、駅を背にして幅36mの「千代田通（瀋陽大街）」を中央に、左45度方向に商埠地を貫く「浪速通（昭徳大街）」を、右45度方向に「平安通」を放射状に配する。一方、鉄道線路に平行する幹線としては、線路沿いの「宮島・若松町通」、浪速通の大広場を貫く「加茂町・富士町・萩町（中央大街）通」、青葉町・春日町通、附属地東端の大通で街路計画の骨格を形成する。さらに、補助道路を格子状に割り付ける。すなわち、奉天附属地街路網は「浪速通」・「平安通」の両45度方向の大街を有する格子型の構成となっている。

奉天神社の立地とその様相

奉天神社は左45度方向に伸びる浪速通の円形大広場から西に四条通に入った右手（北側）に位置する。すなわち、大広場に面して建つ警察署の裏に通りを一本を挟んで隣接している。社殿はほぼ南面して建つ。線路に平行に配されている琴平町通が真っ直ぐに神社正門に向かっており、参道を兼ねていたのではないかと思われる。四条通に面して鳥居が立ち、鳥居をくぐると左右に石灯籠が配され、正面に正門がある。正門をくぐり、少し左寄りに道を取ると左右に国旗掲揚台、左奥に遥拝場、青銅の灯籠や青銅の神馬があり、左右に石灯籠・狛犬をみて、さらに進むと拝殿である。拝殿の奥には中門があり、中門両脇から本殿を囲み透塀がめぐる。中門奥には祝詞舎があり、さらにその奥に本殿が置かれている⁽⁷⁶⁾（図4参照）。

奉天神社は1915（大正4）年、大正天皇の即位の御大典を機に創建され、翌1916年本殿・瑞垣・玉垣・中門・仮社務所が竣工、鎮座祭を行なっている。祭神は天照大神・明治天皇であった。最初の社殿は満鉄建築主任の岡大路の設計・監督である。敷地は練兵場の跡地であったため窪みが多く、6尺の土盛りをするため、大変な苦勞があったようだ。1922（大正11）年、拝殿・社務所・正門・神職住宅・境内周囲塀などを新築することになり、翌1923年竣工している。1928（昭和3）年、昭和天皇の

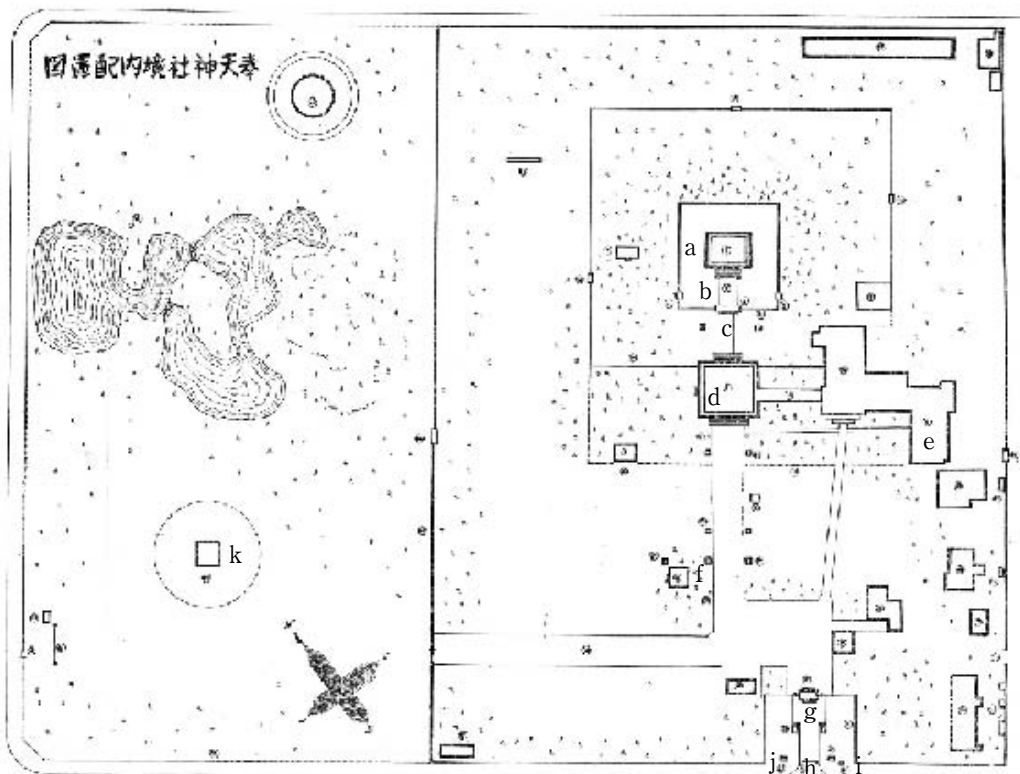
即位の御大典を記念して、本殿・祝詞舎・中門・透塀などが改築されている。以降、宝物殿・遙拝所・国旗掲揚台・外苑の設定・角力場・大弓場などが順次整備された⁽⁷⁷⁾。

創建当初の本殿は神明造鉄板葺建坪6坪であった。設計は岡大路で、工事請負が有賀定吉、棟梁が馬場荘松である。1928年に改築された本殿は流造銅版葺で置千木を付けていた⁽⁷⁸⁾。建坪は13.85坪である。請負者は満洲土建協会奉天支部で、設計は大連の小野木・横井共同建築事務所である。大棟梁は村田長二郎で、棟梁は中山孫吉が務めている⁽⁷⁹⁾。

拝殿は木造の入母屋造流造銅版葺で、建坪57.45坪である。設計は小林廣次で、工事請負は上木仁三郎である。大棟梁・棟梁は本殿と同じ人物で、それぞれ村田長二郎・中山孫吉が務めている⁽⁸⁰⁾。



図3 奉天神社の景観
手塚道男「満洲の旅に描く(一)」に収録されたスケッチ。



- a. 本殿
- b. 祝詞舎
- c. 中門
- d. 拝殿
- e. 社務所
- f. 遙拝所
- g. 正門
- h. 鳥居
- i. 社標
- j. 制札所
- k. 相撲場

図4 奉天神社境内配置図
『奉天神社誌』から転載。元来番号がふられ、名称が示されているが、見えにくいので主な建物等にa. b. c…を付けて註記を加えた。

正門は木造切妻造銅版葺左右耳門付である。間口15.64尺に奥行12尺で、建坪5.213坪である。設計は上木組員の松山悦次郎で、請負は細川組である。棟梁は井上南舟が務めている⁽⁸¹⁾。

戦後の沿革については、ほとんどわからないが、国民党時代は社殿や鳥居は荒廃していたが残存していたようだ。1951年頃になって、現在の体育館が造られた際に残っていた社殿は取り壊されたのではないかといわれている。

以上のように、主な社殿をはじめ、ここでは逐一書き上げなかったが、判明する付属屋・付属工作物等を含め、すべての工事は日本人技術者や日本人が経営する施工会社が実施している。

3. 撫順神社

撫順と撫順の市街計画

撫順市街は撫順炭鉱の発展にともなって、成立・変転した炭鉱町である。撫順炭鉱の発見は定かではないが、大規模開発は清朝末期に清国人が政府から許可を得て採炭したことに始まる。その後すぐにロシアが東清鉄道を敷設し、1905（明治38）年武力を背景に採炭権を手に入れるが、さらに日本軍が侵出し撫順炭鉱を手に入れて、軍の下に採炭所を設け大規模開発を開始する。この経営を1907（明治40）年に満鉄が受け継ぎ出炭の増大を図ることとなる。満鉄の経営にともない、従来からの中国人の街であった撫順城の渾川を挟んだ対岸千金寨に日本人と地元民との雑居の旧市街地ができあがった。ところがその市街地は石炭層の上に建設されており、露天掘り区域の拡張にともない移転を余儀なくされる。そこで新たな市街地が計画され、1925（大正14）年から1929（昭和4）年にかけて、ほぼ移転を完了したのが新市街地である。新市街地区は東を永安橋、西を渾河の支流楊柏堡河とし、その間の渾河南側一帯の86万6000坪である。このうち東部の高台は社員住宅地として、中心に円形大広場をとり、この大広場を基点として放射状に道路を配して区画割している。一方、西部は一般市民の居住地で、商業地域および工業地域となっている。撫順駅を基点とする放射状と格子状を組み合わせた区画割とし、南北に走る中央大街で東西両市街を分けている。中央大街沿いには炭鉱事務所・満鉄病院・警察署・銀行・郵便局など主要な官庁などが建ちならぶ。

撫順神社の沿革

『沿革史』など文献資料を中心に撫順神社の沿革をたどれば以下のようなになる。

最初の神社は千金寨山麓の桜ヶ丘に1909（明治42）年春に着工、同年冬に本殿・玉垣・鳥居などが竣工し、翌1910年1月に遷座祭を行なっている。社殿はすべて木造神明造で造られていた。

1918（大正7）年には、木造社殿の足元部分が腐朽し、修理を行うとともに、50間ほど後方へ曳家し、境内の拡張を図る。

さらに、8年後の1926（大正15）年には、市街地下に埋蔵する石炭を露天掘りするため、市街地とともに神社も移転の必要にせまられ、西公園の丘陵地に再度移転されることになる。再移転後の神社は同年5月に着工、10月に遷座祭が行なわれる。

1928（昭和3）年、昭和天皇の即位大典を記念して、拝殿改築が行なわれ、同年7月着工、11月竣工している。この拝殿・幣殿は躯体を鉄筋コンクリート造とした建物である。なお、もとの拝殿・幣殿は祭器庫などに使用するために新たな境内地に移転された。

1933（昭和8）年，木造本殿は腐朽箇所が生じたため，改築されることとなり，同年7月着工，翌1934年5月竣工，6月遷座祭を行なっている。

1935（昭和10）年，遷座25周年記念として，参道・相撲場の改修・植樹・神饌所および神職住宅拡張工事を行なう。

1937（昭和12）年，遥拝所および国旗掲揚台の奉納造営。

1938（昭和13）年，二階建て社務所竣工。

撫順神社の立地

再移転後の撫順神社は撫順駅から見て南東方向の高台上に立地する。駅から南東方向に伸びる承安大街を進み，突き当たりを南に折れ，さらに，進んでその突き当たりの石段（62段の石段で，現在も残っている）を登った先の右手に神社は位置していた。かつて社殿は東面して建っており，神社跡地から街の中心部を見渡すことができるが，街の中心施設が集中する中央大街や駅などには社殿の背面および側面を見せることになる。

市街計画の中においては，神社はそのときそのときの都合により，移転が繰り返された。そのため，市街中心部からの見えについては考慮された可能性もないではないが，市街計画上の基点となるようなことはあり得なかったと考えられる。

現在跡地は，かつて参道・社殿があったと思われる地域を取り囲むように集合住宅が建てられている。かつて社殿が建っていた位置には公安局退職者のためのクラブハウスが建てられ，神社の面影を残すものはほとんどない。現存する62段の石段を登り，さらに南に続く取り付き道路から，西に社殿に向かう参道がかろうじて面影を残しているにすぎない。その元の参道の突き当たりに社殿は東面して建っていたはずである。とはいえ，詳細に見れば参道途中の両脇に灯籠の台座と思われるコンクリートの塊が転がっており，クラブハウスの横には石造の鳥居の部位が無造作に置かれている。またかつての社殿背面側を旧満鉄病院の方に下る道の途中にはコンクリート製の別の鳥居の丸柱が転がっている。

現地調査・聞き取り・古地図・文献資料などをもとに復原したものが，資料編の図3-1である。参道入口付近に石造鳥居，その奥両脇に灯籠，さらに奥に木製鳥居，その鳥居をくぐると2-3段の石段があり，その突き当たりに大きな切妻造平入の拝殿が配され，その拝殿の背面から突き出るように幣殿があった。さらに，奥に少し離れて，一段高まった基壇の上に，木造神明造の本殿が載っており，幣殿両脇から本殿に向い，本殿基壇廻りを取り囲むように玉垣をめぐるせていた。拝殿は鉄筋コンクリート造で外壁に木造の付け柱などを貼り付けて，木造屋根を掛けた構造であったと思われる。拝殿は，間口柱間5間（ただし，柱間を12尺ほど，他の柱間も同様），奥行柱間4間で，背面に3間に2間ほどの幣殿が付き，あわせて100坪ほどと巨大な規模である。本殿は切妻造平入の神明造で，柱間は桁行3間に梁間2間である。柱間は正面中央の柱間をやや広く取っているようで，等間隔ではないが，10坪だったようである。⁽⁸²⁾

戦後の沿革

聞き取り調査によると，神社は，戦争直後には一時放置されたままであった。1950年頃になって旧

社殿は撫順公安局の事務所となる。その後、建物の一部を拘置所として使われたこともあり、時には100人もの人々を収容したこともあると伝えられる。事務所や拘置所として使われたというから、鉄筋コンクリート造で、規模の大きかった拝殿および幣殿部分が使用されたのではないと思われる。当時、旧社殿は中国人から「大廟」と呼ばれていた。1978・79年頃に公安局が引き払った後、中日友好のために保存すべきだとの意見もあったが、神社は日本軍国主義の象徴であるとの考えから、政府は保存する必要がないと判断した。旧社殿が壊された跡には現在、公安局退職者のクラブハウスが建っている。

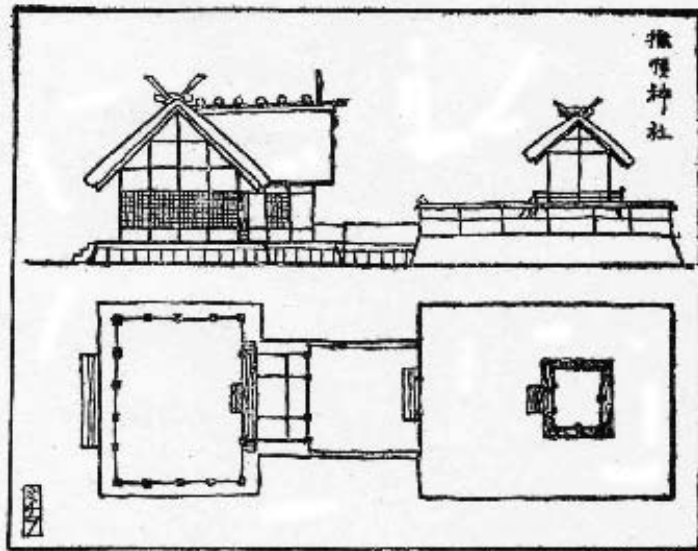


図5 撫順神社社殿略平面図および略北立面図
手塚道男「満洲の旅に描く(一)」から転載。

4. 鉄嶺神社

鉄嶺と鉄嶺の市街計画

鉄嶺は、遼寧省の中部やや北に位置し、遼河の中流にあたる。瀋陽から70 kmほどの地で、旧南満洲鉄道(哈大鉄道)が通る。鉄嶺は後背地に特産物の産地をひかえ、遼河にも近接しているため、水運が盛んであった頃は特産市場として繁栄したが、鉄道が開通すると開原に特産市場を奪われた。市街は附属地・商埠地・城内からなっていた。城内はもと城壁を方形に巡らした鉄嶺縣城で、商埠地は城内と附属地に挟まれた地で、附属地が整備されるまでは日本人も多数住んでいた。

満鉄が附属地の経営を始めた時期には駅付近の一部を除いて荒涼たる草原であった。まず、鉄道線路の東側を1907(明治40)年から1916(大正5)年にかけて第1期として整備した。次いで、第2期として市街地を鉄道線路の東西に区分し、東区は施設計画を拡張・変更に努め、駅前中央通りを10間から15間幅に拡幅するなど変更し、この通りを基準に格子状の区画に整理を行った。一方、西区は工業地域として計画した。

鉄嶺神社の沿革とその様相

鉄嶺神社は大正天皇の御大典を記念して、1915(大正4)年に創建された。鉄嶺公園内の中央部に盛土の上に西面して造営された。祭神は天照大神・大国主神・明治天皇・靖国神である。3坪の本殿は古写真によると木造の神明造の鉄板葺で、千木・勝男木も載っている。12.3坪の拝殿は入母屋造平入の鉄板葺で、正面が柱間3間に奥行が2間半であろう。本殿まわりには玉垣が巡らされていた。そのほか、300坪の境内地には社務所(29.94坪)・宝物並神輿庫(14.3坪)・手水舎・鳥居2基・

狛犬・石灯籠があったようだ。

聞き取りによると、神社の周囲の公園は芝生であったので、芝生に座って絵を描いたりしたことはあるが、先生に連れられて神社を参拝したことはない。ただし、神社の前を通過する時には、必ず敬礼しなければいけないと先生に教えられていたという。また、神社の境内には銀杏の木が植えられていたので、柵を乗り越え、ぎんなんを採りにいったことがあるが、見つかると大変なことになるので、緊張して社殿を確認するほどの余裕がなかったという証言もある。

戦後の沿革

解放後、社殿は解放軍の被服庫として使われ、後に鉄道局のものとなり、さらに内部を改装して鉄道局の家族の住宅に転用されたという。その社殿は2階建てほどの高さがあり、間口が20mほどであったというから、拝殿もしくは社務所ではないかと思われる。この建物および鳥居は1988年10月頃に、政府の命令で壊されたようだ。

5. 開原神社

開原と開原の市街計画

開原は遼寧省の北部にあり、遼河中流の東岸に位置し、旧南満洲鉄道（哈大鉄道）が縦断している。清代に県が置かれ、1914年奉天省遼瀋道に属し、1929年奉天省が遼寧省と改められた。

日露戦争直後は、開原駅付近はさびしい駅と焼け残ったロシアの兵舎の廃屋があるのみであったが、満鉄が附属地経営を始めると、駅が改められるとともに、1909（明治42）年に初めて市街計画が作られ実行に移された。漸次人口が増加し、満鉄はさらにインフラの整備に努め、官庁や各種の機関が増強されると、従来鉄嶺に集まっていた大豆・高粱などが集積するようになった。大正期に入ると第一次世界大戦の特需によって、市街が急激に膨張し、南方に拡大させる余地がなかったため、北方に拡大させざるを得なくなる。これにともない、駅舎を北方に移転する計画を策定するが、在留日本人達の間で意見の対立があり、すんなりとは決まらなかった。1925（大正14）年に至り、ようやく市街計画の変更が決定する。そして、1929（昭和4）年に懸案の駅舎移転問題などが解決し、北方に駅が移転されることになる。

開原神社の様相

1915（大正4）年段階には開原在住の日本人の戸数が300戸に達し、神社創設の意見がもちあがる。大正天皇即位の御大典を記念して神社を創設することになり、1915年9月4日附で神社創立が認可される。翌16年満鉄の補助を受け、附属地第7区9號地に社殿は竣工する。祭神は天照大神と大国主神である。ところが1926（大正15）年になって、市街計画の変更にともない、社地を移転せざるを得なくなる。そこで、1927（昭和2）年8月30日附で認可を受け、社地を移転し、社殿の新築を行ったのが、神明街1番地の開原神社である。さらに、1930（昭和5）年に明治天皇を合祀している。

本殿が3.6坪、拝殿が18坪、幣殿が13坪の規模である。古地図や古写真から判断すれば、拝殿は間口6間に奥行3間ほどで、切妻造平入の神明造風の建物で、幣殿と一続きにエの字の平面を構成していたようだ。その奥に本殿は独立して建っていたものと思われる。そのほか、社務所（67.898坪）・手

水舎(2坪)・神具所・鳥居・石灯籠・狛犬・国旗掲揚塔などがあつた。

開原神社の立地

開原神社は、駅から東北方向に斜めに貫く「開原大街」の末端近く「番山街」を北西に折れ、突き当たりをさらに西に曲った3区画目に当たる。門前左右の区画には満鉄社宅があり、まわりを日本人街で囲まれていた。また、神社は、当初の市街計画の北端部にあたり、北方に市街を拡大した新たな市街計画では、新駅から近い場所に位置することになった。社殿は当初の市街計画の中心部に向かって南面して立っているが、市街計画が変更されたため、新駅から東に伸びる中央大街に対しては後ろ向きに建っている。当初の神社が位置した第7区9号地がどこに当たるのか不明であるため、当初の神社の立地条件はわからないが、移転後の神社はまったくの平坦地に建てられている。また、市街計画の変更にもない、神社を移転せざるを得なかったことから、少なくとも神社が市街計画の基準となるような位置を占めていたとも考えられない。移転された神社は日本人街の中に置かれているものの、新たなメイン道路に背を向けており、街全体の要所として計画されているとも思われない。

当時の神社は、中国人に「日本廟」と呼ばれ、中国人立入り禁止であつた。もっとも神社は日本人街にあり、日本人街そのものにも、通常は中国人が入ることができなかった。「日本人街に近づく」と緊張した。日本人に殴られても黙るしかなかった」との証言もある。それでも、警察官は中国人でも毎週月曜日に参拝する規則があつたようだ。

戦後の沿革

日本人が引き上げたあと、一部の中国人が神社の中に入り金目のものを略奪しようと図つたが、神社の中には何もなく、建築部材を取り外し持ち帰るのがせいぜいであつた。社殿は柱と屋根のみの状態で放置されていたが、文化大革命前に取り壊され、集合住宅が建てられた。その後、さらに市役所に改築され現在に至っている。現状では、神社としての面影はまったくないが、市役所の背面側にぶつかる道が、かつて両側に満鉄の社宅が配された神社門前の道である。その道の突き当たったところに鳥居が立っていたのであろう。

6. 四平街神社

四平街と四平街の市街計画

新京(長春)と奉天(瀋陽)とのちょうど中間あたりに四平街はある。鉄道が開通してからできたこの町は、鉄道とともに発展してきた町でもある。満鉄が附属地経営をはじめると、1909(明治42)年四平街附属地における最初の市街計画が立案された。鉄道線路によって市街を東西両区に分ち、第1期工事として西区の開発に取りかかった。駅を基点として、西に伸びる中央大街を基準として格子状に区画割を行い、南は山吹町、北は市場通り、西は八条通りを限りとして街区を構成した。東区は耕地として街区拡張余地として保留した。1922・23(大正11・12)年度に市街計画が見直され、東区は糧棧・工場地域にあて、共栄大街中央路の北を兵営・工場地域、南を糧棧・工場地域とした。西区は中央大街と七条通りとの交差点に直径150mの円形の中央広場を設け、これを囲んで小学校・病院・地方事務所を建て、市政の中心地区とした。また、第1期の格子型街路網を整備・拡充した。こ

の西区を商業住宅地域とし、公園・運動所・官公用地を適所に配置した。

その後、南は大連、北はハルビンへ向かう鉄道と、東南方の通化、西北方の内モンゴルへ通じる鉄道が交差することになり、交通の要衝として、農産物の集散地としてこの街は発展した。戦後、1945～49年の国内戦争では、2回に渡り激戦がくりひろげられ、壊滅的被害を受けた。その後、街は復興され今日に至っている。

四平街神社の沿革とその様相

1919（大正8）年に四方街神社は、四方街公園の内に創建された。天照大神・大国主神・明治天皇を祭神として、神殿・拝殿・鳥居が造営された。当初は氏子が少なく、専任の神職もおらず、祭典の際には公主嶺神社の神職を頼み祭事を執り行った。1922（大正11）年に関東庁令で「関東州及南満洲鉄道附属地神社規則」が定められると、早急に神社としての設備を整えねばならなくなった。しかし、氏子が少なく、財政的にも逼迫しており、思うにまかせられなかったようだ。1929（昭和4）年になって、満鉄の承認・関東庁の許可を得て、公園正門前の敷地に、新たに社殿を建て遷座祭を行なった。なお、元の社殿は新たな境内地に移築し、境内摂社稲荷神社とした。

古写真によると移転後の本殿（3坪）は一段高くした基壇上に建つ流造で、基壇回りに玉垣を巡らしている。拝殿は入母屋造の大きな建物で、背後に幣殿（19.04坪）を突き出しているのであろうか。そのほか、神庫（19.04坪）・社務所（33.58坪）・手水舎・鳥居・狛犬があったようだ。境内地は10,324坪である。

四平街神社の立地

駅から中央大街を西に、中央広場を過ぎると、右に四平街公園、左に四平街神社があった。神社の廻りは女学校・農学校・商業学校が配されている。地形は平坦地である。神社へは中央大街を南に折れた街路を取り付き道路とし、その道より西に向かって参道は延びていた。参道奥に社殿は東（正確には北に少しふれている）面して建っていた。

戦後の沿革

1945年の戦争が終わった直後は、民衆が金目のものを求めて略奪に走るようなことがあったようだ。その後は漸次社殿の部材を取り外して持ち去るような事態が進行した。文化大革命の頃にはいつのまにか、建物はなくなり、荒地となっていたという。跡地は、1980年代からは軍の施設となっている。軍施設のため、調査が難しく未確認だが、外からみる限り、近代的建物群が建っており、神社時代の遺物は残っていないと思われる。

7. 公主嶺神社

公主嶺と公主嶺の市街計画

公主嶺は吉林省の中部南寄りの旧南満洲鉄道（哈大鉄道）沿いにある。北東の長春と南西の四平間のほぼ真ん中に位置する。公主嶺附属地は、もとロシアが軍事都市建設の方針のもとに、広い市街地を設定したのに始まる。ロシアは1903（明治36）年東西の兵営を建設、幹線道路計画を立て、宿舎な

どを建設し、開発を進めたが日露戦争で中断した。これを引き継いだ日本の軍政時代には、ロシアの計画を踏襲しつつ、鉄道の北を軍の駐屯地として開発し、軍施設を中心に官庁にあてて、一般人の居住を許さなかった。一方、鉄道の南を商店街などにあてた。そのため北に官庁街、南に住宅街と商店街に分かれることとなった。満鉄の経営に移ると、市街計画を立て、1908（明治41）年に工事に着手。この計画では、在留日本人の要望を受け、鉄道北に日本人をまとめて市街を建設する計画を立てたものの、財政上実現できず、商店街は鉄道南に発展することになった。その結果北区を公共施設・住宅地区、南区を商業地区・工業地区に当てた。さらに、1913（大正2）年には北区に農事試験所が設置されるなどの計画の変更が行なわれた。

公主嶺神社

公主嶺神社は大神宮・招魂社・稲荷社の総称である。天照大神を祭神とする大神宮を本社とし、招魂社と伏見稲荷を祀る稲荷社を境内社とする。大神宮は、1909（明治42）年に当地に居住する日本人有志が敬神会を組織して寄附金を集め、公園内に神殿を建てたことに始まる。大正天皇即位の御大典を記念して神殿・拝殿を造営し、1916（大正5）年に遷座祭を行なっている。満洲事変後、軍の駐屯・各種官庁が設置されて在住日本人が増加した。1937（昭和12）年、紀元2600年記念事業として、拝殿・社務所（弓道場を付設していた）の新築、招魂社の改築を行なった。拝殿は9.25坪、社務所は21坪で、手水舎・鳥居・石灯籠・狛犬などが配されていた。社殿の内部は幣殿を板敷、拝殿を土間とし、⁽⁸³⁾ 厳冬期でも参拝できるよう工夫されていた。境内地は745坪である。「公主嶺附属地平面図、縮尺五千分之一」（資料編地図7-1）によると、神社が立地する公園は公主嶺駅の線路や倉庫を挟んだ裏側で、鉄道用地とのあいだに道路を挟んで立地している。方300m角ほどの区画の北東寄りの縦270m横200mほどが広い公園となっており、公園の駅側やや東寄りに大神宮と招魂社・稲荷神社が軸を若干ずらしながら、ほぼ南面して建っているようだ。大神宮社殿の脇に沿うように弓道場も描かれている。

また、駅の裏側には出入口がなく、駅出入口のある北区とは陸橋で結ばれるのみで、公園側は不便であった。鉄道の北側の公主嶺駅前の泰平通に面して建つ公主嶺小学校ではラッパの合図で集合し、⁽⁸⁴⁾ 鉄道をまたぐ泰平橋を渡って神社の祭典に参列したという。

聞き取りによると、日本人は鉄北（北区）に多くが住んでいた。神社が建つ公園の周りには日本人が経営する商店は多かったが、居住する日本人はあまり多くなかった。むしろ、多くの中国人が生活していたという。公園は中国人も利用できたが、神社に立ち入ることはできなかった。中国人の子供たちにとってはまわりで遊んだりして、神社は見慣れた存在ではあったが、あまり関心はなかったようだ。

戦後の沿革

地元の人たちからの聞き取りによると、神社には略奪されるほどのお宝や金目のものは何もなく、建物の部材が取り外され持ち去られた程度であった。社殿も直ちに壊されるようなことはなく、児童の施設や公園管理人の事務所として使われてきたという。1983年夏、公主嶺公園を再訪された公主嶺小学校27回生の山浦薫氏の文章によると、神社は鳥居と拝殿だけは建っていたとある。⁽⁸⁵⁾ また、『満洲公主嶺〈写真集〉』に収録された1987年に撮影された写真（図6・7）からも鳥居・拝殿・狛犬が確

認でき、1987年にはこれらがまだ残っていたことが判明する。

ところが今では、神社があった公園側が駅の表玄関となり、駅の公園側は駅前広場が造られるなど市街地へと激変している。1999年には公園そのものが、駅前広場や市街地となり、公園はまったく消滅した。この時点で旧社殿等もなくなったと思われる。当然、神社跡地も市街化され、神社が建っていたあたりには、現在公主嶺駅前4号ビルが建っている。

公主嶺神社は創立以来の経緯からか、中国人から隔離された日本人街に立地する神社ではない。むしろ、中国人が多い地区の公園内に立地していた神社である、日本人は跨線橋をこえて神社に参拝していたようだ。一方、中国人は参拝しないどころか、参拝を禁じられていたとの証言もある。神社は、職業柄参拝せざるをえなかった警察官や、集団参拝させられた学校生徒を除く中国人たちにとっては「触らぬ神に祟りなし」の存在であったようである。



図6 1987年の公主嶺神社跡地の様子。右手前に鳥居、奥には旧拝殿が確認できる。「満洲公主嶺〈写真集〉」から転載。



図7 1987年の公主嶺神社跡地に残る旧拝殿。旧拝殿向拝前の左右には石造の狛犬が残っている。

8. 西安神社

西安神社の沿革と様相

西安は吉林省南部、四平街の東南方に位置し、現在名は遼源である。付近は平原と丘陵が交錯しており、西安（現・遼源）駅の北方3kmほどの地点に炭鉱があり、良質の石炭を産する。西安は満鉄附属地ではなく、西安鉱業所とともに発達した街である。そのため、満鉄附属地の他の神社とは性格を異にし、実質的には鉱業所付属の神社の様相である（嵯峨井の分類によると「その他」の神社に分類されよう）。

西安神社の創立は、『西安鉱業所 十年史』⁽⁸⁶⁾によると、西安鉱業所が従業員の精神的中心として神社創立を企画したところ、西安に在住する日本人達からも参加したいとの意見が起こったので、鉱業所と在住日本人とが合議の上で、西安鉱業所社宅街の高台に神社を創立することになったとある。とはいえ、神社の経費を西安鉱業所の親睦団体である「報国会」が支出しており、鉱業所丸抱えの神社であったようだ。西安神社は、1935（昭和10）年8月に地鎮祭、9月に着工、10月に竣工し、11月5日鎮座祭を行なっている。祭神は天照大神・豊受大神・大山祇大神であった。

神社の境内地は2,770㎡で、本殿は一間社流造、拝殿は42.5㎡⁽⁸⁷⁾であった。また、古写真から手水舎が確認でき、「昭和十年十一月吉日」と刻まれた石造の手水鉢が現在も残っている。また、石灯笼の

部位も残存している。氏子数は1,120人であった。⁽⁸⁸⁾

遼源の西安地域の中心部から東の方を見上げた旧社宅街すなわち旧日本人町の高台に神社跡地は位置する。かつてこの日本人街の廻りには有刺鉄線がはりめぐらされ、一部中国人高級技術者を除き、普通の中国人は中に入ることができなかった。ほとんど日本人しか入れない日本人街の中に、神社は立地し、その上、神社には日本人しか参拝できず、中国人は参拝を禁じられていたのだという。また、神社の前方の一段下の壇には関東軍司令部が置かれ、そこから毎朝軍人達が神社に集団で参拝していたようだ。

戦後の沿革

戦後、神社は遼源鉱務局の施設として使用され、今日に至っている。調査が許されなかったので、詳細は不明だが、改造されてはいるものの鉄筋コンクリートの拝殿は残っている。古写真によると、拝殿は入母屋平入であるが、現在は切妻造に改変されている。現在残る建物の、切妻の妻側壁上部に垂木型が確認でき、元入母屋屋根であったことが判明する。聞き取りによると、屋根の改変は7・8年前のことだという。旧拝殿の背後中央には出っ張りが突き出している。この出っ張り部分の内部に一間社流造の本殿が納められていたか、もしくはこの出っ張り部分を幣殿に、さらに背後に本殿が納まる覆屋があったのかもしれない。なお、正面両脇に突き出された角部分は後補であろう。

正面中央に切妻造の向拝が付いており、その妻面に大きな蓑股様の日本風の装飾が付く。外壁はコンクリート壁の腰部分を石張りとする。向拝部分から中に入ると正面に衝立のように壁が立ち、その壁には火頭窓様の窓が穿たれている。内部は⁽⁸⁹⁾ 框ひとつ分上がるだけの板敷き床の土足で使われている。天井は格天井である。格天井を使用する点は日本風といえようが、土足の仕様は寒冷地満洲の独得の使われ方であろう。

IV 満洲における神社のありよう

1 当時の文献からみた満洲の神社

『海外神社史 ⁽⁹⁰⁾ 上巻』によると、満洲など中国における神社規範として、海外神社問題研究会⁽⁹¹⁾において、1938（昭和13）年4月に「満洲及支那ニ奉斎スベキ神社ノ基本的条件」がまとめられている。この条件は、6項目からなり、「一、日本民族ノ在ル処必ズ『神社』アリ、コレ、歴史上ノ事実ニシテ同時ニ我が民族ノ信念デアル。」からはじまり、・神社を中心として神社を通じて、天皇が行なう政道の世界を作り上げねばならない。・神社は時代と環境とに順応し調和しつつ無窮に創造・進展しなければならぬ。などの項目をあげ、海外における神社のあるべき理念について述べ、最後に実地にあたっては、現地の事情により若干変更するのは当然であるとしている。

さらに、細目の「一」で「御祭神」、「二」で「御神体」と具体的内容をあげている。

細目の「三」は「社殿」で、以下のように記されている。

「 神社ノ奉斎地ハ、農耕又ハ戦争及住宅等ニ依リテ汚瀆サレタル事無キ土地ヲ選定スベキハ勿論デアルガ、今日ノ支那ニ於テ斯ノ如キ清浄ナル土地ヲ求ルハ至難デアルカラ、其ノ土地ヲ祓ヒ浄メテ社殿ヲ造作スベキデアル。」

社殿ハ日本の権現造ノ如キヲ主トシ、支那ノ廟トノ調和ヲ考エルガ好イ。従ッテ鳥居狛犬等神社境内ニ必要トスル造作物ハ支那ノ土地ニ調和セル様式ヲ採ルベキデアアル。手水舎無キ場合ハ身心の清浄ヲ希フ為メニ、香炉等ヲ設置スル。」

すなわち、一段目では、当時の中国の状況を考えて汚染された土地であっても、その土地を祓い清めて社殿等を造ればよい。2段目では、暗に屋根に反のない直線的な神明造のようなものではなく、屋根が曲線的で複合社殿となる権現造のような社殿にして、中国の廟と調和を図り、境内の鳥居・狛犬なども中国になじむような様式にすればよい。第3段目では、日本では身を清めるための必需品である手水も、その土地の風土にあわせ、香炉にかえてもよい、としている。

また、細目の「六」は「氏子」で、

「神社奉斎地ノ全民衆ヲ『氏子』トシテ取扱フベキデアラウ。其ノ信奉スル宗教ノ如何ニ拘ラズ、報本反始ノ誠ヲ捧グルハ東亞民族ニ共通セル麗ハシキ情操デアアルカラデアアル。

氏子ノ中心トナル者ハ差当リ日本人トシテ漸次他ノ民族に及ボスガヨカロウ。但シ『神社』ヲバ日本人ノ専有ト考ヘ、専ラ日本内地ノ延長トナスガ如キハ神社奉祀ノ本義ニ反スルモノデアアル。徒ラニ他民族ノ感情ヲ刺激スルガ如キ行為ハ、厳ニ慎ムベキデアアル。」

とある。すなわち、1段目で、祖先の恩に報いることは、東アジアの民族共通の情操であるから、神社奉斎地の全民衆を「氏子」として取り扱うべきである。として、2段目で、当面の間は日本人を中心とし、漸次他民族にも普及させればよい。ただし、神社を日本人だけのものと考えて、排他的な行為を行なうなどは慎まねばならない、としている。

以上の海外における神社の規範は、当時の日本国内における幹部神社関係者や高級官僚たちの建前である。

これに対し、現地の状況はどのようなものであろうか。同書所収の満洲吉林神社神職の庄本光政の「海外神社の諸問題」⁽⁹²⁾によると、以下のようなものである。まず、当時の「満洲日日」(大連発行)の社説を引用して、社殿建築に対する現地の状況を以下のように紹介している。

「在留邦人が大陸に於ける神社建築様式に要望する所は満支の廟建築との折衷様式でもなく、徒らに大陸に調和迎合せんため神社建築の風格を破脱せるものでもない。内地から離れた日本人が欲するものは一見明白なる簡素な神明造であり千木と鯉木である」

また、氏子についても、当時大使館令によれば朝鮮人も「大日本帝国臣民」の中に含まれているにもかかわらず、朝鮮人の氏子編入を拒否反対するものが大多数であるとの状況が報告されている。そして、そのような状況の原因として、以下の3点をあげている。

1. 神社の使命に対する認識不足。
2. 神社を日本人の専有と考えていること。
3. 満支人の生活事情および思想が日本人と隔たっていること。

そして、その結果として「現在のままに於いても日本人の神社としての機能は充分果たされており、又表面上形式上に於いては満支人の神社参拝もある程度の成績を見ることも可能であろう。而しそれは何処迄も皮相の一線を越ゆることは困難で満支人の血の中、肉の裏に喰い入ることは所詮不可能である。」との見解を示している。

以下に、文献からみた神社の様相について、今回の現地調査から検証してみよう。

2 満洲における神社社殿の実態

今回調査した8箇所の神社のうち本殿の様相が判明する6神社の本殿は、神明造が4例、流造が3例である。⁽⁹³⁾ 判明しない二つの神社についても、拝殿などから判断して日本の神社風の建物であったことは間違いない。いずれにせよ、日本国内における神社形式をできるだけそのままの形で再現しようとしているようだ。拝殿についても同様で、切妻造や入母屋造で外観を見る限り内地における拝殿と変わらない。ただ、内部は厳寒の地である満洲を考慮して、防寒に工夫を凝らし、鉄筋コンクリート造で、窓を二重窓にする新京神社や撫順神社などのような例がある。ただし、鉄筋コンクリート造の躯体の外壁に付け柱などを取り付け、外から見ればまったく木造であるかのごとく拝殿を装っている。古写真などで見る限り、満洲における神社で、「満洲及支那ニ奉斎スベキ神社ノ基本的条件」にいう、中国の廟との調和を考えたと思われる例はほとんどなく、少なくとも今回調査した8例にはまったくない。また、どの神社においても、厳冬期には人や木までも凍らんかという満洲ではまったく実用をなさない手水舎を造っており、ここでも「満洲及支那ニ奉斎スベキ神社ノ基本的条件」の「手水舎のない場合で身心の清浄を強く望む場合は、香炉等を設置する」という代替案はまったく考慮されていないようだ。

満洲における社殿の実態は「内地から離れた日本人が欲するものは一見明白なる簡素な神明造であり千木と鯉木である」という、「満洲日日」の主張は当たらずとも遠からずの実状であった。満洲に侵出した日本人は自国の伝統こそ第一として現地に順応を図ることなどまるで考えなかったのが実態であろう。「基本的条件」にいう「神社奉祀ノ本義ニ反」していたのである。

附属地市街計画の立案年・神社の創建と神社の位置

満鉄附属地の多くは、東清鉄道時代に帝政ロシアが清より獲得していたものをポーツマス条約によって日本が継承したものであり、ロシアが立案した市街計画を引き継ぐものが多い。とはいえ、満鉄創業当時の附属地は大連など一部附属地を除き、道路・排水などの設備はほとんどない状態であった。そのような状態であるから、当然市街の建設が進むにつれて、人々が住み着き、そしてはじめて神社創建が図られることになる。すなわち、附属地においては、市街計画が立案・実行された後に神社は創建されることになった。⁽⁹⁴⁾ 『沿革史』の各論に収録された特別区を除く14管内の14の附属地について、最初の市街計画の立案・実行年と神社創建年を整理したものが表3である。日露戦争後の1904・05（明治37・38）年に軍政署によって市街建設が始まった営口・安東および1916（大正5）年から開発が始まる鞍山を除けば、その他の附属地は満鉄が経営を始めた1907～10（明治40～43）年に満鉄によって市街計画が立案・実行されている。⁽⁹⁵⁾

神社の創建では早いもので安東神社の1905（明治38）年、そのほか明治期が遼陽神社・公主嶺神社・撫順神社である。市街計画の中で、神社地があらかじめ予定されていたことが判明するのは1916（大正5）年に計画された鞍山だけである。その他は計画段階にあらかじめ予定された形跡はない。神社は創建時において公園内に置かれる場合が5例、街中の区画内に置かれる場合が6例、街区外の山上・山腹に置かれる場合が3例である。その後の移転を経て落ち着いた段階で見ると、公園5例、街中の区画4例、山上・山腹など5例である。街中から街外の山地に移転した2例は市街計画上の変更

表3 満鉄附属地における市街計画立案・実行年と神社創建年

	最初の市街計画立案・実行年	神社創建・鎮座祭年	神社所在地
遼陽	明治40年	明治42年	白塔公園
瓦房店	明治40年	大正元年鎮座祭	駅前公園隣→守備隊北東山地
鞍山	大正5年	大正13年	鎮守山の高地
営口	明治38年(軍政署)	大正9年(民団行政委)	街の東寄りの旭公園内
大石橋	明治40年	大正3年	蟠龍山中腹
本溪湖	明治43年	昭和5年(明治43年山上)	附属地東南に続く山上→山麓
安東	明治37. 38年(軍政署)	明治38年, 大正13年移転	現女学校→北方山腹
撫順	明治40年・大正14~昭和4年移転	明治43年・大正15年移転	桜ヶ丘→西公園の一丘陵地
開原	明治42年・大正14年計画変更	大正4年・昭和2年移転	第7区9号地→神明街1番地
公主嶺	明治41年	明治42年・大正5年改築	公主嶺公園
鉄嶺	明治40年~大正5年	大正4年	鉄嶺公園
四平街	明治42年	大正8年	四平街公園→公園正門前, 利幸町
奉天	明治40年	大正5年	琴平町
長春	明治40年	大正5年	中央通西, 平安町

と周囲の環境の変化のためだとされる。山地から街中への移転はないが、参拝の便を考慮して、山上から山麓に移された本溪湖神社の例がある。近くに山地がある場合が多い鞍山街の神社は山に立地する例が多い。今回現地調査を行なった8例⁽⁹⁶⁾についてみると、平原部が多いためか、公園内と街中の街区内に立地しており、山地に立地する例はない。平原部の街中に神社が立地する例でも、街中の駅に近い(新京神社など)や中心施設に近い(奉天神社など)比較的優遇された場所に立地する場合もあるが、神社地が市街計画上の基点になるような例はない。ほとんどの神社は、都市公園の中か満鉄から提供された土地に立地している。たとえば、奉天神社は中心部を占める円形大広場に面する警察署の裏という恵まれた地に立地するものの、その土地の前身は練兵所で、とくに神社敷地として市街計画時に用意されたものではない。計画時にあらかじめ神社の立地先が考慮されていないことを、裏付けるかのように、神社創建後に移転を余儀なくされる場合が多い。満鉄側としては、願書が出た時点で適当な場所を選んで神社に提供せざるを得なかったのが実状のようだ。市街計画を立案した日本人の満鉄技術者にとっては、神社の位置は計画を行なう上での大きな問題ではなかったと思われる。

3 市街地の中における神社の立地と地域社会での受け止められ方

実質的には西安鉱業所の付属といってもよい西安神社は、鉱業所の社宅街すなわち日本人街の高台に立地している。この場合、日本人街全体が有刺鉄線で囲まれ、普通の中国人は日本人街に入ることもできなかった。いわんや、西安神社には近寄ることもできなかったのである。このように、現地調査の聞き取りなどによると、西安神社を筆頭に、撫順神社・開原神社などは日本人街の中に神社は立地し、中国人は参拝するどころか、近寄ることも難しかったようだ。開原では、現地の中国人たちは「日本人にいつ殴られるかもしれない恐れから、日本人街に近づくと緊張した」というような状況で

あった。一方、公主嶺神社や鉄嶺神社は都市公園のなかに立地しており、公園のなかには中国人も入ることを許されたが、神社境内に入ることは禁止されていたという。公主嶺では、神社の立地する公主嶺公園のまわりには比較的日本人は少なく、むしろ多くの中国人が住んでいた。この神社に満鉄線を越えて、鉄北の日本人街から、日本人達が参拝に来ていた。しかし、現地の中国人は参拝せず、それどころか参拝することを禁じられていたという。また、公主嶺農事試験場に雇われていた中国人でさえ、神社に参拝したことはないと言証する。今回調査した他の神社もほぼ同様な状況にあったのではないかと考えられる。すなわち、時期や地域にもよろうが附属地の神社は日本人だけのものであり、排他的に中国人は近寄せないという姿勢をとっていたところが多いようだ。このことは、吉林神社の神職が報告する「皮相の一線を越ゆることは困難で満支人の血の中、肉の裏に喰い入ることは所詮不可能である。」という実状とも符合する。

これらの事情を勘案すれば、「電車が新京神社前にさしかかると、車掌が『ただいま新京神社の前を通ります。』と告げると、国籍、人種を問わず、脱帽してうやうやしく頭をさげて通ったものである。歩行者ももちろんのこと礼拝して通った。」との記述は、時の「満洲国」の首都新京ならではの様相ではなかったと思われる。

以上の点は、国家神道が「満洲国」において事実上国教化されていき、その先兵として神社があったこと、1945年までに302社におよぶ神社が創建され、強制参拝のほか、神社前を通るときには脱帽・最敬礼を強要されたことなどが行なわれたという事実を否定するものではまったくない。

国家として国家神道化をいかに図ろうとも、それを機能させる装置が完備しなければ、末端部まで行き渡らないのが実状である。旗を振ろうと、全体は予定通りには動かないのである。当時の文献からみた満洲の神社の様相、すなわち日本本土における建前上の理念、現地における実態との齟齬ともよく符合している。朝鮮においては、神社は憎悪の対象として、光復後すぐさま多くが焼き討ちされるなど破壊されている。ところが、満洲においては、敗戦後、多くの社殿は金品の略奪をうけたものの、故意に破壊されることなく、利用可能な社殿は利用され、現在まで使われているか、もしくは近年まで残っていた。このことこそ、満洲において、「満洲国」統治の精神的支柱となるべき神社の役割が、民衆層まで浸透していなかった傍証となろう。神社は隔離された世界の異物（「日本廟」）にしか過ぎないと考えた中国民衆も多かったにちがいない。幸か不幸か、人類の坩堝であった「満洲国」で、日本人はほとんど他の民族と交わることなく、むしろ他の民族を忌避して、日本人だけの社会をつくり生活していたのである。

おわりに

満鉄附属地における市街地計画の多くにおいては、格子状の街区割りに放射状に大通りを通し、要所に配された広場を結ぶ、バロック風の都市計画が行なわれた。基点を満鉄の駅前広場に取り、主要道路は20間幅と同時代の東京より広い幅員の計画であった。パリやベルリンの都市計画を念頭に満鉄担当者は構想したに違いない。だが、それらの構想の中では、神社は、都市軸の基点にも対極点にもなることはなく、その立地場所についてはほとんど考慮されていなかったようである。

また、ほとんどが平坦部地に計画された市街計画であるため、市街を見下ろし、市街から見上げられるという、見る見られるの視覚的な呼応関係なども、神社立地に際し、考慮されていない場合がほ

とんどである。⁽⁹⁷⁾

神道による現地人の教化を目論む統治者たちは、神社を浸透させるためには中国の廟と調和をはかり中国風を取り入れるべきと考えていた。しかし、現場で造られる神社は日本人技術者によって内地神社を忠実に再現することに最大の努力がはらわれ、中国の土地に調和をはかることは省みられず、内地神社と同様な社殿を造り上げた。その上、在留日本人たちの特権意識からか、神社を自分たちだけのものとして差別化し、囲い込む意思の方が強かったように見える。

「神社を中心として神社を通じて、天皇が行う政道」を現地民に教化しようという、関東軍参謀・「満洲国」高官・内地の神社首脳たちなどの目論見は成功しなかったようである。

本稿では調査した建国神廟・建国忠霊廟については触れなかった。満洲国の宗廟であるこれらの廟は他の附属地内に造られた神社とは性格を異にするからである。

最後に、建国神廟については残存する礎石を略実測し、平面形の裏づけを取ることができた。また、一部では知られていたことだが、満洲国における靖国神社に相当する建国忠霊廟の中心部の建物が、驚くべきことに、現在もなおほぼ完全な形で残存していることを再確認した。そして建国忠霊廟の様相は今回報告した「満鉄附属地神社」とはまったく異なった様相を呈している。両廟については稿を改めて論じたいと考えている。

註

- (1) これらについては『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号, 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議, 2004年3月, 『同』第2号, 2004年12月, 『同』第3号, 2006年3月を参照.
- (2) 不十分ながら, 中島は2002年に長春, 吉林, 延吉, 圖門, 龍井の神社跡地の調査を行い, その成果の一部を「海外神社跡地に見る景観の変容」(『環境と景観の資料化と体系化にむけて』神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料1, 2004年12月)に発表している.
- (3) 本章の1「研究史」及び2「満洲国における神社の概観」は, 拙稿「旧満洲国における神社の設立について」(木場明志『植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究』, 文部科学省科学研究費補助金(課題番号13410011)研究成果報告書, 2005年3月)の「はじめに」及び「一満洲国における神社の概観」を要約, または部分的に手を入れたものである.
- (4) 岩下傳四郎『大陸神社大観』1941年, 大陸神道連盟. 復刻版『同』監修・解題嵯峨井建, 2005年, ゆまに書房. 本稿は後者の復刻版を使用した.
- (5) 近藤喜博『海外神社の史的研究』(明生堂出版, 1943年)
- (6) 小笠原省三『海外神社史 上巻』(海外神社史編纂会, 1953年)
- (7) 岡田米夫「神宮・神社創建史」(神道文化会『明治維新神道百年史』第2巻, 1966年)
- (8) 島川雅史「現人神と八紘一字の思想—満洲国建国神廟—」(『史苑』43巻2号, 1984年3月)
- (9) 嵯峨井建「建国神廟と建国忠霊廟の建設—満洲国皇帝と神道—」(『神道宗教』156号, 1994年9月), 同『満洲の神社興亡史』(芙蓉書房出版, 1998年)
- (10) 嵯峨井前掲書『満洲の神社興亡史』, 14~15頁
- (11) 近藤前掲書『海外神社の史的研究』, 276~291頁
- (12) 岩下前掲書『大陸神社大観』, 608~627頁
- (13) 佐藤弘毅「戦前の海外神社一覧Ⅱ—朝鮮・関東州・満洲国・中華民国—」(『神社本庁教学研究所紀要』第3号, 1998年3月), 194~207頁
- (14) 嵯峨井前掲書『満洲の神社興亡史』, 302~332頁
- (15) 藺田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』(吉川弘文館, 2004年)1174~1185頁
- (16) この「満洲国」の国家理念の変容についての叙述は, 塚瀬進『満洲国—「民族協和」の実像—』, 吉川弘文館, 1998年の67~75頁を参照した.
- (17) 「満洲国」人の神社参拝については, 本稿資料編の『海外神社調査表』参照. また斉紅深編著, 竹中憲一訳『「満洲」オーラルヒストリー—<奴隷化教育>に抗して—』(皓星社, 2004年)には随所に現地人学生の神社参拝強制の様子が語られている. 尚本書によれば, 学校教育において神社参拝等の天照大神崇拜の画期となったのは1938年の「新学制」であり, 特に1942年からの「戦時教育体制」であったとされている.
- (18) この開拓団神社については, 前掲拙稿「旧満洲国における神社の設立について」の「三, 満洲国設立以降の神社—<開拓地神社>—」を要約したものである.
- (19) 1941年段階の満洲国の人口は約4300万人, 内, 漢人が約4000万人(満洲人, モンゴル人を含む), 日本人は約100万人, 朝鮮人は約140万人であった. 塚瀬前掲書『満洲国—「民族協和」の実像—』, 12頁.
- (20) 塚瀬前掲書『満洲国—「民族協和」の実像—』, 2頁
- (21) 同上, 200頁
- (22) 以上の満洲開拓団については, 『植民地年鑑11 満洲年鑑11 昭和20年版』(日本図書センター, 2001年, 底本『満洲年鑑』昭和20年・康德12年版, 満洲日報社編, 1944年12月), 191~192頁. 満洲開拓史復刊委員会『復刊満洲開拓史』(1980年, 全国拓友協議会, 底本満洲開拓史刊行会『満洲開拓史』1966年, 以下『満洲開拓史』と表記)90~218頁. 塚瀬前掲書『満洲国—「民族協和」の実像—』, 199~208頁を参照した. 但し, 『満洲開拓史』は第3次について, 「当初から武装移民的色彩をほとんど帯びていなかった」(155頁)と前2回との違いを強調している. 又, 第5次の移民についても「昭和十一年は, また拓務省の第5次試験移民の入植す

べき年であった。しかしながら・・・政府の積極政策により、試験移民の名称は前年の第4次限りとし、第5次は集団移民と改称（171頁）したとしている。

- (23) 前掲『満洲開拓史』, 227～337頁。塚瀬前掲書『満洲国-「民族協和」の実像』, 208～210頁
- (24) 近藤前掲書『海外神社の史的研究』, 383～386頁
- (25) 新田光子『大連神社史』, おうふう, 1997年, 18頁。また, 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史 上巻』(南満洲鉄道株式会社, 1939年, 以下『沿革史』上巻, 中巻, 下巻と略)にも, 「大正4年には御即位大典の記念の意味を以って各地に建設したものが多かった」(781頁)とある。
- (26) 「省別神社設立状況」及び「祭神」については, 前掲拙稿「旧満洲国における神社の設立について」の「一, 満洲国における神社の概観」を要約したものである。
- (27) 前掲『満洲年鑑』昭和20年版, 36～37頁
- (28) 満洲で最も古い神社の一つである, 大連神社は教派神道(宗教)の一つであった出雲大社教布教使松山程三が建てた出雲大社教関東分祠が前身である。1907(明治40)年9月仮神殿鎮祭式, 翌年9月2日地鎮祭, そして1909年10月に鎮座式が行われ出雲大社教関東分祠(後分院)が竣工した。さらに, 1910年10月に大連神社と改称することが関東都督府によって許可された。同時に松山が同神社の社司に就任したが, 松山の教布教師(分院長)の肩書きもそのままであった。松山が1917(大正6)年に社司の地位を義兄の水野直蔵に譲ることによって神社と宗教の分離が完成した。(新田前掲書『大連神社史』, 52～54頁, 92～94頁)。こうした事から大連神社の祭神の中には出雲大社(教)の主祭神である大国主神(命)が最初から入っていた。
- こうした経緯を持っていた大連神社は松山の活動もあって, 初期の満洲の神社に大きな影響を与えた。「満洲国」の祭神に大国主神があるのは, こういう満洲固有の問題もあったのである。
- 尚, この事については, 小笠原も「満洲の神社, 殊に出雲系の神々の神社を考ふる時, 私は松山程三翁を想起せざるを得ない。・・・満洲の出雲系の神社の多くは大連神社の影響を受け従って松山翁の感化が崇敬者に及んでいたと見るべきであろう」(前掲書『海外神社史 上巻』, 26頁)としている。大連神社については, この他に大連神社社務所『大連神社誌要 全』(1917年), 水野久直『明治天皇御尊像奉遷記』(1966年, 赤間神宮社務所), 『大連神社八十年史』(大連神社八十年祭奉賛会, 1987年)等を参照。
- (29) この祭神の国(地域)別比較については, 拙稿「戦前期・中華民国における海外神社の創立について」(神奈川大学法学研究所『研究年報』20号, 2002年3号)参照。
- (30) この附属地についての叙述は, 前掲拙稿「旧満洲国における神社の設立について」の「二の1 南満洲鉄道株式会社附属地」を要約したものである。
- (31) 以上の, 満鉄附属地に関する叙述は, 前掲『沿革史』1～3, 10, 20, 33, 1047～1048頁によった。但し満鉄附属地の内, 安奉線附属地は他の附属地とは条約上の根拠は異なり, 1909年に附属地が設定された事に始まる。詳しくは同上32～33頁, また『南満洲鉄道株式会社30年略史』(原書房, 明治百年史叢書, 1975年。底本は南満洲鉄道株式会社編, 1937年4月)466頁等参照。
- (32) 以上の叙述は, 塚瀬進『満洲の日本人』(吉川弘文館, 2004年)45～66頁を参照した。
- (33) 前掲『沿革史』上巻, 150～151頁。この点については, 塚瀬前掲書『満洲の日本人』, 61～63頁も参照。
- (34) 前掲『沿革史』上巻, 784～787頁
- (35) 前掲『沿革史』中巻, 269頁, なお以下の本文中の各神社の状況は資料の文章を要約したものである。
- (36) 前掲『沿革史』下巻, 113頁
- (37) 前掲『沿革史』中巻, 962頁
- (38) 前掲『沿革史』中巻, 138頁
- (39) 前掲『沿革史』下巻, 40頁
- (40) 前掲『沿革史』中巻, 764～765頁, 前掲『大陸神社大観』451～453頁
- (41) 前掲『沿革史』中巻, 435頁。但し前掲『大陸神社大観』によれば神社建立の議は明治44年に始まった, とされている。これは大正4年の間違いである(449頁)。

- (42) 前掲『沿革史』下巻, 935頁
- (43) 前掲『沿革史』中巻, 341頁
- (44) 前掲『沿革史』中巻, 31頁
- (45) 前掲『沿革史』中巻, 194頁
- (46) この代替わり儀式がもつ一般的な意味については拙著『天皇の代替わりと国民』（青木書店, 1990年）, またそれが植民地を含む帝国の形成に果たした役割については拙稿「明治天皇の大喪と帝国の形成」（岩波講座『天皇と王権を考える 5 王権と儀礼』, 2002年7月）, 同「明治天皇の大喪と台湾」（『歴史と民俗』21号, 2005年3月）等参照.
- (47) 注43に同じ
- (48) 前掲『沿革史』中巻, 558頁
- (49) 前掲『沿革史』下巻, 273頁
- (50) 『満洲移民関係資料集成』（以下『資料集成』と略記）第34巻, 1992年9月, 不二出版（底本『満洲開拓年鑑』康徳11年・昭和19年版, 満洲国通信社, 1944年5月）, 240～241頁
- (51) 同上
- (52) 『資料集成』第32巻, 1992年9月, 不二出版（底本, 『満洲開拓年鑑』康徳8年・昭和16年版, 満洲国通信社, 1941年8月）246頁
- (53) 神社規則については, 前掲『神道史大辞典』1219～1924頁参照.
- (54) 前掲『資料集成』第32巻, 254頁
- (55) 前掲『沿革史』下巻, 795頁
- (56) 前掲『沿革史』下巻, 273頁
- (57) 前掲『沿革史』中巻, 557頁
- (58) 前掲『沿革史』中巻, 31頁
- (59) 前掲『沿革史』中巻, 194頁
- (60) 前掲『沿革史』下巻, 935頁
- (61) 前掲『沿革史』中巻, 172頁
- (62) 前掲『沿革史』下巻, 324頁
- (63) 前掲『沿革史』上巻, 781～783頁
- (64) 同上, 783頁. 尚, 内規中の公費区, 中間区, 特別区についてであるが, 附属地の経営に要する費用は基本的に満鉄が負担していたが, 附属地の内, 公共施設が比較的完備し居住者の経済能力も十分な地方は公費区として, これに公費を賦課していた. また, 人口希薄で未だ公費制度を実施する程度に達しない地方は中間区として, 公費を賦課する事なく, 全て満鉄が経費を負担していた. また, 関東州内及び吉林・ハルビン等の地方事務に関しても公費区に属すべきものは特別区として位置づけた. 前掲『南満洲鉄道株式会社30年略史』, 472～473頁
- (65) 前掲『沿革史』上巻, 783～784頁
- (66) 前掲書岩下傳四郎『大陸神社大観』, 大陸神社聯盟, 昭和16年7月
- (67) 前掲佐藤論文「戦前の海外神社一覧Ⅱ」
- (68) 三箇 巧「新京神社最後のお祭」（『ああ満洲』, 満洲回顧集刊行会, 昭和40年3月, 所収）
- (69) 氷見文太郎『新京案内』新京案内所, 康徳6年（1939年）
- (70) 手塚道男「満洲の旅に描く（二）」神社協会雑誌第29年, 第5号
- (71) 曾根朝起, 「満洲に於ける神社を観る」神社協会雑誌第30年, 第1号
- (72) 手塚前掲論文「満洲の旅に描く（二）」
- (73) 嵯峨井前掲書『満洲の神社興亡史』によると満鉄提供の4千余坪の広大な敷地とある.
- (74) 三箇前掲論文「新京神社最後のお祭」

- (75) 嵯峨井前掲書『満洲の神社興亡史』
- (76) 『奉天神社誌』奉天神社社務所，昭和14年
- (77) 前掲書『奉天神社誌』3～6頁
- (78) 前掲書『奉天神社誌』153～155頁
- (79) 前掲書『奉天神社誌』収録の本殿上棟祭棟札写による。
- (80) 前掲書『奉天神社誌』収録の拝殿上棟祭棟札写による。
- (81) 前掲書『奉天神社誌』収録の正門之棟札写による。
- (82) 手塚道男「満洲の旅に描く（一）」神社協会雑誌第29年，第4号
- (83) 前掲書『満洲の神社興亡史』42頁
- (84) 前掲書『満洲の神社興亡史』42頁
- (85) 『満洲公主嶺 過ぎし40年の記録』公主嶺小学校同窓会，1987（昭和62）年
- (86) 『西安鋳業所十年史』満洲炭鋳株式会社西安鋳業所，康德9年・昭和17年9月
- (87) 『西安鋳業所十年史』
- (88) 佐藤前掲論文「戦前の海外神社一覧Ⅱ」
- (89) 劉先生の案内で，訪問当初は内部まで入れてもらえたが，途中態度を急変させ，調査は許可しないと態度を固化させた。理由は不明。
- (90) 小笠原省三編術『海外神社史 上巻』海外神社史編纂会，昭和28年10月
- (91) 『海外神社史 上巻』によれば，昭和12年に皇典講究所が主となり，各官庁の代表者を加えて設立した。内務省の「神社制度調査会」のごときもの。
- (92) 『海外神社史 上巻』285～297頁
- (93) 6神社に対し，例数が7例と1例多くなっているのは，奉天神社では創建本殿は神明造であったが，改築で流造に変えられており，これらを2例としたからである。
- (94) 別区は他の附属地に収録されている地図がない上，神社に関する記事もないので省略した。
- (95) 遅れて市街計画がおこなわれた鞍山は，他の附属地と異なり，1916（大正5）年鞍残鉄工所創設に際して新たに造られた鉄の街である。
- (96) この8例には，附属地内神社でないため表4からはずしてある西安神社を含めている。
- (97) 青井哲人は，京城モデルとして都市構造の範型を，4条件に整理している。そのうち，次の二つの条件が重要であるとする。・神社の立地は，神威を表現するために「見下ろし，見上げられる視覚的な呼応関係が重視」されたとする。・中心街区と神社は「目抜き通りによって結ばれ，これが都市全体の計画の基準となる都市軸をなした」とする。そしてそれらの条件は植民地の首都・総鎮守の地方ヴァージョンとして広く見出されるとしている（『植民地神社と帝国日本』吉川弘文館，2005年2月）。しかし，満鉄附属地の神社についてみれば，都市軸については神社の位置はまったく考慮されていないようで，この条件に当たらない。「見下ろし，見上げられる」関係については，撫順神社において満鉄病院の背後に社殿の背面がみえる程度にはあるが多少条件に当たるかもしれない。だが，他の神社では平坦地に立地することもあり，この条件には当てはまっていない。
- なお，昨年度調査を行なった朝鮮全羅南道の神祀の立地においては「見下ろし，見上げられる」関係については多くの神祀で確認できた（前掲 註1）「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討」。

調査・執筆分担

調査にあたっては、主に中島三千男と尚峰が聞き取り、主に津田良樹と堀内寛晃が現状記録・写真撮影を行なった。

本稿執筆にあたっては、本文のはじめに・第Ⅰ章・第Ⅱ章は中島、第Ⅲ章・第Ⅳ章・おわりには津田が執筆した。資料編の調査表は中国語による聞き取りを尚が書き起こしたヒヤリングシートをもとに、文献資料・現地調査データを加えて津田が作成した。図面・地図・写真は津田の指導のもと堀内が作図・調整・整理した。

謝辞

本稿作成にあたり多くの方々にお世話になった。

現地調査にあたっては、多くの現地の方々から貴重なお話や情報をご提供いただいた。とくに、西安神社の調査にあたっては、遼源鉱工墓文物館（遼源市）の楊靖毅館長をはじめ、皆さんにはお世話になった。特に、劉玉林前館長には格別のご高配をいただいた。

また、資料・文献や情報の提供にあたっては、石川勇吉、山田英明、赤松徹真、前田孝明、青井哲人の各氏と龍谷大学附属図書館、神社新報社には大変お世話になった。

ここに、記して深甚の謝意を表する次第である。

資料編

凡例

資料番号の頭の数字は、調査した10箇所の神社固有の数字で、本文・調査表・各資料番号を通じて共通している。

調査表について

- ①調査表は聞き取り・文献資料・現地調査記録をもとに作成した。
- ②話者についてはデータがわかる範囲で氏名等を記入した。
- ③主な引用文献資料については資料名を挙げて示した。

図面について

- ①図面は「満州国」時代の復原配置図および現状配置図を示した。
- ②図面は『沿革史』に収録された「満洲国」時代の縮尺1／5000の地図をもとに、配置図を作成した。そのため、現状配置図においても周辺の街路などは「満洲国」時代のままになっている場合もある。これは、詳細で精度の高い現在の地図が入手できないからである。

地図について

- ①古地図は『沿革史』に収録された「満洲国」時代の縮尺1／5000の各神社付近をトリミングして掲載した。
- ②現在の地図は現地調査時に入手できたものは、その地図をもとに縮尺を古地図にあわせて収録した。
- ③地図中に神社位置を→で示した。

写真について

- ①古写真は下記の文献から転載させていただいた。記して感謝したい。
- ②ほとんど同一アングルからの写真も、年代によって写し込まれた情報が異なるため、同一ネガによる場合を除きできるだけ収録した。
- ③現況写真は津田・中島・堀内が撮影した。

古写真・古地図等出典リスト

- 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附属地経営沿革全史』南満洲鉄道株式会社，1939年。
岩下傳四郎『大陸神社大観』，大陸神社聯盟，昭和16年7月
李重『偽“満洲国”明信片研究』，吉林文史出版社，2005年7月
李重『偽“満洲国”明信片研究—偽満国都“新京”（今長春）撮影明信片系列』，吉林文史出版社，2005年7月
『奉天神社誌』奉天神社社務所，昭和14年6月
『満洲公主嶺く写真集くその過去と現在』，公主嶺小学校同窓会，1988年11月
嵯峨井建『満洲の神社興亡史』，芙蓉書房出版，1998年8月
辻子実『侵略神社』，新幹社，2003年9月
『最新地番入 新京市街地図』，三重洋行，康德7年1月
『ああ満洲』，満洲回顧集刊行会，昭和40年3月
『西安鋳業所 十年史』，満洲炭鋳株式会社西安鋳業所，康德9・昭和17年9月
『満洲写真帖』，南満洲鉄道株式会社，大正5年
『満洲写真大観』，大正10年
『一万分一地形図新京近傍一號新京東北部』大日本帝国陸地測量部，昭和14年4月
外島瀏『終戦秘話 満洲国祭祀府の最後—外島祭務処長手記—』，昭和42年1月
『大満洲帝国建国十周年記念写真帖』，建国十周年祝典事務局，康德9年9月

神社名：1. 新京（長春）神社	
神社創建以前の用途：	
戦前の住所：新京特別市敷島区平安町	
創立年代：1915（大正4）年10月	祭神：天照大神・大国主神・明治天皇
崇敬者代表他：氏子戸数 6,000戸	創建動機：明治44年、長春在住の日本人有志の発起により、認可を得るが、実現に至らず。大正4年、大正天皇の即位の大典を機に。
<p>創立・沿革：</p> <p>明治44年：長春在住の日本人有志の発起により、関東庁から神社設立の認可を得るが、実現に至らず。</p> <p>大正4年10月：大正天皇の即位の御大典を機に、関東庁の認可を受け、長春神社を創立。</p> <p>大正5年：鎮座祭。</p> <p>昭和4年：昭和天皇即位の御大典を記念して社殿改築。</p> <p>昭和7年：社号を新京神社に改める。</p> <p>昭和10年：石造玉垣、石造大鳥居・手水舎が奉納される。</p> <p>昭和11年：狛犬・祭器庫・透塀が奉納される。</p> <p>昭和12年：石灯笼・神馬奉納される。</p>	
<p>位置（町の中心からの方位・高低差・見え）：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新京駅から近い、中央通西側の平安町と常盤町の間の広い区画に立地する。 ・附属地内の平坦地で、本殿部分のみ若干盛土して高める。 ・中央通に面して大鳥居を立てる。 	
<p>配置：大鳥居をくぐると、西に向かう参道両脇に松並木があり、右手に社務所、左手に手水舎があり、さらに中門を入ると左右に青銅製の新馬、大狛犬がある。その奥にひとつながりになった拝殿・幣殿・本殿が配される。</p>	
社殿の向き：社殿は東向き	参道の向き：社殿に向かって西に参道が続く
<p>社殿構造形式：本殿（18.25坪）・拝殿（73坪）・幣殿（18坪）</p> <p>拝殿・幣殿は鉄筋コンクリート造の躯体に付け柱などを付け、木造屋根を掛けた構造。</p>	
付属屋・附属物：社務所（61.87坪）・手水舎・鳥居・中門	
現在の用途・住所：幼稚園	
<p>戦後の沿革：敗戦と同時に拝殿は荒らされたが、翌年の春には荒廃した奥殿で祝詞を唱え、社務所で直会を行っている。また、敗戦後まもなく、戦災孤児を救済する中央保育園となり、社務所・社殿などは、昭和21年7月に孤児達ともども帰国するまで、孤児院として使用された。</p> <p>嵯峨井の50年後の調査によると、「長春人民政府機関第一幼稚園」になって、旧社務所・旧拝殿・幣殿の一部を改造されているものの残って使用されていた。</p> <p>旧拝殿は今も幼稚園の施設として使われている。</p>	
話者：	
文献：『満鉄附属地経営沿革全史』・『大陸神社大観』・『新京案内』	
調査日時：2006年8月13日	調査者：津田・中島・堀内・尚

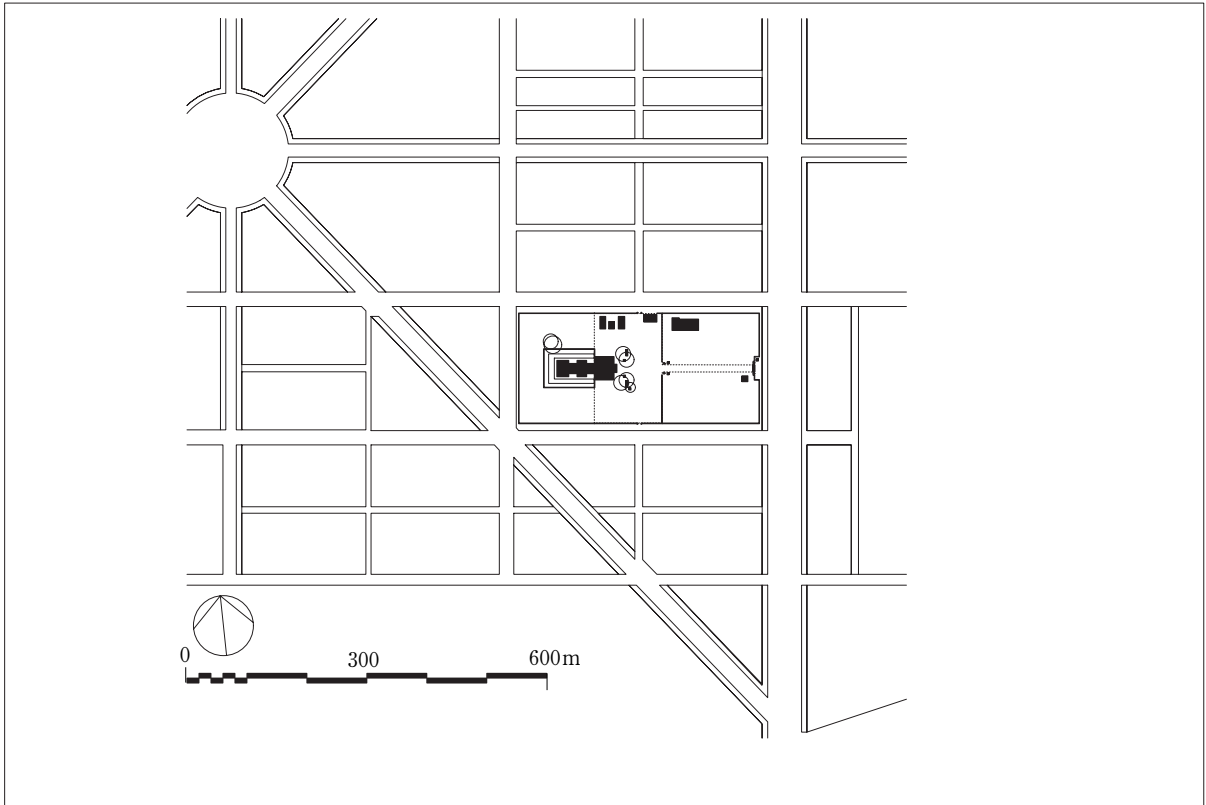


图 1-1 新京神社復原配置图

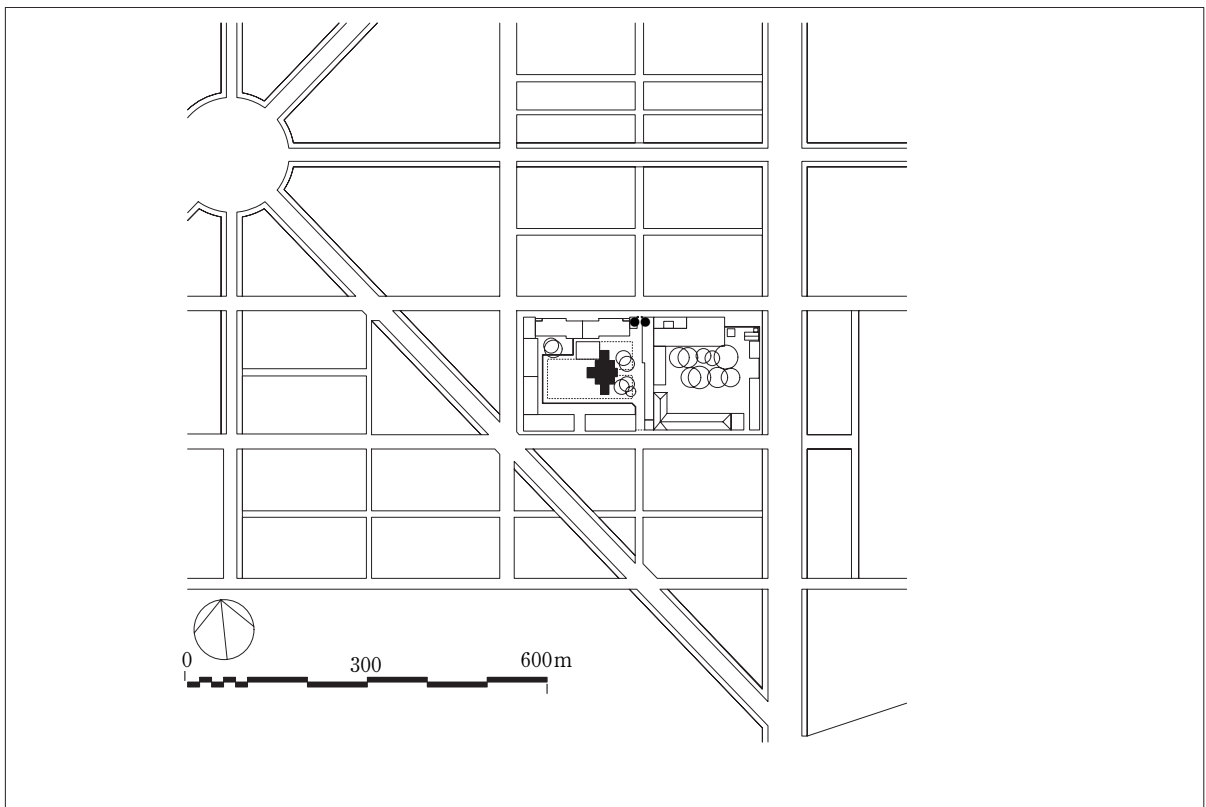
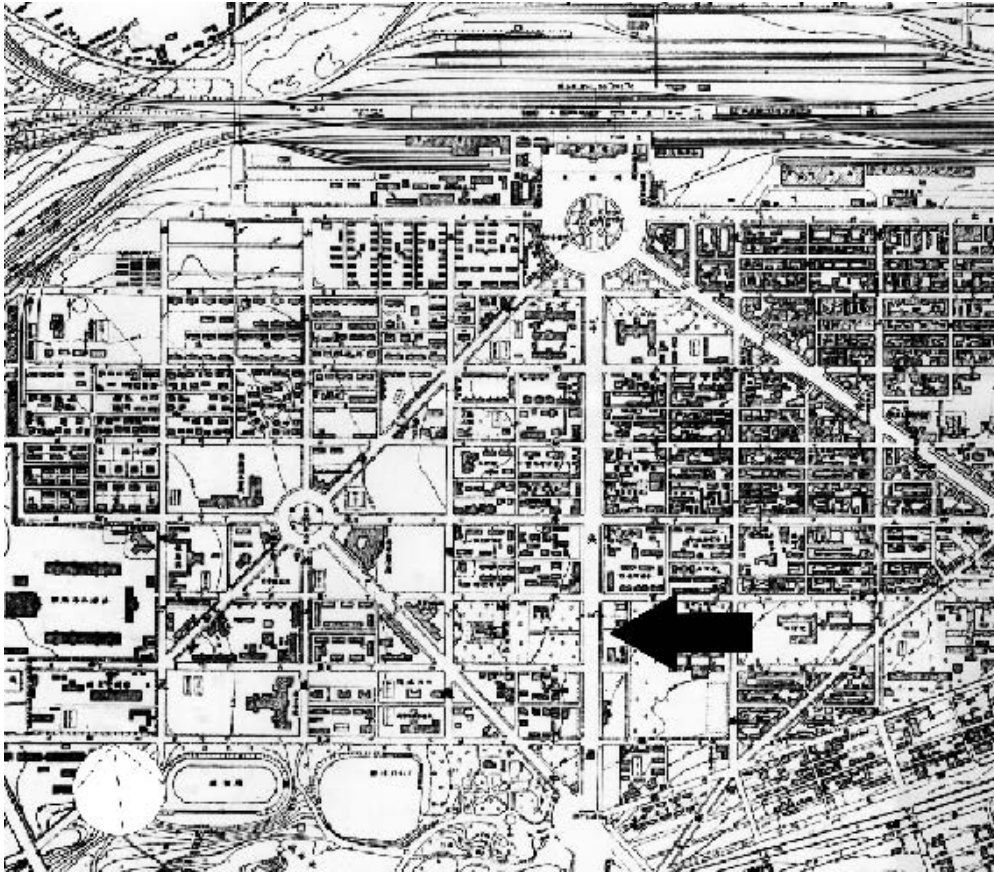


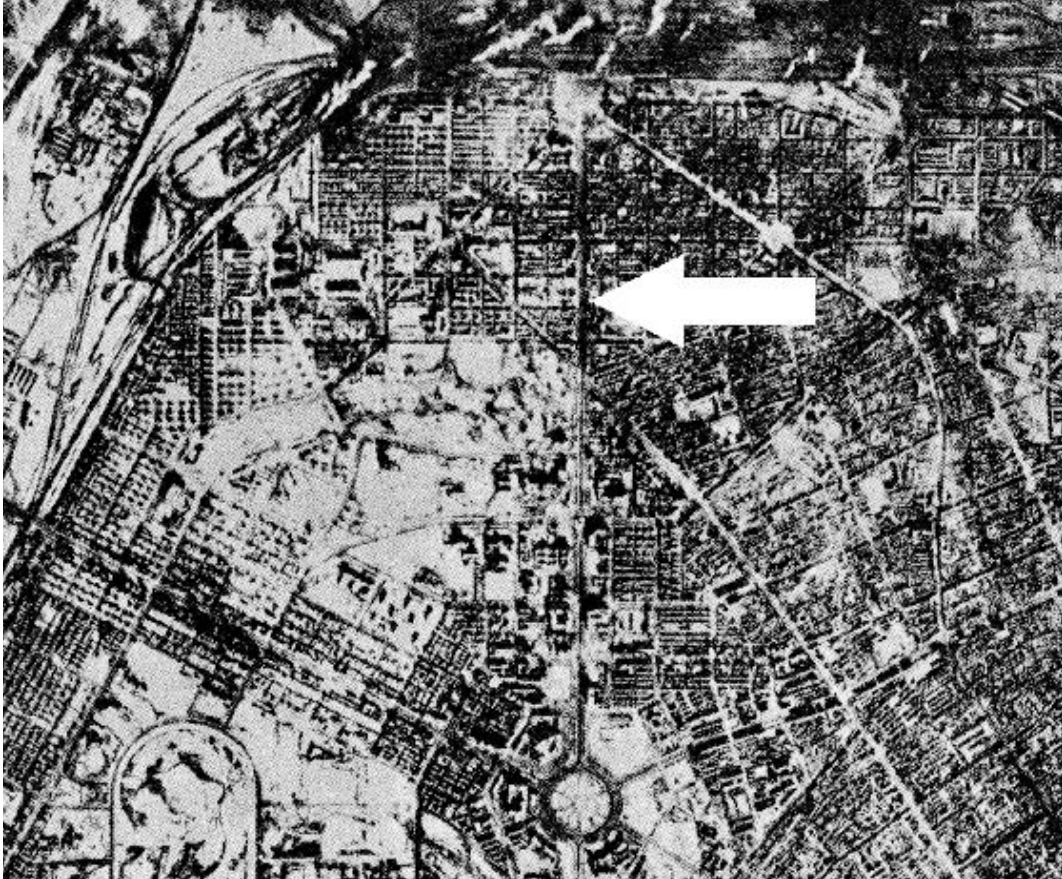
图 1-2 新京神社跡地现状配置图



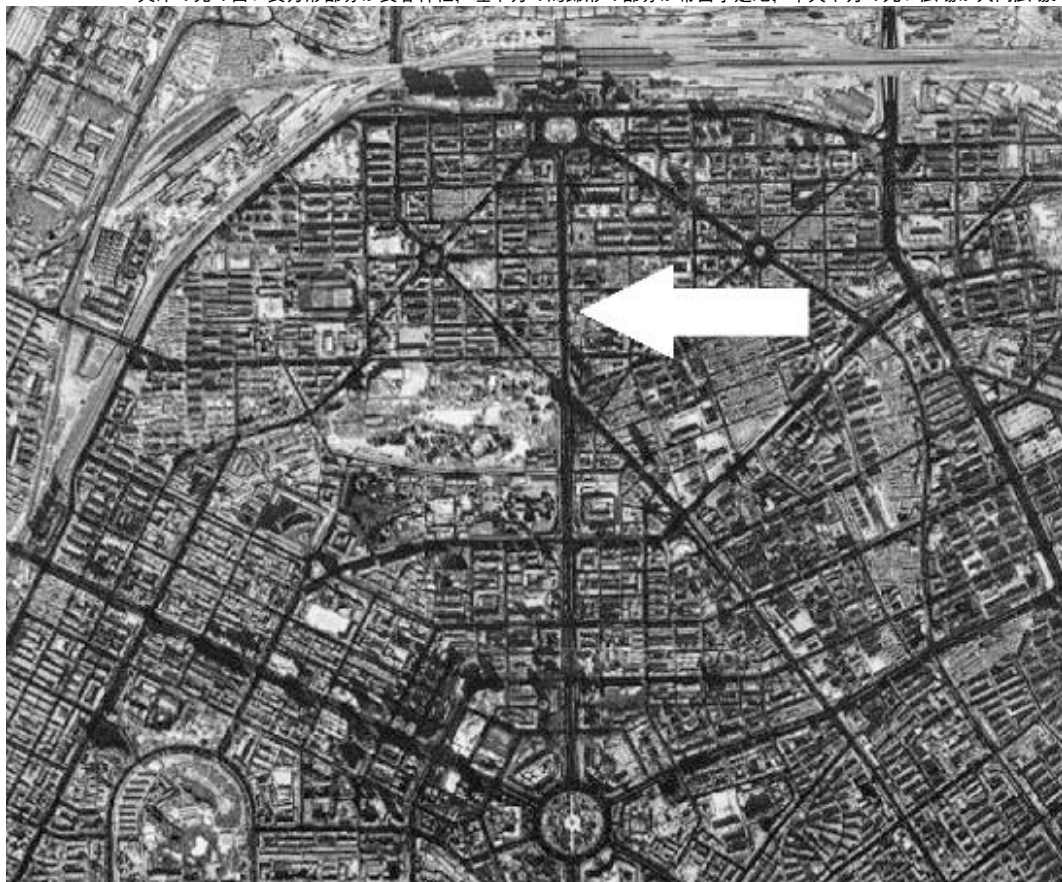
地図1-1 「新京附属地平面図 縮尺五千分一」新京神社付近



地図1-2 現在の長春地図「長春交通図」新京神社跡地付近 (2006年8月版)

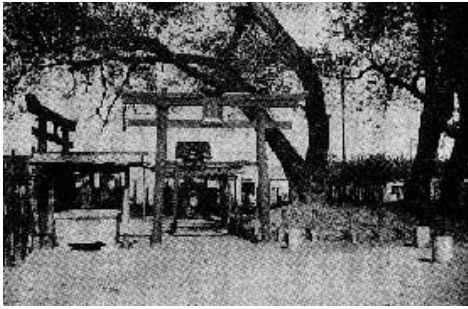


地図1-3 新京の航空写真，昭和二十年八月終戦当時（「ああ満洲」から転載）中央上端近くの白い部分が長春駅前広場，矢印の先の白い長方形部分が長春神社，左下方の馬蹄形の部分が帝宮予定地，中央下方の丸い広場が大同広場。

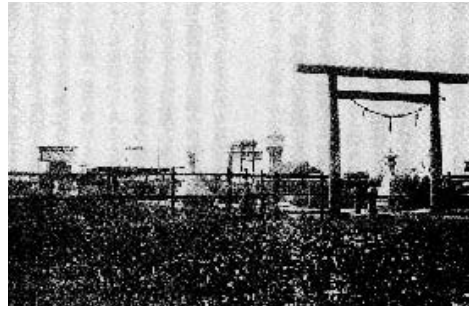


地図1-4 現在の航空写真（Googleマップ <http://www.google.co.jp/maps> から転載）都市の骨格は「満洲国」当時のままであることがよくわかる。

新京神社



古写真1-① 長春稲荷神社（『満洲写真帖』大正5年から転載）。キャプションに「長春東公園に一祠あり」とある。正面中央に台輪を持った稲荷鳥居が立ち、その奥にも鳥居が立ち並んでいる。本殿屋根正面に千鳥破風・軒唐破風が付いているようだ。5年後の古写真1-②の様相と大きく異なっており、この神社は長春神社ではなく稲荷神社だと思われる。



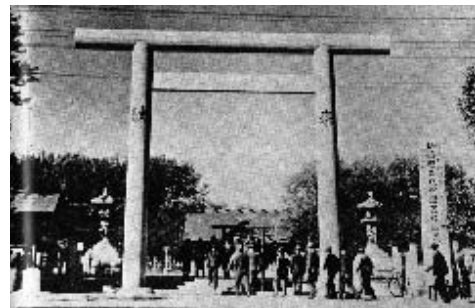
古写真1-② 初期の長春神社（『満洲写真大観』大正10年から転載）。手前の神明鳥居、奥に神明造風の本殿が見える。



古写真1-③ 長春神社（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）。手前に神明鳥居、奥に入母屋造あるいは寄棟造の拝殿らしき建物が見える。



古写真1-④ 長春神社（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）。祭りの日なのか提灯が列をなしている。古写真1-③と同様に入母屋造あるいは寄棟造の拝殿らしき建物が見える。



古写真1-⑤ 新京神社（『沿革誌』から転載）。鳥居脇に「祈願祭並・・・」の立て看板、奥に神明造風の拝殿が建つ。



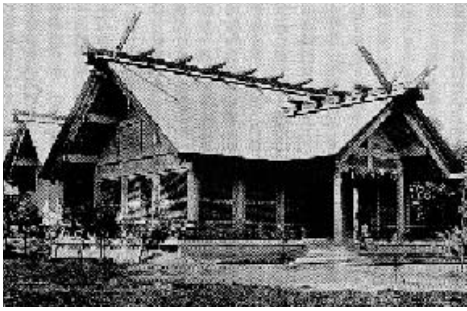
古写真1-⑥ 新京神社（『侵略神社』から転載）



古写真1-⑦ 新京神社（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）。「祝建国十周年」との看板が立つ。



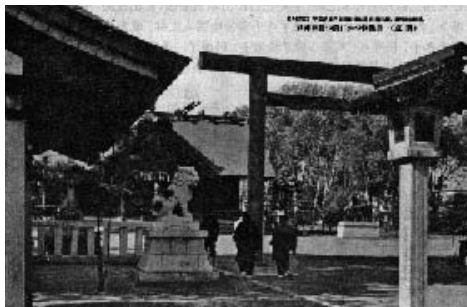
古写真1-⑧ 新京神社（『偽“満洲国”明信片研究一偽満国都“新京”（今長春）撮影明信片系列』から転載）



古写真1-9 長春神社（『満洲写真帖 昭和四年改訂』から転載）



古写真1-10 長春神社（『偽“満洲国”明信片研究—偽満国都“新京”（今長春）撮影明信片系列』から転載）。「長春、長春神社」のキャプションあり。



古写真1-11 新京神社（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）。「（新京）崇敬和やかに満つ新京神社」とのキャプションあり。手前に手水舎・狛犬・灯籠，奥に神馬像・拝殿が見える。



古写真1-12 新京神社（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）。「大新京・新京神社」とのキャプションあり。



古写真1-13 新京神社（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）。「国民的崇敬の念を喚起する 新京神社」とのキャプションあり。



古写真1-14 新京神社（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）。「新京神社本殿並に拝殿（社務所発行）」とのキャプションあり。



古写真1-15 新京神社（『大陸神社大観』から転載）。「新京神社本殿並に拝殿」とのキャプションあり。

新京神社



現況写真1-① 新京神社跡地正面



現況写真1-② 新京神社跡地に建つ幼稚園の表札



現況写真1-③ 新京神社跡地
北面の通りに開かれた出入口に今も石造鳥居が残る。



現況写真1-④ 新京神社跡地。背面から見た現状。旧
拝殿および背後に突き出た幣殿の一部が残る。



現況写真1-⑤ 旧新京神社拝殿南面。
切妻造の拝殿が確認できる。



現況写真1-⑥ 旧新京神社拝殿南面。
棟の高い旧拝殿の妻面に接続する白壁の棟の低い建物は
後補であろう。



現況写真1-⑦ 旧新京神社拝殿南面。
旧拝殿棟を飾っていた勝男木・千木はなくなっている。

神社名：2. 奉天神社	
神社創建以前の用途：練兵場跡地	
戦前の住所：奉天省奉天市大和区琴平町	
創立年代：1915（大正4）年10月	祭神：天照大神，明治天皇
崇敬者代表他：氏子数3,492人	創建動機：日露戦争後，邦人人口漸次増加，神社奉建の議，大正4年即位の大典を機に。
<p>創立・沿革：大正4年10月25日</p> <p>大正4年9月：地鎮祭</p> <p>同年10月初旬：用地開墾植樹</p> <p>同年10月13日：創立願書提出</p> <p>同年10月25日：許可せられる。</p> <p>大正5年初夏：起工。</p> <p>同年12月16日：鎮座祭執行。</p> <p>大正11年11月：拝殿，社務所，正門，社宅，周囲の塀新築の議。</p> <p>大正12年：拝殿，社務所，正門，社宅。</p> <p>大正13年：正門周囲塀なる。</p> <p>昭和3年：御大典記念として，本殿・祝詞舎・中門・透塀。</p> <p>宝物殿・遥拝所・満洲事変奉賽記念碑・国旗掲揚台・浪速通社標・社宅・衛視詰所・ジュラルミン灯籠・外苑の設定・角力場・大弓場・外苑制札所・同鳥居・同門など続々奉建。</p> <p>昭和16年：外苑を内苑に繰り入れる等境内諸施設整備。</p>	
<p>末社：</p> <p>境外末社：西塔神社</p> <p>境外末社：宮地嶽神社</p>	
位置（町の中心からの方位・高低差・見え）：円形大広場に面して立つ警察署の裏側に位置する。琴平町通がまっすぐに神社正門に向かう。	
配置：『奉天神社誌』に詳細な配置図あり。本文図4	
社殿の向き：南西向き	参道の向き：北東向きに社殿に向かう。
<p>社殿・構造形式：</p> <p>創建：本堂：神明造鉄板葺（6坪）</p> <p>改築：本殿：流造銅版葺，置き千木付き。拝殿：入母屋造流造銅版葺</p>	
付属屋・付属物：拝殿・幣殿・社務所・正門・社宅・祝詞舎・中門・透塀・宝物殿・遥拝所・国旗掲揚台・相撲場・大弓場・狛犬・石灯笼・手水舎	
現在の用途・住所：	
<p>戦後の沿革：</p> <p>国民党時代には社殿は荒廃していたが存在していた。鳥居も残っていた。</p> <p>51年頃体育館が造られ際に壊されたのではないか。</p>	
<p>話者：①郭，②74歳（1932年8月26日生）③柴口生まれ④元軍衛生部</p> <p>資料：『奉天神社誌』・『満鉄附属地経営沿革全史』・『大陸神社大観』</p>	
調査日時：2006年8月6日	調査者：津田・中島・堀内・尚

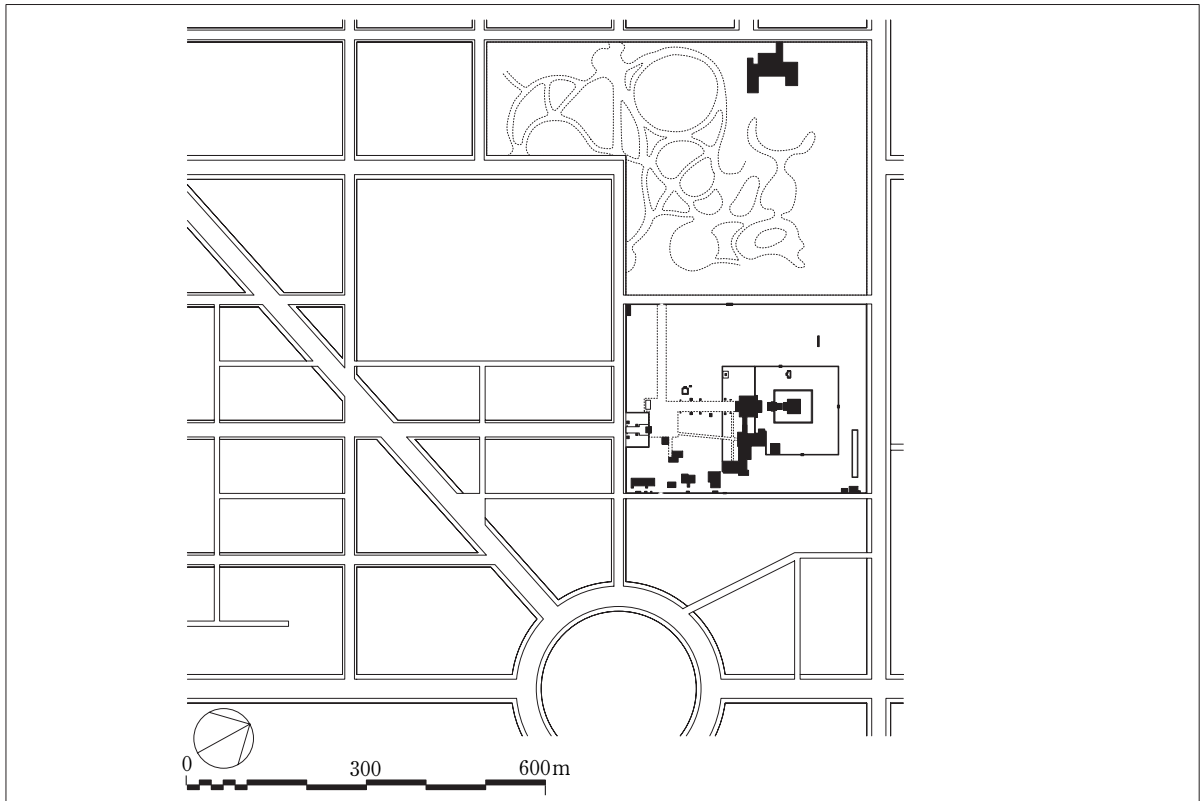


図 2-1 奉天神社復原配置図

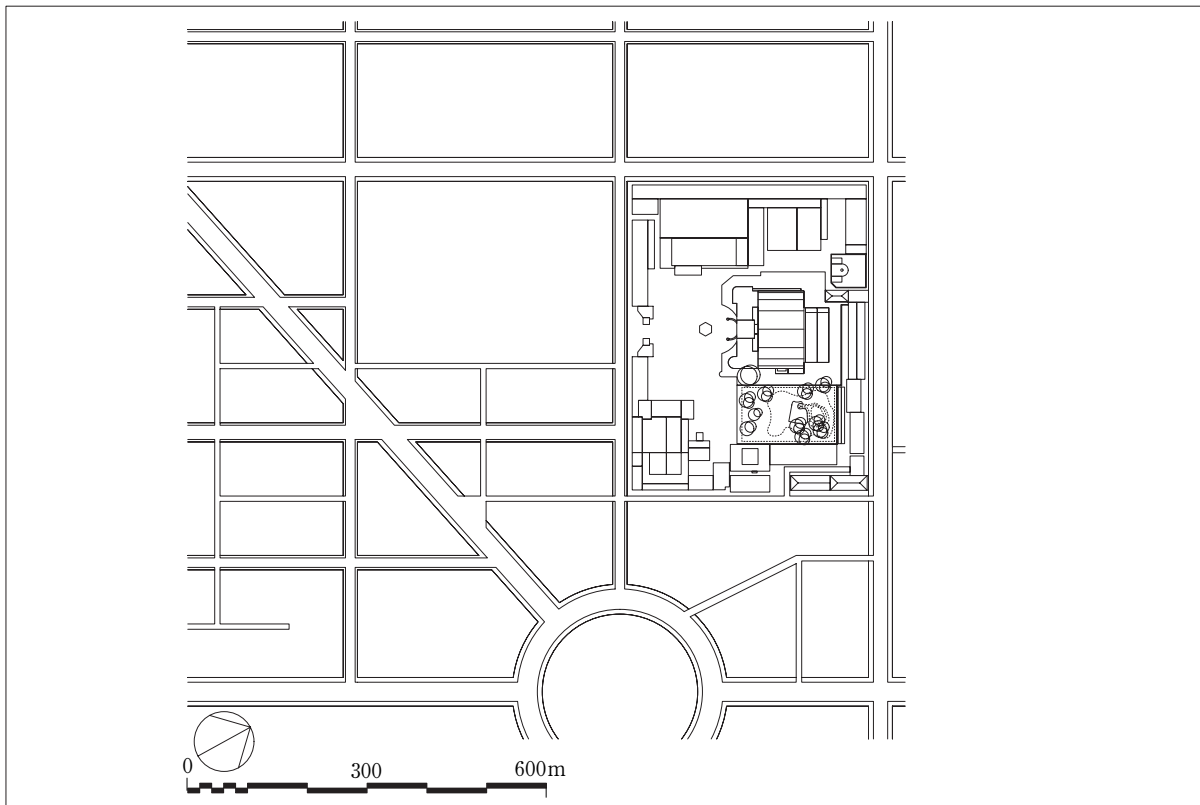


図 2-2 奉天神社跡地現状配置図



地図 2-1 「奉天附属地平面図，縮尺五千分之一，昭和七年十一月測量」奉天神社付近



地図 2-2 現在の瀋陽地図「瀋陽交通旅遊図」奉天神社跡地付近（2006年 8 月版）

奉天神社



古写真 2-1-① 「大正五年十二月御鎮座当時ノ社殿」
(['奉天神社誌』から転載)



古写真 2-1-② 「昭和四年改築前ノ御本殿及玉垣鳥居」
(['奉天神社誌』から転載)



古写真 2-1-③ 「奉天神社」(['侵略神社』から転載)



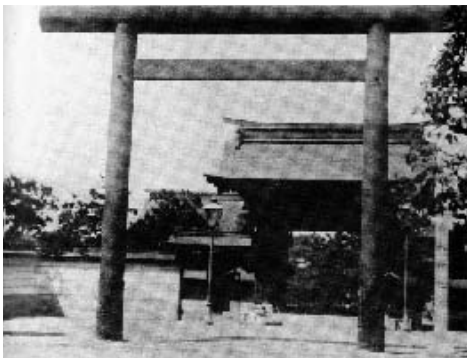
古写真 2-1-④ 「(奉天) 好転人士崇敬の中心奉天神社」
絵葉書、(['偽“満洲国” 明信片研究』から転載)



古写真 2-1-⑤ 奉天神社 ('大陸神社大観』から転載)



古写真 2-1-⑥ 「正門」(['奉天神社誌』から転載)



古写真 2-1-⑦ 奉天神社正門 ('沿革誌』から転載)



古写真 2-1-⑧ 「拝殿ノ二(春景)」(['奉天神社誌』から転載)



古写真 2-9 奉天神社 (『大陸神社大観』から転載)



古写真 2-10 「拝殿」 (『奉天神社誌』から転載)



古写真 2-11 「拝殿ノ一 (雪景)」 (『奉天神社誌』から転載)



古写真 2-12 「御本殿及拝殿」 (『奉天神社誌』から転載)



古写真 2-13 「〔奉天神社〕御本殿」 (『侵略神社』から転載)



古写真 2-14 奉天神社本殿 (『大陸神社大観』から転載)



古写真 2-15 「改築後ノ御本殿及祝詞舎中門」 (『奉天神社誌』から転載)



古写真 2-16 「西側面ヨリ拝スル御本殿及神庫」 (『奉天神社誌』から転載)

奉天神社



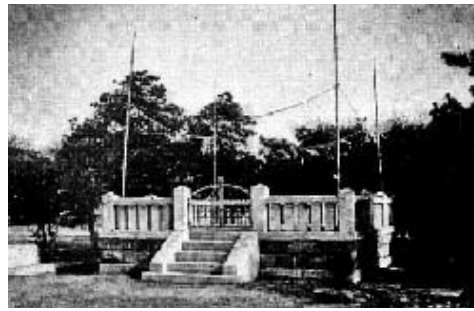
古写真 2-17 「拝殿儀式殿間ノ渡廊下」(『奉天神社誌』から転載)



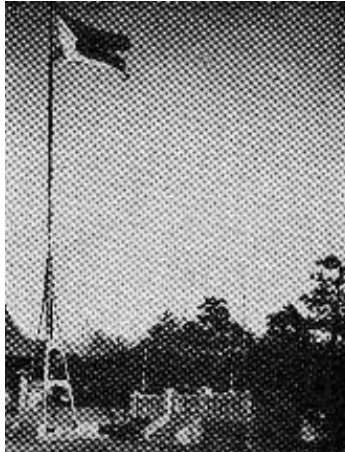
古写真 2-18 「儀式殿並社務所」(『奉天神社誌』から転載)



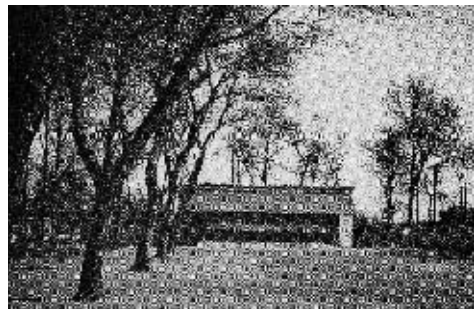
古写真 2-19 「儀式殿と社務所」(『奉天神社誌』から転載)



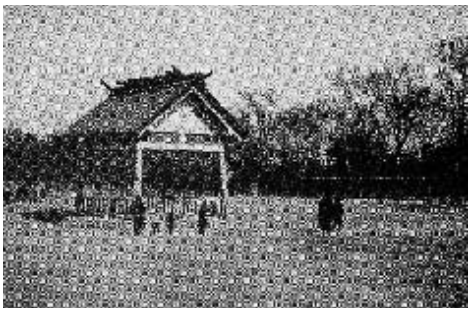
古写真 2-20 「遥拝所」(『奉天神社誌』から転載)



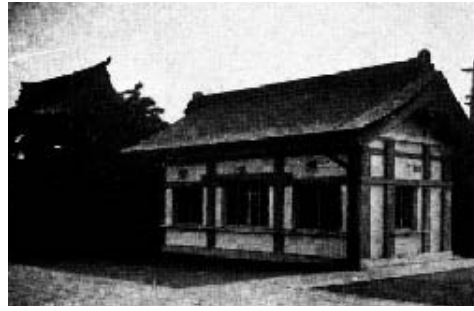
古写真 2-21 「国旗掲揚台」(『奉天神社誌』から転載)



古写真 2-22 「大弓場」(『奉天神社誌』から転載)



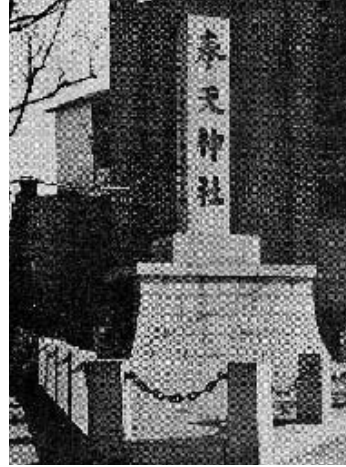
古写真 2-23 「相撲場(外苑)」(『奉天神社誌』から転載)



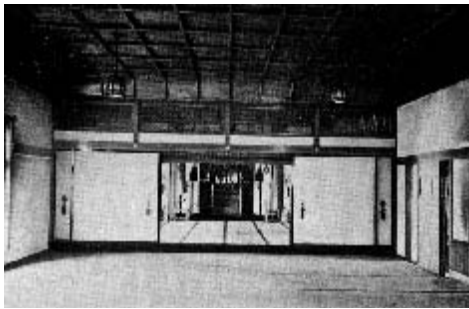
古写真 2-24 「神饌授與所」(『奉天神社誌』から転載)



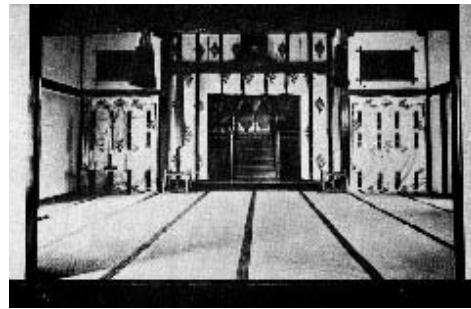
古写真 2-25 「正門ヨリ拝殿ヲ望ム」
（『奉天神社誌』から転載）



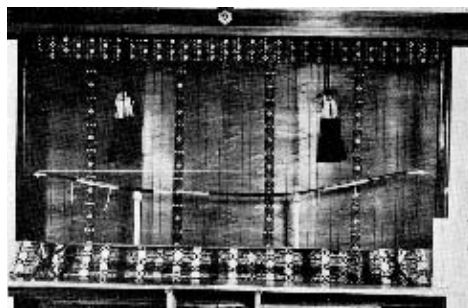
古写真 2-26 「市内浪速通社標」
（『奉天神社誌』から転載）



古写真 2-27 「儀式殿内部ノ一」 （『奉天神社誌』から
転載）



古写真 2-28 「儀式殿内部ノ二」 （『奉天神社誌』から
転載）



古写真 2-29 「皇大神宮御料御神宝梓御弓」 （『奉天神
社誌』から転載）

奉天神社



現況写真 2-① 旧奉天ヤマトホテル屋上から見た旧奉天神社方面。中央が市公安局（旧警察署）、その左が旧奉天神社跡。



現況写真 2-② 旧奉天神社と旧警察署の間の道。写真左が元の境内地。



現況写真 2-③ 旧奉天神社に向かう道。正面突き当たりにかつて正門があった。



現況写真 2-④ 元の境内地。奥の庭園となっている辺りの盛土上に本殿があった。



2-⑤現況写真 本殿跡。池の左の盛土上に本殿があったと思われる。

神社名：3. 撫順神社 戦後中国人は「大廟」と呼んだ。	
神社創建以前の用途：	
戦前の住所： 奉天省撫順市西公園町	
創立年代： 1909（明治42）年2月	祭神： 天照大神・大国主神・金山比古命・金山比命
崇敬者代表他： 氏子数12,992人	創建動機：
創立・沿革： 明治42年：千金山麓桜丘（古城子露天掘の跡形なし）を選定し、経営を進める。 明治43年1月31日：鎮座祭。11月完成。社務所は隣接地の旧炭鉱長宅を当てる。 大正7年：春起工。9月28日本殿遷座祭。同年末までにすべての移築完成。（社殿はすべて木造神明造であったため、基礎腐朽し、修理を要することとなり、後方50間の位置に移転し、境内を拡張。） 大正15年春：露天掘採炭拡張にともない、永安台丘陵地に移転の工を起こす。諸社殿移築、鳥居・灯籠新設。10月1日、本殿遷座祭。 同年4月：社務所新築起工、10月竣工。 昭和3年7月：拝殿・幣殿起工、11月3日竣工。旧拝殿・幣殿は境内内に移転、祭器庫等に。 昭和8年6月：本殿改築および拝殿屋根葺き替えの工を起こし、11月倉庫1棟新築落成。 昭和9年6月15日：本殿竣工につき正遷座祭を執行。 昭和10年：御鎮座25周年記念に、参道・相撲場の改修と植樹。神饌所・社宅拡張工事を起こし6月竣工。 昭和12年10月：遙拝所・国旗掲揚場の奉納造営。同月神職2階建住宅の増築基礎工事。11月周囲の満鉄所有元公園地の一部を編入。 昭和13年6月：神職2階建て住宅落成。	
末社・摂社： 昭和8年2月：市内市場会社鎮座恵比寿神社を境外摂社に編入。 同年9月：西五條通鎮座稲荷神社を境外末社に。	
位置（町の中心からの方位・高低差・見え）： 駅から見て、南東方向の高台。神社の位置する高台は街中から確認することができるが、駅や主要施設に対しては横あるいは後向きに社殿は配されている。	
配置： 参道入口付近に石造鳥居、その奥両脇に灯籠、さらに奥に木製鳥居、その鳥居をくぐると2-3段の石段があり、その突き当たりに大きな切妻造平入の拝殿。拝殿の背面から突き出るように幣殿。さらに、奥に少し離れて、一段高まった基壇の上に、木造神明造の本殿が載り、幣殿の両脇から本殿を取り囲むように玉垣をめぐらせていた。	
社殿の向き： 東北東向き	参道の向き： 社殿より見て、東北東に、さらに北北西に左折れ、石段を下がる。
社殿・構造形式： 本殿（木造神明造）	
付属屋・付属物： 拝殿・幣殿・社務所・鳥居・灯籠・玉垣	
当時の様相 この周りの住民区は以前全部日本人の町であった。人々はここを“永安台”と呼んだ。ここに住んでいた日本人はほとんど“鉱務局”で働いていた。 神社の建物は一つしか残っていなかった。神社は木造であった。 1945年“光復日”8月15日以前、この周りは日本人しか住めなかった。 お祭りはあったことを記憶している。しかし、中国人は参加できなかった。日本の女性が綺麗な着物を着て、ここに来て参拝した。何の祝日かは忘れた。でもすべての人が鳥居前を通り過ぎる時には、必ず神社に敬礼しなければならなかった。	
現在の用途・住所： 公安局退職者のためのクラブハウス	
戦後の沿革： 1950年以降、まず撫順公安局の事務所になった。その後神社の一部を拘留所として使用した。“大廟”はこの拘留所の別称であった。100人くらい同時拘留した事もある。（大廟自体は500人同時入れる） 戦後、神社は一時放置されたままであったが、後に公安局になった。78、79年頃公安局が引越した。一部の人は日本と友好関係を立て直すことを配慮して残すべきと考えて、この“大廟”も保存するつもりだったが、後で日本軍国主義に反対するため、この“大廟”は軍国主義侵略の象徴になった。政府はこの神社を残す必要がないと判断した、国の恥の象徴、我々のものではない、私はこの神社を保存する必要がないと思う。もう誰も利用できなくなって、周りの建物の建設に邪魔になって、しかも周りの風景にも合わなくて。 解放後、周りは住宅地がまだ建ってなかった、小さい建物が一時集合住宅として使われた。しかし、その時“大廟”は空室のまま放置された。1950年前後に公安局になって、さらに2、3年後、内部の一部が改造され、拘留所になった。今のクラブハウスの位置はかつて“大廟”が建っていたところだ。小さい建物と（本殿か）“大廟”の間の距離はほとんどなかった。	
話者： ①王土栄 ②1929年生 ③元警察官 文献資料： 『満鉄附属地経営沿革全史』・『大陸神社大観』	
調査日時： 2006年8月7日	調査者： 津田・中島・堀内・尚

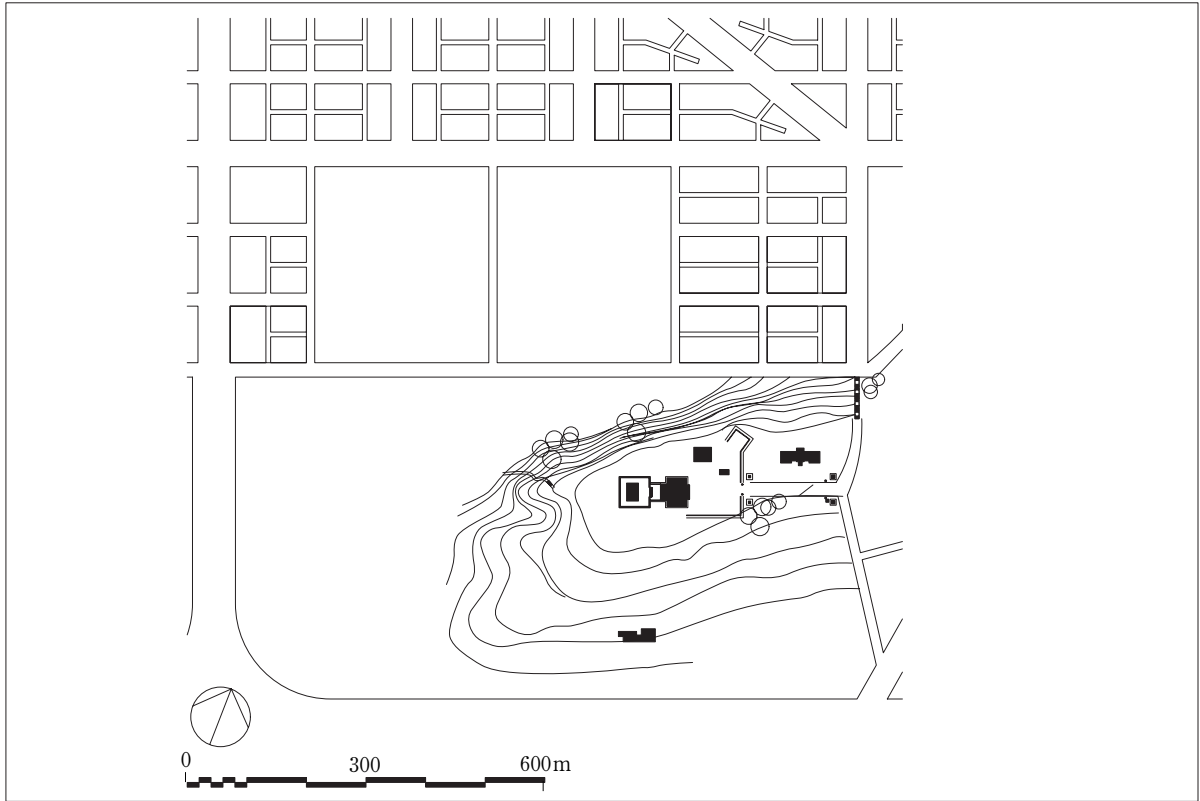


図3-1 撫順神社復原配置図



図3-2 撫順神社跡地現状配置図



地図 3-1 「撫順市街地平面図 縮尺 5 千分之巻」撫順神社付近

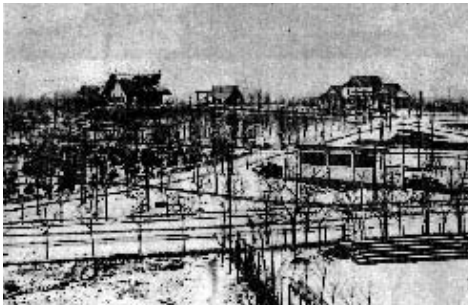
撫順神社



古写真 3-① 桜丘の撫順神社（『満洲建築雑誌13巻4号』から転載）創建（明治42年）社殿上棟時の状況か。



古写真 3-② 桜丘の撫順神社（『満洲の神社興亡史』から転載）古写真 3-①の様相とほぼ一致しており、桜丘の時期と判断される。



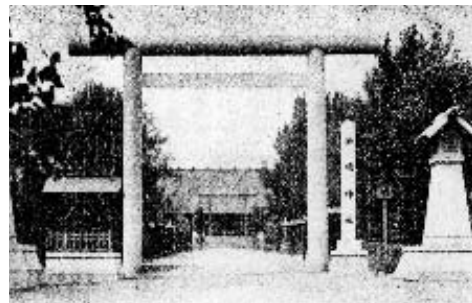
古写真 3-③ 撫順神社全貌（『満洲建築雑誌13巻4号』から転載）



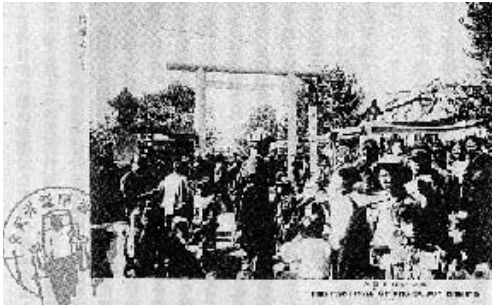
古写真 3-④ 「清浄なる撫順神社社頭」（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）



古写真 3-⑤ 「清浄神気漲る撫順神社の聖観」（現地購入絵葉書）



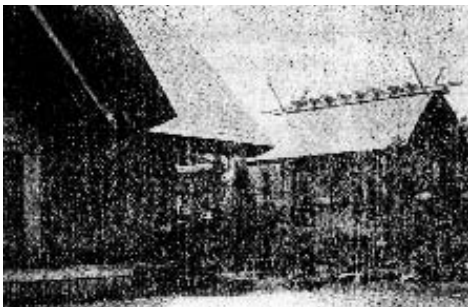
古写真 3-⑥ 撫順神社（『大陸神社大観』から転載）



古写真 3-7 「撫順神社の祭礼」(『満洲の神社興亡史』から転載)



古写真 3-8 撫順神社(『侵略神社』から転載)中の鳥居前からの写真



古写真 3-9 撫順神社(『大陸神社大観』から転載)右に本殿が見える。



古写真 3-10 撫順満鉄病院(『沿革誌』から転載)満鉄病院背後の高台に撫順神社が見える。



古写真 3-11 「撫順神社社務所正面」から見たスケッチ(『満洲の旅に描く』から転載)

撫順神社



現況写真 3-1 旧撫順神社下の石段に至る道



現況写真 3-2 旧撫順神社下の石段



現況写真 3-3 石段を登ったところ、
右手に集合住宅が出来ている。



現況写真 3-4 元参道入り口から元の社殿方向をみる



現況写真 3-5 元参道、正面奥に見える建物がクラブ
ハウス。旧参道右手のコンクリートの塊は元の灯籠の基
礎。



現況写真 3-6 元の社殿位置に建つクラブハウス



現況写真 3-7 クラブハウス脇に転がっている元鳥居
の部材

神社名：4. 鉄嶺神社（地元民は「日本廟」と呼ぶ。）	
神社創建以前の用途：	
戦前の住所：奉天省鉄嶺公園花園町（鉄嶺公園中央部に立地）	
創立年代：1915（大正4）年7月31日	祭神：天照大神・大国主神・明治天皇・靖国神
崇敬者代表他：氏子戸数800戸，中国人崇敬者55,000人	創建動機：大正4年御大典記念事業として。
<p>創立・沿革：</p> <p>大正4年7月31日：神社建設許可出願。</p> <p>同年9月16日：関東都督より建設の件許可せらる。</p> <p>同年11月8日：鎮座祭執行。</p> <p>昭和6年8月：神宮御神宝拝受。</p>	
<p>当時の様相：</p> <p>①神社にたくさんの銀杏の木が植えられていたので、私と友達によく黙って柵を越えて、中に入り、銀杏を取った。中に入ったものの、発見されると大変だから、緊張して神社をよく見なかった。</p> <p>②神社の周りの公園には芝生があった。芝生に座って絵を描いたりした。先生に連れられて神社参拝したことはないが、神社の前を通るときには、必ず神社に敬礼しなければならないと日本人の先生に教えられた。</p>	
位置（町の中心からの方位・高低差・見え）：	
配置：本殿・拝殿が独立して建つ。本殿前に鳥居。（写真）	
社殿の向き：西面	参道の向き：社殿から見て東に参道
<p>社殿・構造形式：本殿は木造神明造鉄板葺，千木・勝男木がみえる（写真による）。拝殿は入母屋造平入鉄板葺，正面3間・奥行2間半（写真による）。本殿周りに玉垣（写真）。</p> <p>鉄嶺公園中央部を選定盛土の上，西面建設（文献）。</p>	
付属屋 社務所・御神宝庫・神輿庫・手水所（文献）。	
鳥居（コンクリート製）・狛犬・石灯笼	
現在の用途・住所：神社が立地した鉄嶺公園は縮小されているが残っている。神社の痕跡はまったくない。	
<p>戦後の沿革：</p> <p>①社殿だけしかなかった。二階建てほどの高さで、間口が幅20メートルほど（拝殿のことか）。建国後，解放軍の“被服倉庫”として使われた。後に鉄道局に移り，内部を少し改造して，鉄道局の家族のアパートに転用された。</p> <p>②この建物（建物・鳥居は同時に）が壊されたのは，1988年10月頃である。共産党政府の命令で取り壊された。約20年前に，20人ほどの日本人の団体が，ここに来て，写真を撮ったり，録画したりしたことがある。その中の一人の父親が以前この“廟”で働いてたと聞いた。</p>	
<p>話者：</p> <p>①楊景林 ②76歳（1931年生）</p> <p>①関三儀 ②80歳（1927年生）</p> <p>文献：『満鉄附属地経営沿革全史』・『大陸神社大観』</p>	
調査日時：2006年8月8日	調査者：津田・中島・堀内・尚

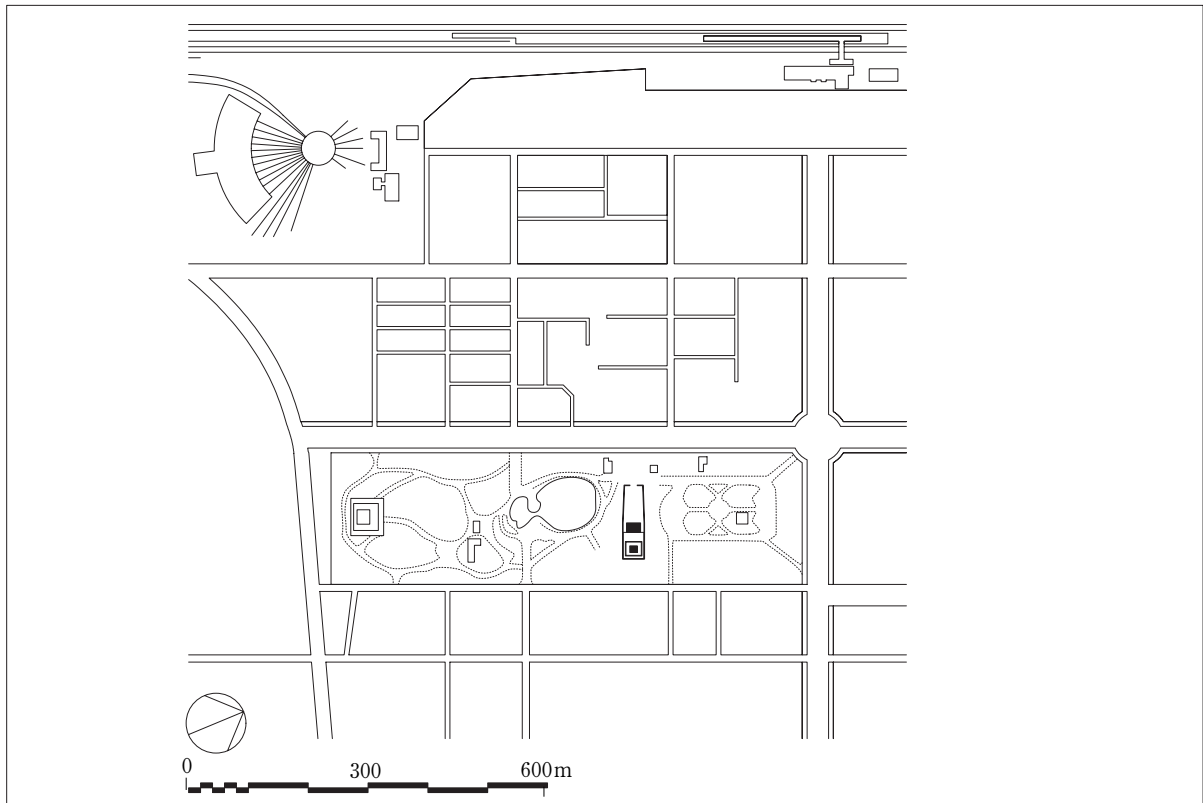


図4-1 鉄嶺神社復原配置図

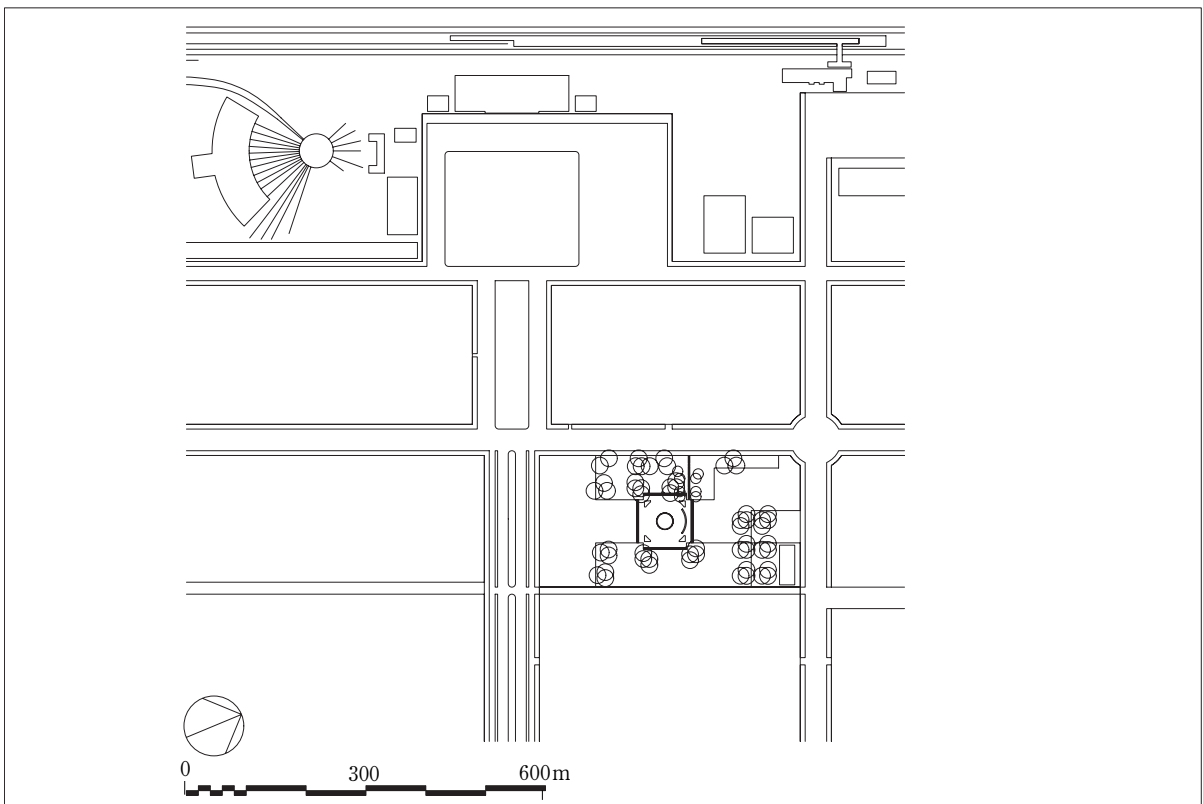
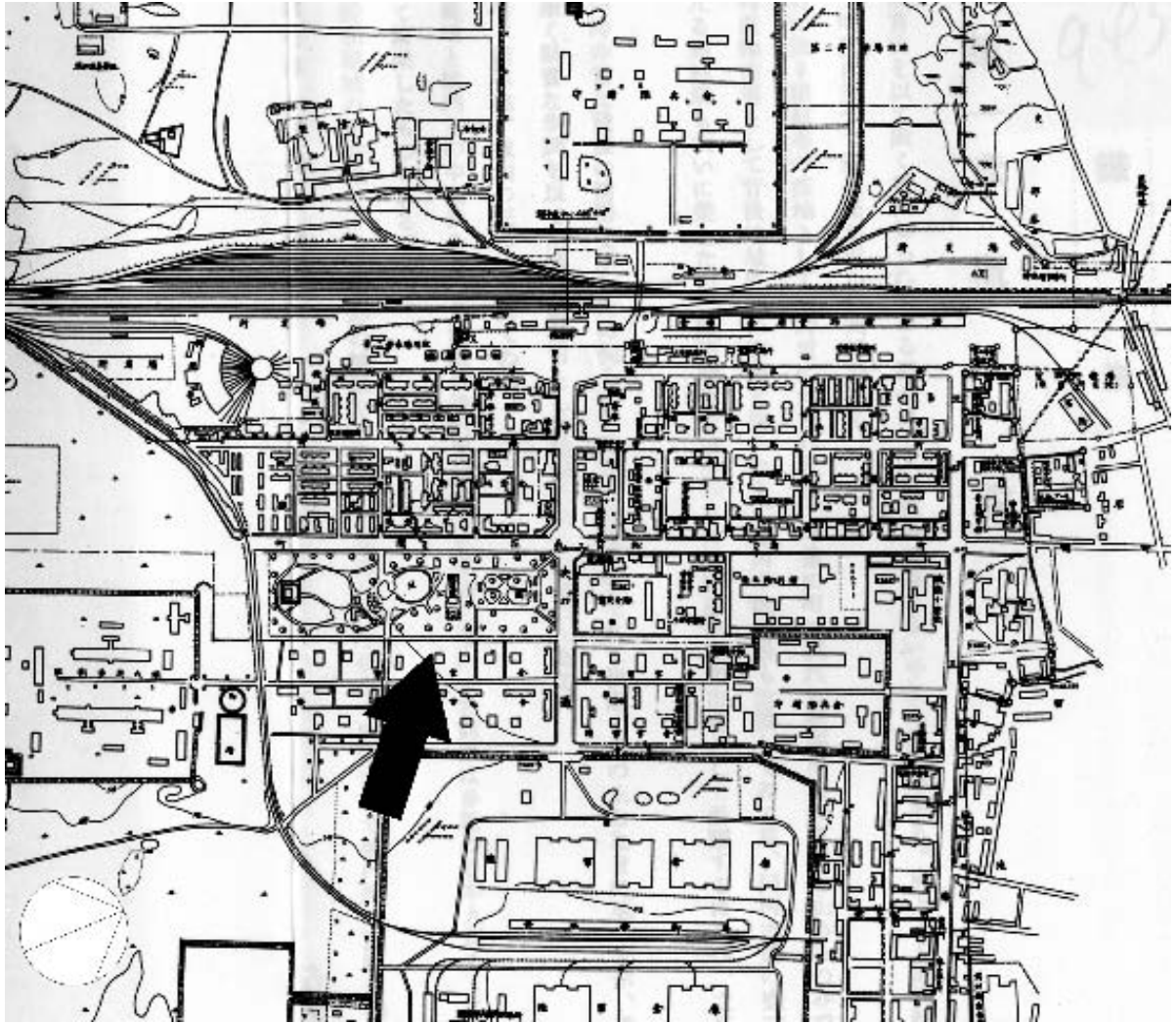


図4-2 鉄嶺神社跡地現状配置図



地図4-1 「鐵嶺附屬地平面圖 縮尺五千分之一」(「沿革史」付圖) 鐵嶺神社付近

鉄嶺神社



古写真 4-1-① 鉄嶺神社 (『満洲の神社興亡史』から転載)



古写真 4-1-② 鉄嶺神社が位置した鉄嶺公園 I, (『偽“満洲国”明信片研究』から転載)



古写真 4-1-③ 鉄嶺神社が位置した鉄嶺公園 II, (偽“満洲国”明信片研究』から転載)



現況写真 4-1-① 駅から東に延びるメイン道路



現況写真 4-1-② 現在の鉄嶺公園 I



現況写真 4-1-③ 現在の鉄嶺神社 II.
かつて鉄嶺神社が建っていたあたり。

神社名：5. 開原神社	
神社創建以前の用途：	
戦前の住所：奉天省開原神明街	
創立年代：1915（大正4）年8月	祭神：天照大神・明治天皇・大国主神
崇敬者代表：	創建動機：大正4年には邦人300戸を数える神社創建の議、大正天皇即位の大典を記念して。
<p>創立・沿革：</p> <p>大正4年8月20日：創立並びに建設資金募集の件出願。同年9月4日付で創立の件、9日付で寄附金場集の件認可。満鉄の補助を受け、第七区第九号地に工事に着手。</p> <p>大正5年5月10日：竣工、天照大神・大国主命を奉祀。</p> <p>大正15年：市街計画上、移転やむなきに至る。</p> <p>昭和2年8月17日：移転の出願、同月30日認可を得て、移転工事に着手。（工事費の大部分は満鉄に負う）</p> <p>昭和2年10月15日：竣工、翌16日遷座祭。</p>	
<p>当時の様相：</p> <p>①当時私は警察官だった。日本人の統治を受けており、「毎週月曜日必ず神社を参拝する」という規則があった。</p> <p>②私が小さい頃この近くに住んでいた。神社の廻りは日本人の町であった。</p> <p>③ある日たくさんの日本人が集まって御輿を担いでいた事を見た。たくさんの日本人が御輿を支えて“わいしょう！わいしょう”と叫びながら街を走り回った。</p> <p>④中国人立入禁止で、神社の中に入れなかった。外から見ると入り口は写真（持参した古写真）と同じだ。中国の人たちは“日本廟”と呼んでいた。中に何が祀られていたかは知らない。</p> <p>⑤神社がある場所は日本人の町だ、中国人は普段立ち入り禁止であった。日本人町の前を通過するときには気をつけなければならなかった。日本人に殴られても黙るしかなかった。</p> <p>⑥この三角地帯（満鉄社宅が立ちならぶ地域）には中国人は入れない、日本人の町だ。まだ、小さかったので、集団参拝の経験はないが、兄は先生に連れられて参拝したことがある。</p> <p>⑦当時、日本の警察が民家に入って、衛生の検査を行い、門の隙間などで汚を見つけたら、父親の顔を殴りつけるようなことをした。私は、ちょっと五十音を勉強しており、五十音図が壁に張っていたのを見つけられて、“良民だ”と褒められた。</p> <p>⑧当時、学校の中に天皇の写真がかけられていた。学校入ったら必ず天皇に敬礼すること。</p>	
位置（町の中心からの方位・高低差・見え）：当初の市街計画では街の中心に向かっていたが、変更計画では、新駅からまっすぐ伸びるメイン道路に背面を見せることになる。	
配置：切妻造平入の神明造風の建物で、幣殿と一続きにエの字の平面を構成していたようだ。その奥に本殿は独立して建っていた	
社殿の向き：南向き	参道の向き：北方向に社殿に向かう。
社殿・構造形式：本殿（3.6坪）、拝殿（18坪）、幣殿（13坪）	
付属屋・附属物：社務所（67.898坪）・手水舎（2坪）・神具所・鳥居・石灯笼・狛犬・国旗掲揚塔	
現在の用途・住所：市役所	
<p>戦後の沿革：</p> <p>①日本人が引き揚げた後、一部の人が、中に入って、金目のものを略奪しようとしたが、神社の中は何もなく、神社の部材を取り外し、持ち帰った。そのため、取り壊す前にすでに柱と屋根だけが残った状態であった。②文革前に取り壊された。中は何もないし、誰も利用しておらず、しかも建物もぼろぼろになって使えなくなったので取り壊された。</p> <p>③日本人が引き揚げ後、すぐに神社の略奪がはじまった。神社に対して怖いなんて気持ちはなかった。ただ神社のものが欲しかった。しかし神社は空っぽであった。そこで、皆は神社から必要な住宅材料を取り始めた。</p> <p>④最初は集合住宅が建てられたが、その後市役所に改築された。</p>	
<p>話者：①劉 ②85歳 ③当地に生まれ、当地に住み続ける。 ④当時、警察官</p> <p>①及明輝 ②71歳</p>	
文献資料：『満鉄附属地経営沿革全史』・『大陸神社大観』	
調査日時：2006年8月9日	調査者：津田・中島・堀内・尚

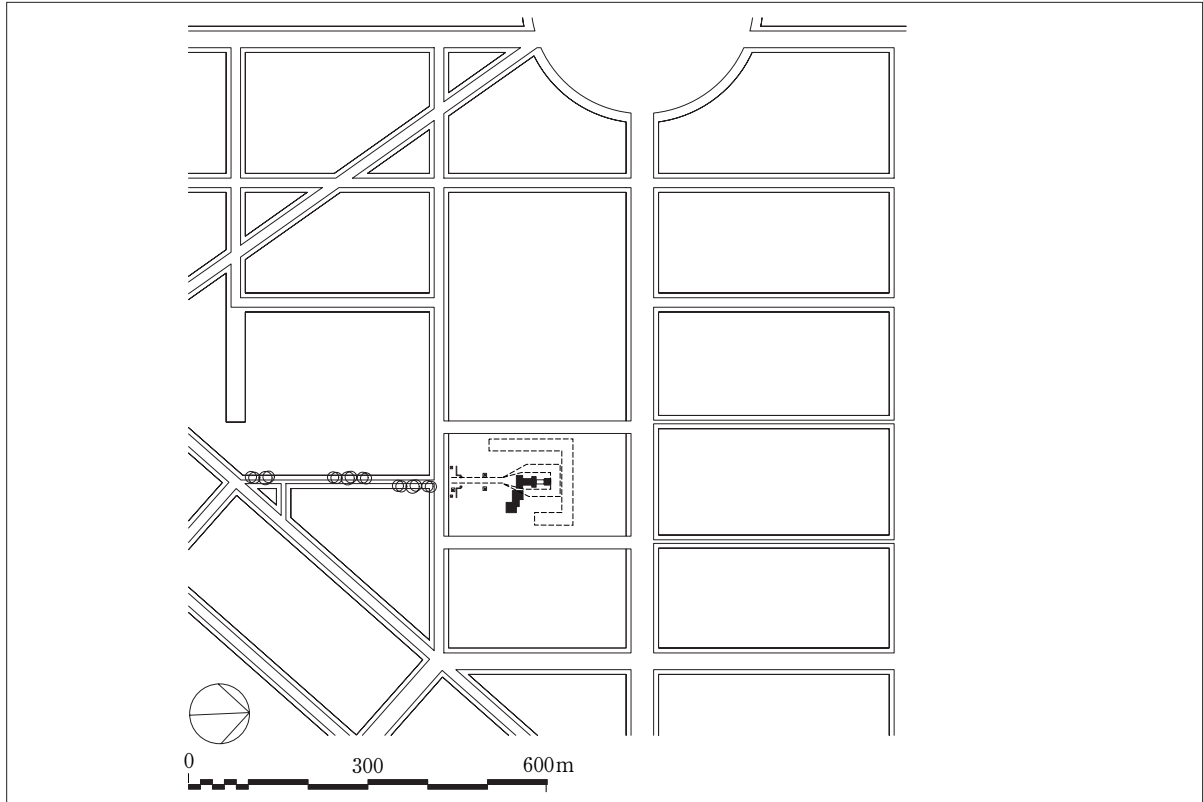


図5-1 開原神社復原配置図

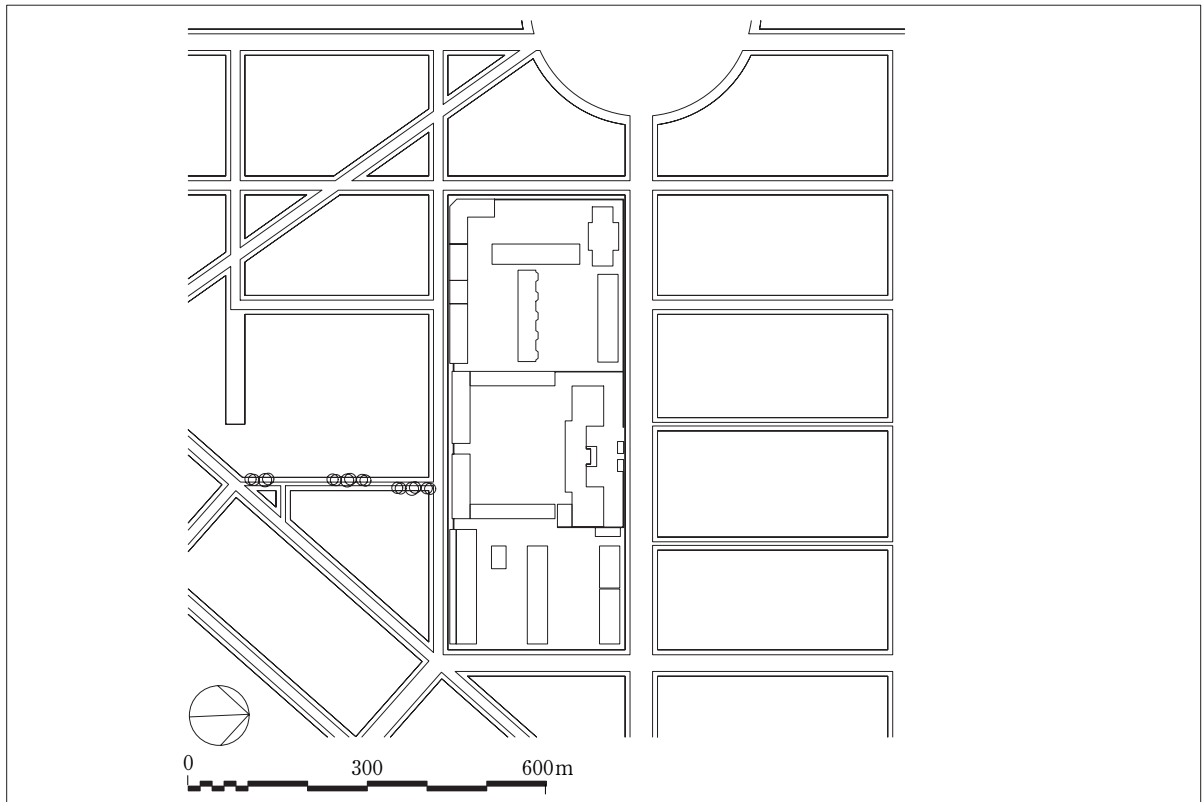
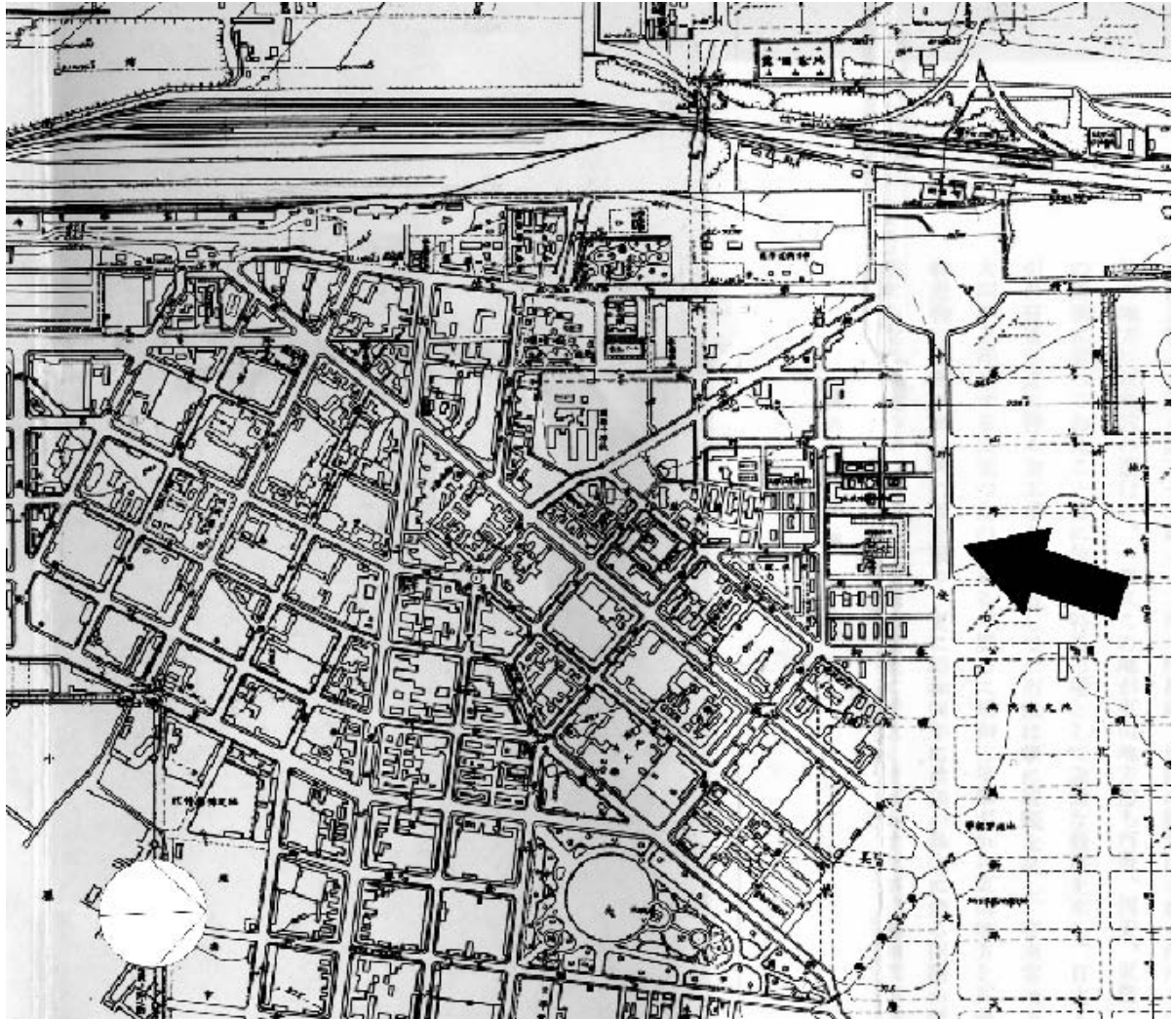


図5-2 開原神社跡地現状配置図



地図 5-1 「開原附屬地平面図 縮尺五千分一」(『沿革史』付図) 開原神社付近

開原神社



古写真 5-1 開原神社（『沿革史』から転載）



現況写真 5-1 開原神社跡地前の通り



現況写真 5-2 開原神社跡地に向かう道。この道が、かつて参道のごとく奥の開原神社の正面に突き当たっていた。両側は満鉄の社宅街であった。



現況写真 5-3 開原神社跡地正面。かつての境内への入り口は閉ざされているが、その少し西寄りに市役所の裏口が開く。



現況写真 5-4 現市役所の裏口



現況写真 5-5 市役所正面。かつての開原神社の背面にあたる。

神社名：6. 四平街神社	
神社創建以前の用途：	
戦前の住所：奉天省四平街西区利達町	
創立年代：1918（大正7）年7月	祭神：天照大神・明治天皇・大国主神
崇敬者代表他：氏子戸数, 内地人3000戸, 朝鮮系200戸, 崇敬者戸数 満洲国人11371戸	創建動機：
<p>創立・沿革：</p> <p>大正8年6月：中央公園内に本殿・仮拝殿・鳥居を建設（当時の邦人戸数300戸内外）。</p> <p>昭和3年：現在地に移転，神殿・幣殿・拝殿・鳥居を起工，一部の工事なるをもって，11月6日遷座式。</p> <p>昭和4年9月末：神庫・手水舎・鳥居・社務所等すべて竣工。</p> <p>昭和5年3月：専任神職の就任。</p>	
<p>末社・摂社：</p> <p>境内摂社：稲荷神社</p> <p>昭和4年7月：旧神殿を境内に移転修築，官幣大社稲荷神社の神璽を拝受。</p> <p>同年9月3日：鎮座祭</p>	
<p>位置（町の中心からの方位・高低差・見え）：</p> <p>町の中心からみて，西の方向，駅より北西に伸びる中央通を挟んで公園（現：英雄広場）と対置する。周囲から見ても平坦な地に立地していた。</p>	
配置：拝殿後方に玉垣で囲まれた本殿が独立して建っているようだ（古地図・古写真による）。	
社殿の向き：南東向き	参道の向き：北西方向に社殿に向かう。
社殿・構造形式：本殿・幣殿・拝殿（入母屋造平入）	
付属屋 社務所・神庫・手水舎	
<p>付属物</p> <p>鳥居（木製白塗り）・狛犬・木製灯籠・手水舎内に手水鉢</p>	
現在の用途・住所：軍関係施設	
現状は，軍施設となり，何も残っていないと思われる（軍施設のため確認できず）。	
<p>戦後の沿革：</p> <p>1945年，民衆が金目のものを目指して略奪に走った。その後，社殿の部材を取り外して持ち去るような事態が進行し，文化大革命の頃までに建物はなくなり，荒地となっていたが，その後，軍施設となった。</p> <p>話者のひとりが当地に来た1958年には，神社跡地は荒地となっていた。1980年代から軍施設となっている。</p>	
<p>話者：</p> <p>①王 振②83歳（1927年11月）③男性④山東省生（1938年に当地に来た）</p> <p>①李樹森②72歳（1936年2月）③男性④昌図県生（1958年に当地に来た）</p> <p>文献資料：『満鉄附属地経営沿革全史』・『大陸神社大観』</p>	
調査日時：2006年8月10日	調査者：津田・中島・堀内・尚

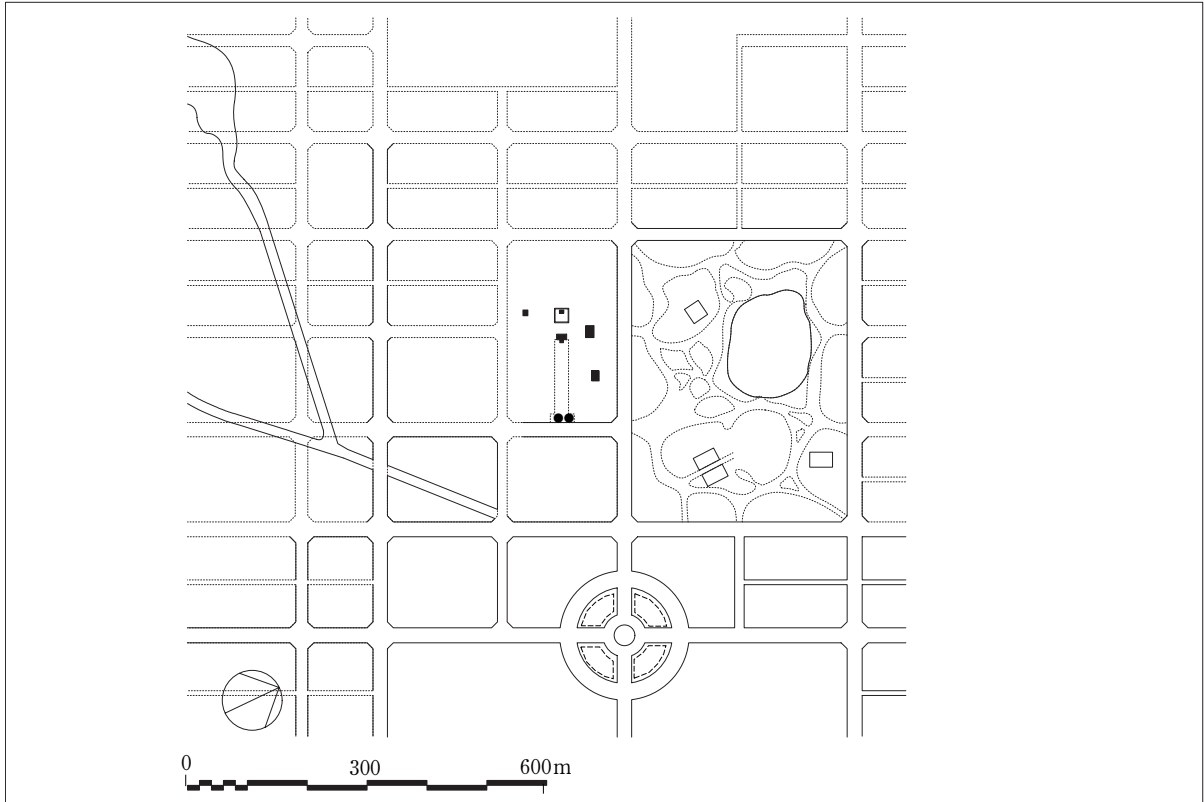


図6-1 四平街神社復原配置図

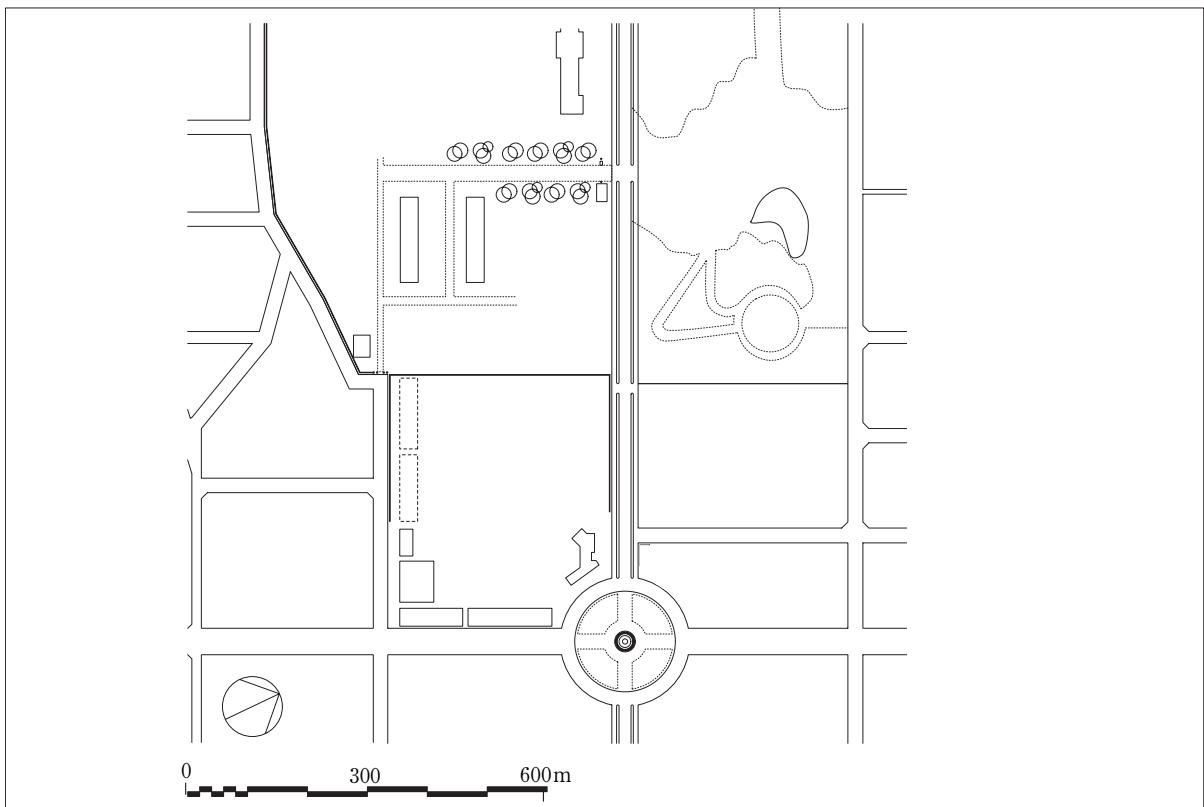
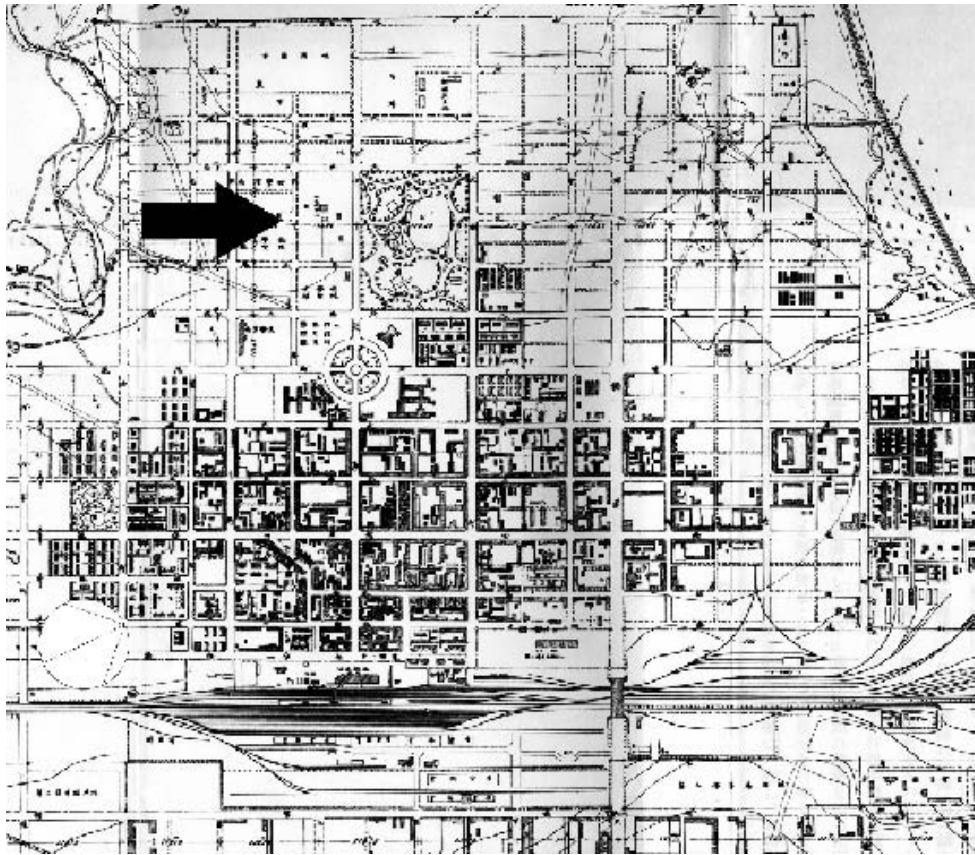


図6-2 四平街神社跡地現状配置図



地図 6-1 「四平街附属地平面図 縮尺五千分之一」(昭和12年訂正,「沿革史」付図)四平街神社付近



地図 6-2 四平現状地図「四平市交通旅遊図」四平街神社跡地付近古地図に方位をあわせている。

四平街神社



古写真 6-1 四平街神社（『大陸神社大観』から転載）
手前に入母屋造の拝殿があり、奥の高まった位置に玉垣に囲まれた本殿が見える。



現況写真 6-1① 四平街公園（左）と四平街神社跡地（右）に挟まれた中央大街。



現況写真 6-1② 四平街神社跡地（北面）。
現在軍施設となっている。



現況写真 6-1③ 四平街神社跡地（東面かつての正面側）。
参道入り口は写真の右奥の辺りと思われる。

神社名：7. 公主嶺神社 （大神宮・招魂社・稲荷社の総称、天照大神を祭神とする大神宮を本社とする。）	
神社創建以前の用途：	
戦前の住所：吉林省懷徳県公主嶺街花園町	
創立年代：1909（明治42）年5月	祭神：天照大神
崇敬者代表他：氏子数5,000人	創建動機：
創立・沿革：明治40年4月：満鉄附属地の経営を開始。 明治42年5月：崇敬会を組織し、神殿を造営。 大正4年9月：神殿・拝殿改築起工。 大正5年5月：竣工。6月3日遷宮祭。 大正5年6月：氏子会の制度を確立。 昭和3年：玉垣・鳥居寄進。 昭和12年6月：拝殿・招魂社・社務所の大改築起工。9月竣工。	
末社・摂社：招魂社と伏見稲荷を祀る稲荷社を境内社とする。	
当時の様相 <ul style="list-style-type: none"> ・中国人は参拝しない、また参拝することも禁止された。 ・中国人は小学生や中学生でも、先生に連れられて集団参拝をさせられることはなかった。むしろ、中国人は立ち入りを禁止されていた。 ・公園の廻りに住む日本人は少なく、ほとんど中国人が廻りで生活していた。多くの日本人は「鉄北」で生活した。日本人の商人は、ここにも多く、蛟島通の両側にも日本人の店が並んでいた。生活日用品などを販売した。ここは1940年代かなり繁栄した商店街だ。“茶商店”“高取商店”“千野醤油”などの店があった。 ・公園は中国人も利用できるが、神社は立ち入り禁止であった。 小さい祭りなどが確かにあった。日本人がここに来て、参拝しただけで、大きなお祝い行事などは見たことがない。 ・「天皇陛下」の名前は知っている。当時我々（中国人）は満洲の年号「康德」と日本の年号「昭和」を併用した。 ・神社の廻りでよく遊んだ。神社は見慣れたものだったが、神社に対してあまり関心はなかった。 ・大きな建物と小さい建物があった。大きな建物は木造。木色（黒）、皆は大きい建物に参拝した。小さい建物は日本人のお骨を預かった。 	
位置 （町の中心からの方位・高低差・見え）：駅裏の大きく平坦な公主嶺公園の中に立地。	
配置 ：公園の駅側やや東寄りに大神宮と招魂社・稲荷神社が軸を若干ずらしながら建っていた。	
社殿の向き ：南向き	参道の向き ：鳥居から北方向社殿に向かう。
社殿・構造形式 ： 当初の本殿は神明造風、改築後は不明。拝殿は入母屋造。	
付属屋・付属物 ：拝殿（9.25坪）・社務所（21坪）・手水舎・鳥居・石灯笼・狛犬	
現在の用途・住所 ：神社が建っていた公園がなくなり、ビルが建ち並んでいる。	
戦後の沿革 ： <ul style="list-style-type: none"> ・1999年まで公園はそのままで利用され「神社」が公園管理人の事務室として使われた。 ・神社には、宝物やお金になる物などは何もなかった。日本人引き揚げ後、すぐに公園の事務室になった。 	
話者 ：①季浦 ②1929年生 ③12歳～17歳まで農事試験所に雇われていた。④河北省出身	
文献資料 ：『満鉄附属地経営沿革全史』・『大陸神社大観』	
調査日時 ：2006年8月12日	調査者 ：津田・中島・堀内・尚

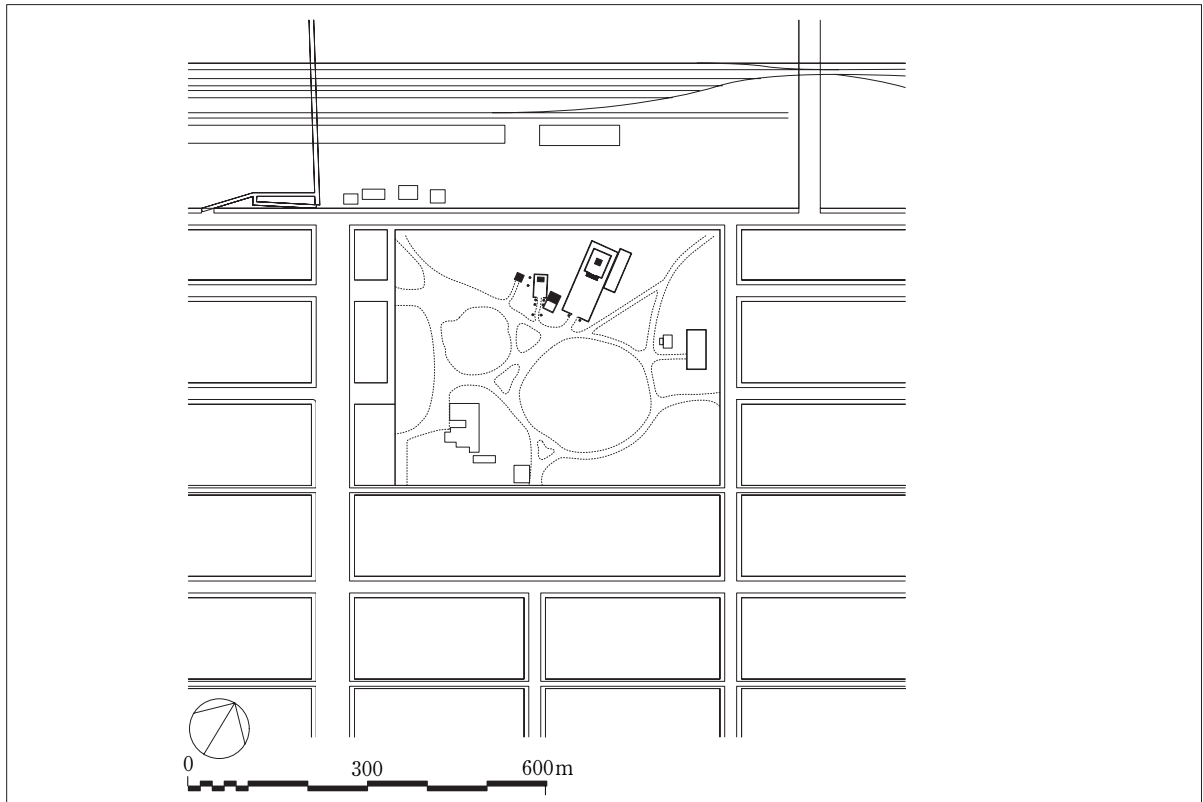


図7-1 公主嶺神社復原配置図

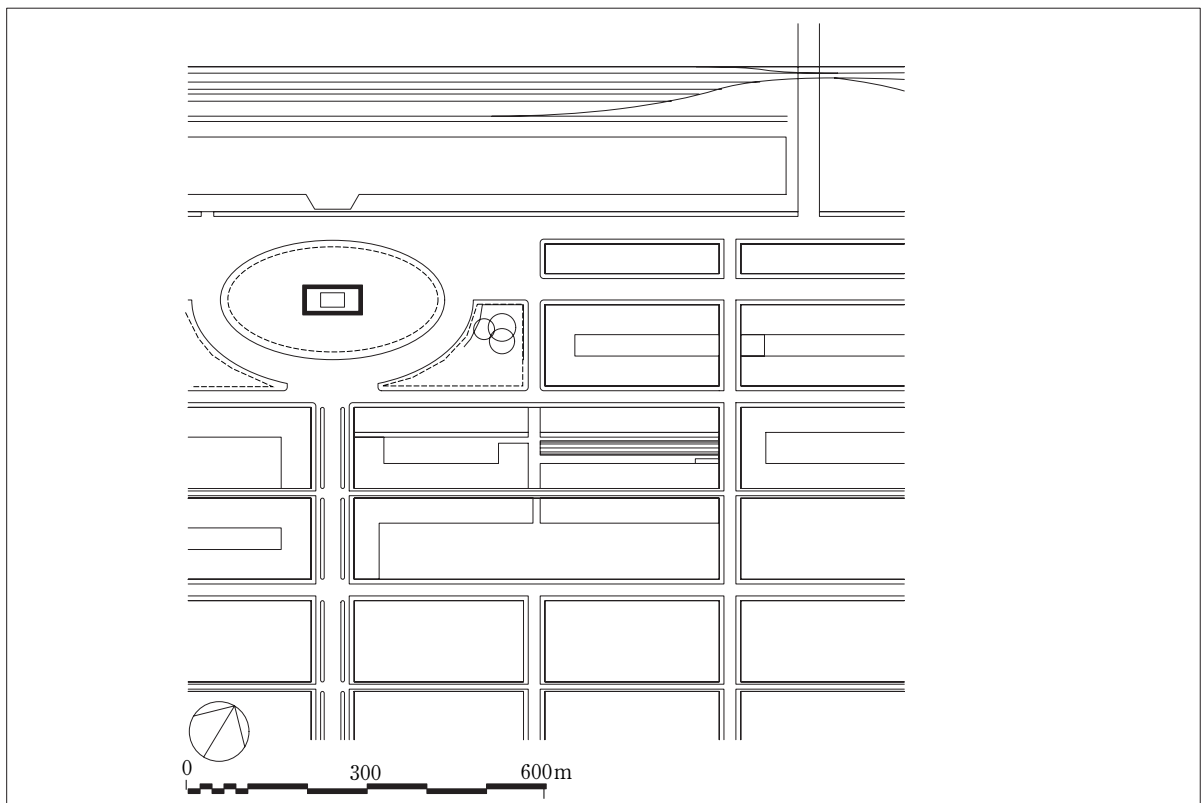
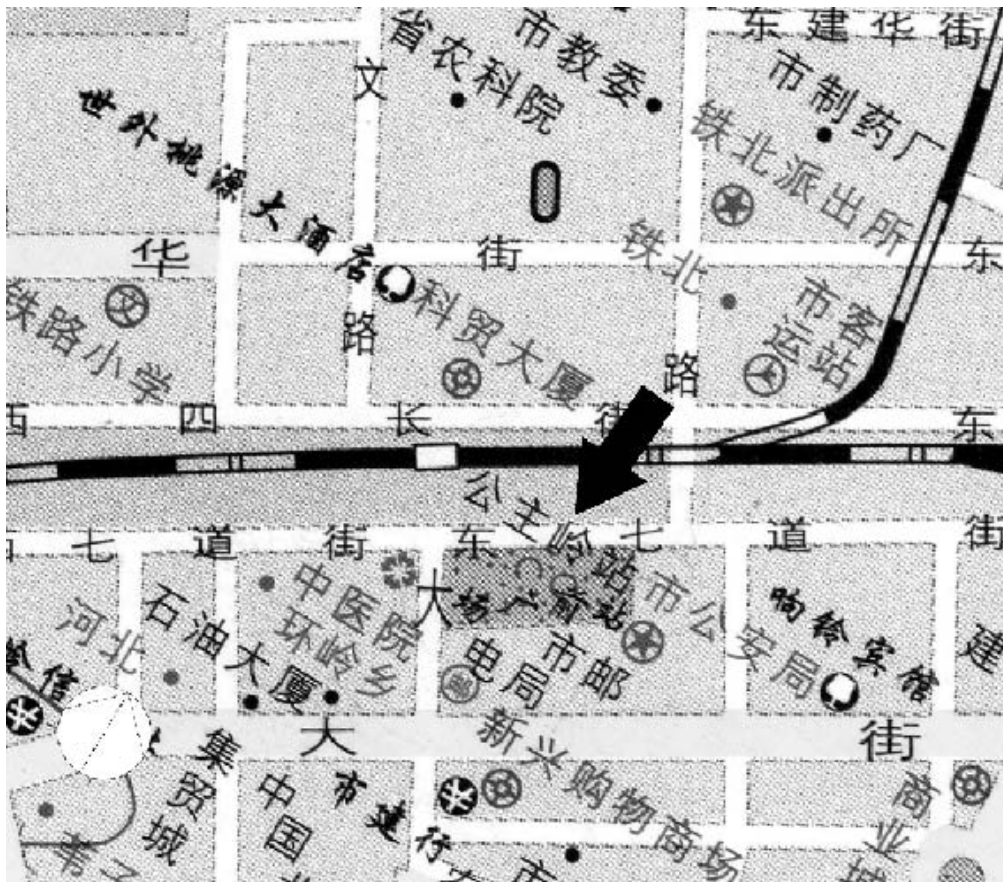


図7-2 公主嶺神社跡地現状配置図

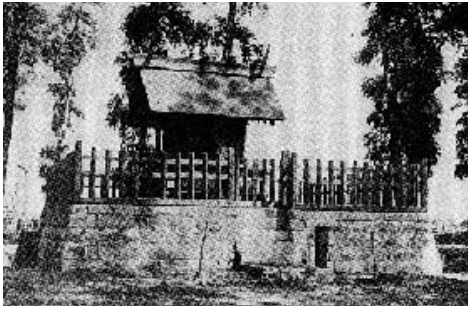


地図7-1 「公主嶺附属地平面图 縮尺五千分之一」(『沿革史』付図) 公主嶺神社付近



地図7-2 現在の公主嶺地図「公主嶺街路図」(『吉林省旅游地图册』2004年4月)の公主嶺神社跡地付近、縮尺を古地図にあわせている。

公主嶺神社



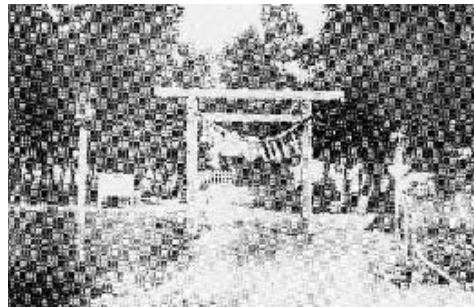
古写真7-① 公主嶺神社本殿（『南満洲写真大観』から転載）『南満洲写真大観』には公主嶺神社とは明記されていないが、『満洲公主嶺<写真集>—その過去と現在—』（公主嶺小学校同窓会、1988年）によると、明治末期の公主嶺神社の本殿だという。



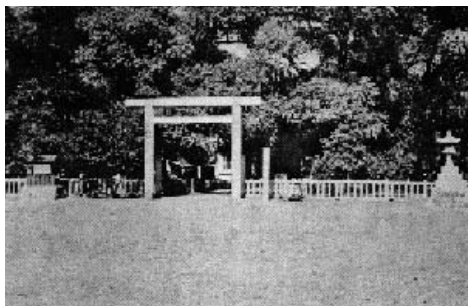
古写真7-② 公主嶺神社（『満洲の神社興亡史』から転載）



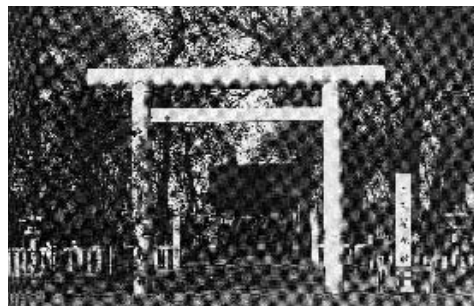
古写真7-③ 公主嶺神社（『南満洲写真大観』から転載）



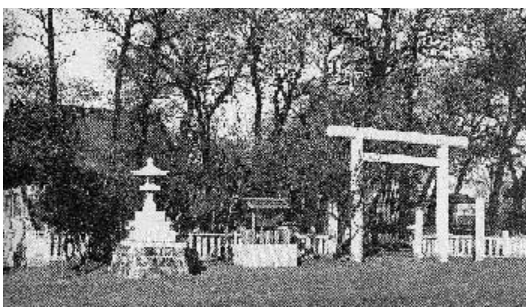
古写真7-④ 「大正期の神社」（『満洲公主嶺<写真集>』から転載）



古写真7-⑤ 公主嶺神社（『沿革史』から転載）



古写真7-⑥ 公主嶺神社（『満洲公主嶺<写真集>』から転載）。昭和12年秋の様相。



古写真7-⑦ 公主嶺神社（『満洲公主嶺<写真集>』から転載）。昭和12年冬か13年の様相。



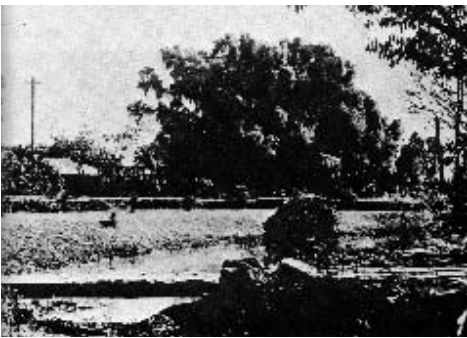
古写真7-⑧ 公主嶺神社（『大陸神社大観』から転載）



古写真 7-9 公主嶺公園（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）



古写真 7-10 公主嶺公園正門（『偽“満洲国”明信片研究』から転載）



古写真 7-11 公主嶺公園（『沿革史』から転載）



現況写真 7-1① 公主嶺駅前広場。
写真左の建物奥が公主嶺神社跡地である。



現況写真 7-2② 公主嶺神社跡地。
写真右の停車車両奥の建物あたりに社殿が建っていた。

神社名：8. 西安神社	
神社創建以前の用途：	
戦前の住所：奉天省西安県仙城村	
創立年代：1935（昭和10）年10月	祭神：天照大神，豊受大神，大山祇大神
崇敬者代表他：氏子数1,120人	創建動機：従業員の精神活動の中心とする目的で神社建立を企画したところ，居留民も参加，両者の合議による。
創立・沿革：康德2(昭和10)年8月地鎮祭，9月起工式，10月竣工，11月鎮座祭。	
当時の様相 <ul style="list-style-type: none"> ・西安神社跡地は，以前日本人町であったところだ。一部の中国高級技術者だけしか入れず，普通の中国人は立入禁止でした。 ・日本人は神社に参拝できたが，中国人は参拝できなかった。 ・維持費は，主に西安礦業所報国会の拠金により，同会庶務部が当たっていた。 	
位置（町の中心からの方位・高低差・見え）：遼源駅から北に伸びる現人民大街の西安区の高台に東山地域がある。この東山地域の日本人街（社宅街）の高地に神社は位置する。日本人街は，かつて周囲に有刺鉄線を巡らし，中国人は入ることができなかった。	
配置：本殿・幣殿・拝殿の構成であったと思われるが，「中本殿」と社誌に記されており，覆屋内に木造一間社流造の本殿が安置されていたのかもしれない。	
社殿の向き：西南西向き	参道の向き：東北東方向に社殿に向かう
社殿・構造形式 ：本殿（一間社流造） 拝殿（24.5m）：正面向拝妻に大きな蕨又様の日本風の装飾あり。鉄筋コンクリート造の外壁の腰を石張りとする。内部は格天井で，床は框ひとつ分しか上がっておらず，当初から土足仕様であろう。 本殿：木造，拝殿：鉄筋コンクリート造	
付属屋・付属物：鳥居・石灯笼・石碑・手水鉢（古写真によると屋形付）・石段	
現在の用途・住所：遼源鉱務局の再就職斡旋所として使用されている。 ・遼源市西安区東山	
戦後の沿革 ： 拝殿背面中央部分が突き出しており，その先に本殿があったものと思われる。調査が許されなかったため，詳細は不明であるが，改造後も鉄筋コンクリートの拝殿は残っているようである。古写真によると入母屋造平入の拝殿であるが，切妻造に改変されている（屋根の改変は7-8年前のことだという）。切妻の妻側壁上端部に垂木型が残っており元入母屋造であったことは間違いなからう。ただし，正面両脇の張り出しは後補であろうか。	
話者：①劉玉林	
資料：『十年史 満洲炭鉄株式会社 西安鉱業所』・『大陸神社大観』	
調査日時：2006年8月11日	調査者：津田・中島・堀内・尚

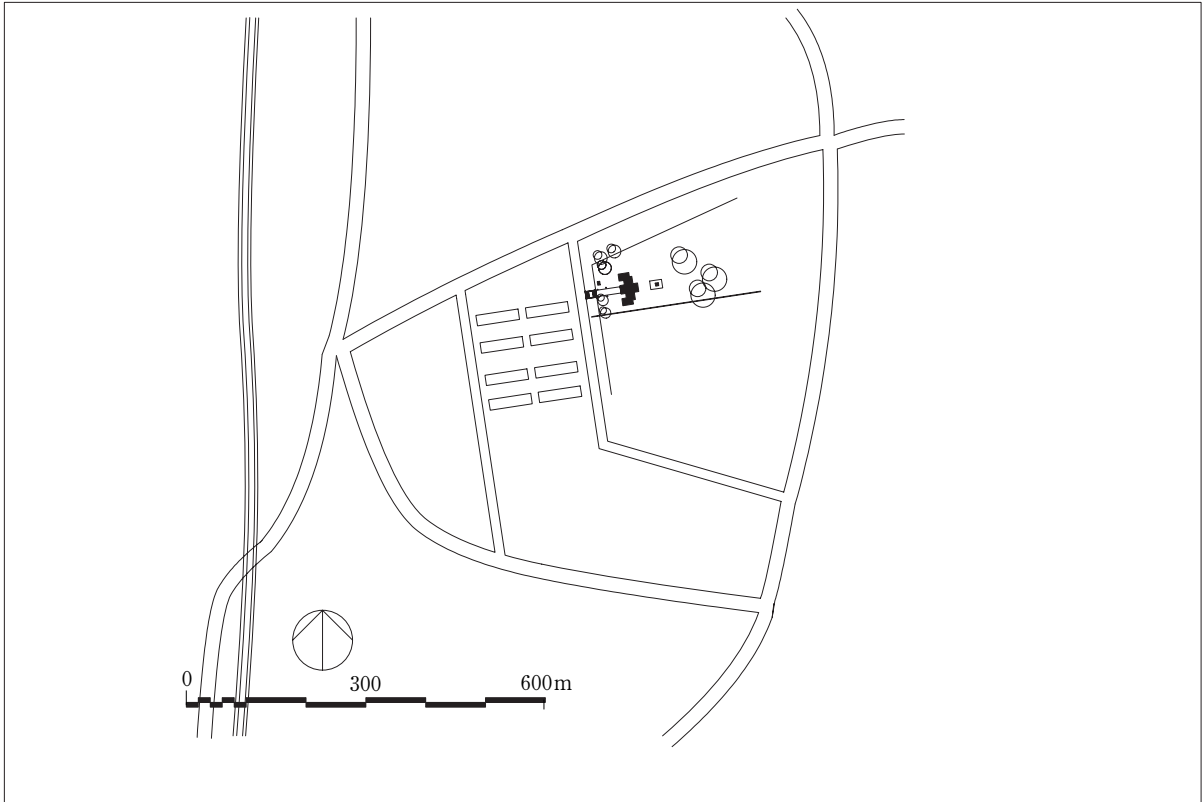


图 8-1 西安神社復原配置图

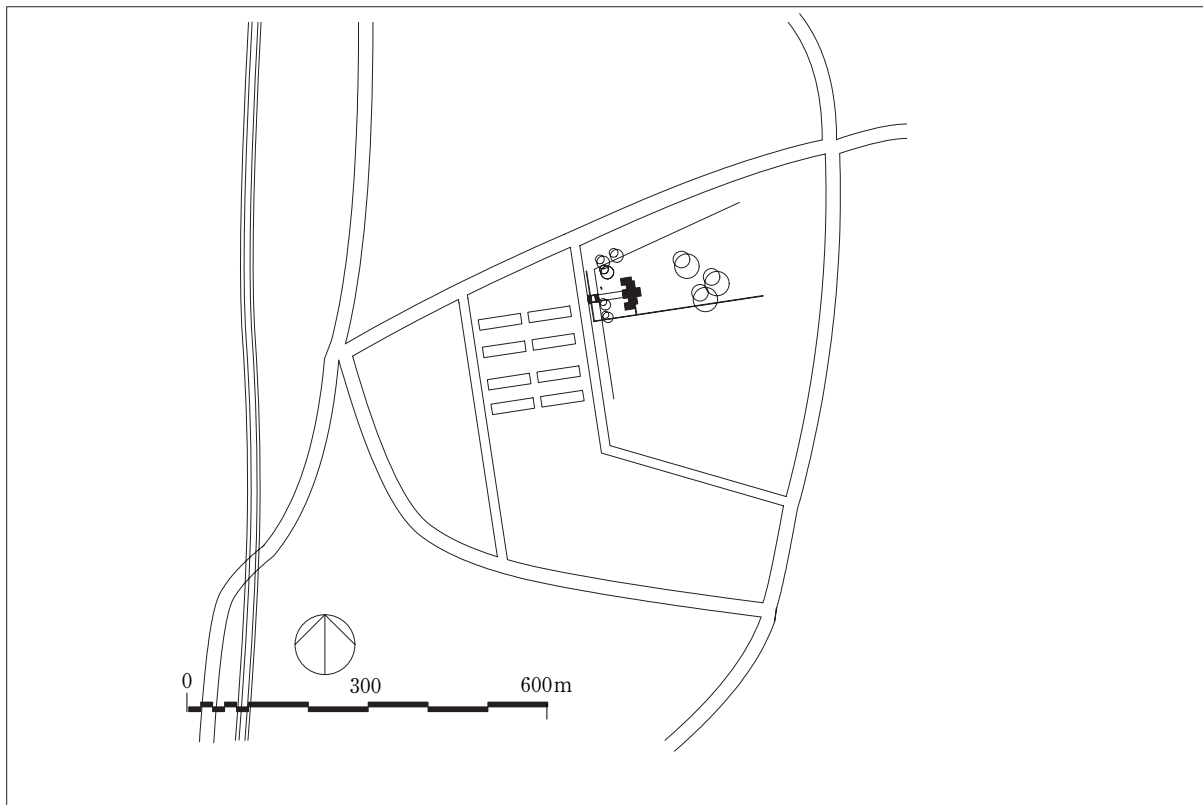


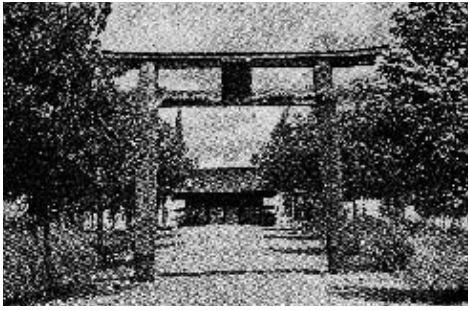
图 8-2 西安神社跡地現狀配置图



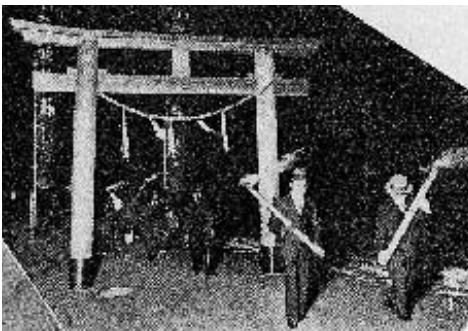
地図 8-1 「満洲五万分一吉林，奉天局地図海龍城十八号，西安縣」（昭和七年製版）西安神社付近縮尺1/50000を1/15000に拡大している。



地図 8-2 現在の遼源市地図の西安神社跡地付近



古写真 8-1-1 西安神社 (『西安鉱業所 十年史』から転載)



古写真 8-1-2 西安神社 (『西安鉱業所 十年史』から転載)。神社夜景。



古写真 8-1-3 西安神社 (『西安鉱業所 十年史』から転載)。手前に手水舎、奥に灯籠・狛犬・入母屋造の拝殿が見える。



現況写真 8-1-1 西安神社跡地遠望



現況写真 8-1-2 石段途中から見た西安神社跡地。旧拝殿が見える。



現況写真 8-1-3 旧拝殿。
元入母屋造の拝殿が切妻造に改変され、両脇に突き出した部分は後補。



現況写真 8-1-4 向拝部分。
向拝紅梁上の絵様。

西安神社



現況写真 8-⑤ 旧拝殿の背面。
拝殿の背面に弊殿が突き出ている。



現況写真 8-⑥ 旧拝殿妻面。
桁上端に垂木の痕跡が残る。元入母屋造であったことが確認できる。



現況写真 8-⑦ 正面入口奥の火頭窓様の窓



現況写真 8-⑧ 旧拝殿内部



現況写真 8-⑨ 残存する石灯籠の部位



現況写真 8-⑩ 残存する手水鉢

9. 建国神廟

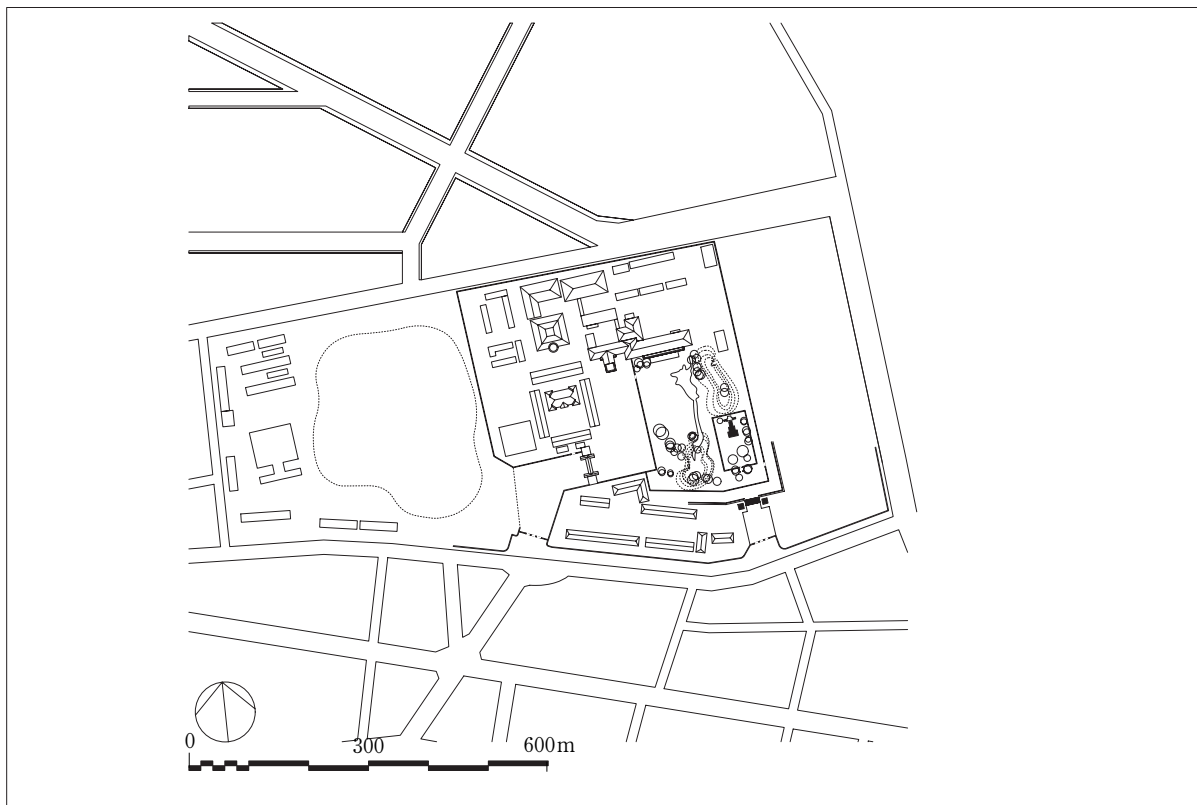


図9-1 建国神廟（宮廷府内）復原配置図

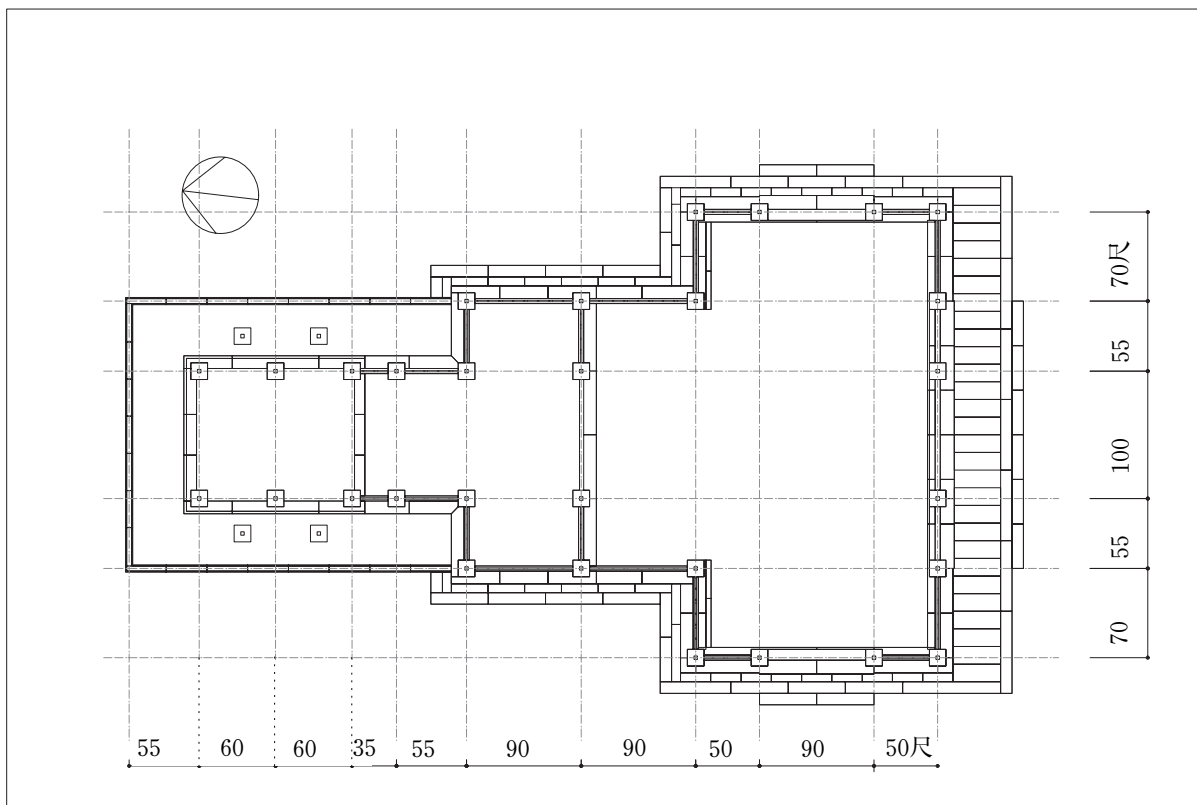
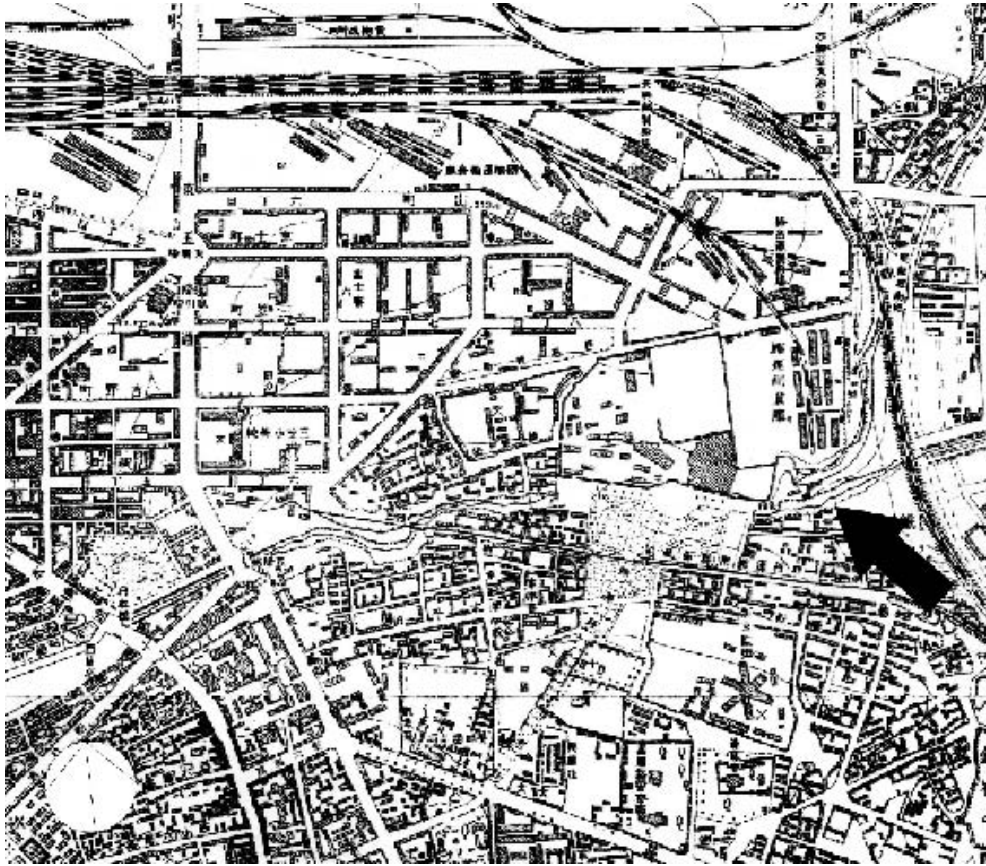


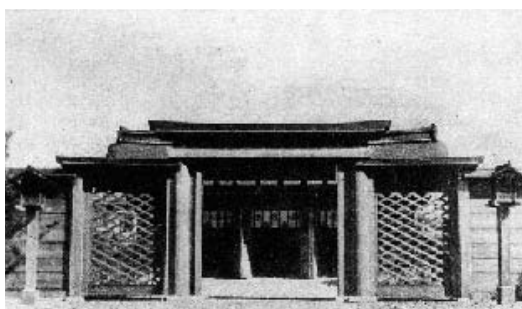
図9-2 建国神廟の礎石等実測図



地図9-1 「一万分一地形図新京近傍一號新京東北部」帝室付近



地図9-2 現在の長春地図偽滿皇宮博物館付近



古写真 9-① 建国神廟（『大満洲帝国建国十周年記念写真帖』から転載）



古写真 9-② 建国神廟（『満洲国祭祀府の最後』から転載）



古写真 9-③ 建国神廟（『満洲国祭祀府の最後』から転載）



古写真 9-④ 建国神廟をデザインした切手（『侵略神社』から転載）

10. 建国忠霊廟

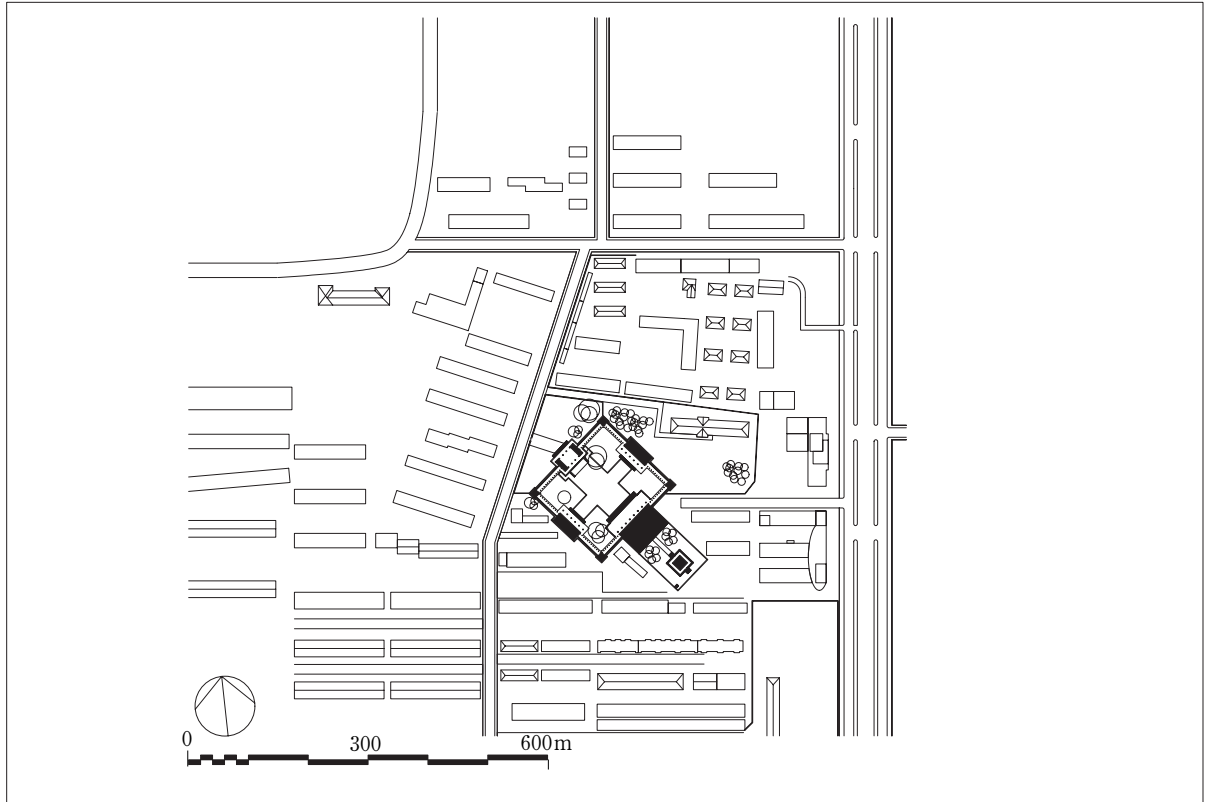


図10-1 建国忠霊廟現状配置図

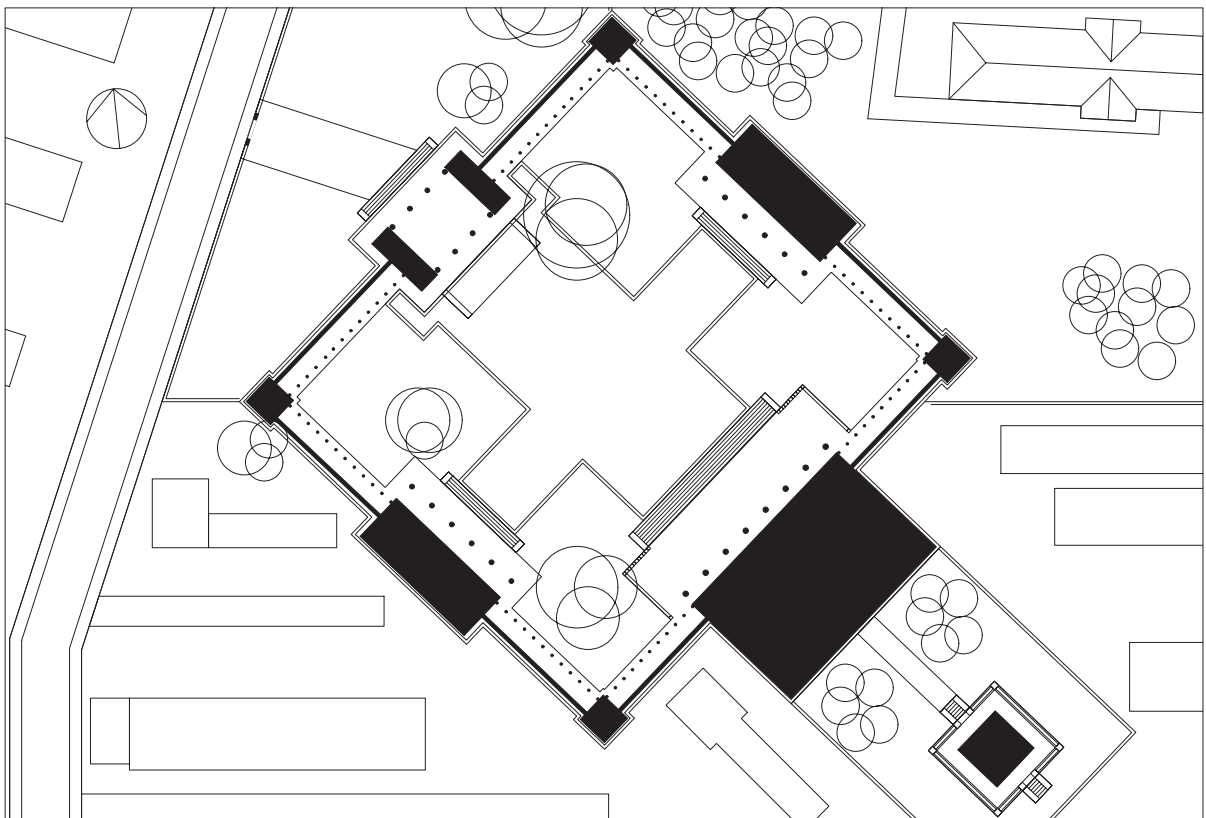
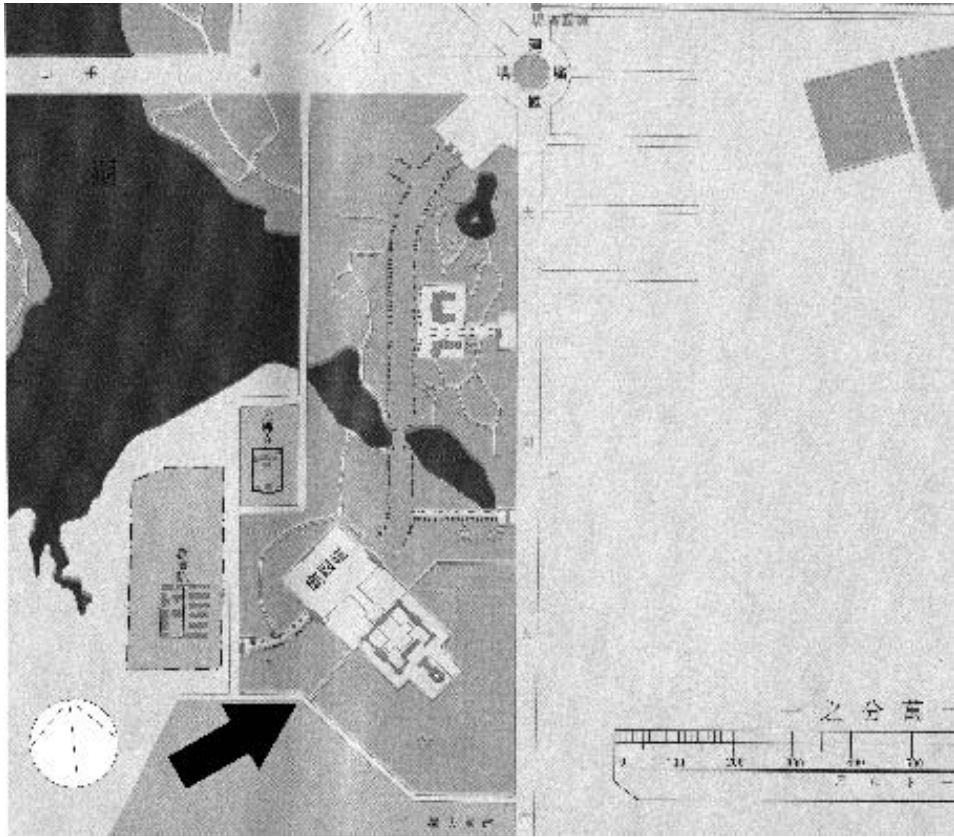


図10-2 旧建国忠霊廟現状平面図（拡大）



地図10-1 『最新地番入 新北京市街地図』建国忠靈廟付近

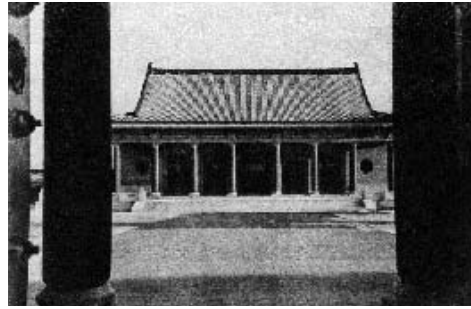


地図10-2 現在の長春地図建国忠靈廟跡地付近

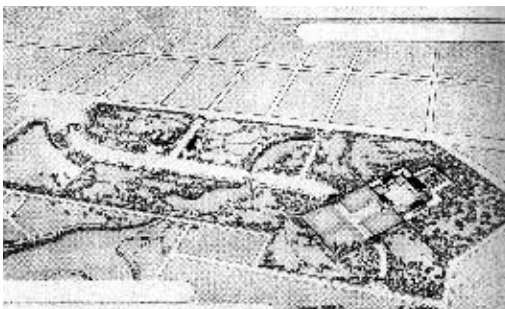
建国忠霊廟



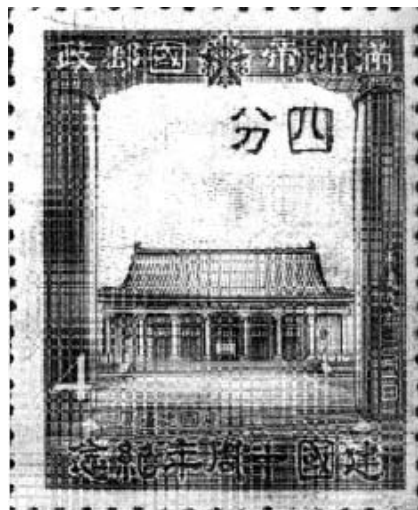
古写真10-① 建国忠霊廟（『侵略神社』から転載）



古写真10-② 建国忠霊廟（『大満洲帝国建国十周年記念写真帖』から転載）



古写真10-③ 建国忠霊廟鳥瞰パース（『侵略神社』から転載）



古写真10-④ 建国十周年紀念の満洲帝國郵便切手（『侵略神社』から転載）